

麻生浩郎著

川柳漫談

弘文社版





「おん人

格好をした

鶴の置物を買はせよ

よったせし

「へへい おん人 格好の

鶴を買はせよ

ましたかいし

成リ下リ先生  
成リ上リを  
ぞしるの圖  
あき  
90

## 序

私の半生は川柳の生活であつた。私は私の好きな川柳が、いつまでも謂れなく、社會からは誤解され、文壇では下積にされてゐるのを慨し、ここ六年間はその繩縛から解放されることと、弘く社會に川柳を浸潤せしめて、ほんとの川柳がどんなものであるかを知つて貰ふため、川柳の社會化運動に没頭して來た。そのためには雑誌「川柳雜誌」の刊行を續け、機會を促しては東西南北に足を運んで、體驗が生む力強い川柳に就いて説いた。近ごろ漸くその曙光が見えて來た。しかし前途はまだ遠く、遠い。撓まずにその道に精進したいと思つてゐる。

この小著がその運動の一助ともなれば幸である。

岸の里の寓居にて

著者識

**川柳漫談** 二十九篇の内「盗人」「女の三十」「賽錢」は『週刊朝日』(昭和四年)へ、「川柳染ちがひ」は雑誌「世間」(大正十四年)に、「ト昔前の大阪見物」(大正十一年)は大阪日日新聞に掲載されたもので「川柳染ちがひ」と「ト昔前の大阪見物」とは「川柳漫談」のお添物として掲げた。その二篇の中に挿入してある川柳はすべて拙吟である。

「ト昔前の大阪見物」は多くの俗語と方言とで書いたために、ほんとの大阪が出てゐるやうに思ふ。當時の大阪はまだ東西南北四區の大阪で、大大阪となつた、約八年後の今日、回顧して見るに甚だしい變り方である。その頃はジャズの大坂ではなかつた。藝者に取つて代つたやうなウエートレスの大坂ではなかつた。レヂューヤトーキーの大坂ではなかつた。播重がなくなり、京吳が暖簾を掛け替へ、三越が焼太り下駄穿き時代が現出してゐる。記事中の人で既に故人となつてゐる人もある。その變り方については一々説明をしないことにした。寧ろ讀者自身で點檢された方が興味が深からうと思ふ。

「川柳漫談」の装幀及挿繪は吉岡島平氏「川柳染ちがひ」と「ト昔前の大阪見物」の挿繪は柴舟氏を煩はした。「川柳漫談」中、句主や知己柳友の敬稱は一切略した。諒とされたい。(略)

川柳漫談

臍の緒

1

盲人の徽章

5

蛙

12

夫婦喧嘩の解剖

15

都會地獄

28

君も僕も死ぬ話

33

レディの書置  
メイド

46

戀を追ふ一人者

指切

鼠

盗人

女の三十

賽錢

重役

プファの糞の外交

幽霊の靴

49

54

58

70

75

80

83

100

109

近眼の微苦笑	113
傘の行衛	123
猫の寫眞	133
愛の巢	140
保險屋と新聞屋	146
贗趣味	153
床下の佛像	164
無口	174
附貸の犬	183

鼻の修業

193

なりさがり魂

201

校長さんと煙草

209

私の墓

226

○

川柳染ちがひ

233

一ト昔前の大坂見物

257

# 川柳漫談

麻生氏の像



臍の緒

丸々と太つた男の子を裸にして椽側で遊ばせて置いて見給へ。ものの一時臍も経つとカタンとも音がしなくなる。

それを母親が案じてのぞきに行くと、こどもは頻りにお臍を玩具にしてゐる。これは誰でもよく経験することだ。

こどもをお湯に入れてやると、お腹の眞中にある此の不可思議な凹地にお湯を湛えて遊ぶ。

こどもにとつてお臍ぐらゐ不思議なものはない。大人にとつてもお臍は一種の魅力を持つて君臨してゐる。お臍のない裸體畫にはしまりが無い。お臍のないお腹を想像すると、

なんだかお化けのやうな感じがする。それが美人だつたら物凄くて近寄れないだらう。

人間の花落らしい臍の穴

といふ狂句があるが、人間一度は臍について考へさせられるものと見える。

さる家でこどもが生れた。一週間ほどするとほろりと臍の緒が落ちた。妻君が其の臍の緒を半紙に包んで枕元に置いたが二三時間経つてふと氣附くと、確に枕元に置いた筈の臍の緒が影も形もなくなつてゐた。

驚いたのは妻君である。見る／＼うちに蒼くなつてしまつた。時計や指環なら諦めも出来る。又買へもするが、臍の緒ばかりは幾ら百貨店でも賣つてはゐない。やかましやの姑さんの顔が大映しのやうに妻君の眼に迫つて來た。妻君はブルブルと慄へた。

早速、部屋掃除をした女中を呼んだ。

「こゝに置いといた紙包を知らないかい？」

「いゝえ。」

「でも、さつき此處のお掃除をしたのは、お前さんでせよ。」

「はゝ。」

「では、きつと外の紙屑と一緒に棄てゝしまつたんだよ。一度屑籠を探がして御覽。あれには赤ちやんの臍の緒が包んであつたんだよ。」

女中も驚いた。さう云へば、そんなものがあつたやうな氣もする。しかし、世の中は何れかとくひ違つてゆくものだ。その紙屑は三十分も前に屑屋の手に渡つてゐた。早速手分けをして屑屋を探がしたが、時既に遅しで、空しく使ひは戻つて來た

妻君は

「困つたネ〜。」

を云ひ續けた。遂ひに思ひついたのが臍の緒の替へ玉であつた。

産婆に一部始終をうちあけて、

「變なお顔ですが、どツか餘所さんの臍の緒を少し千裂つて来て下さいませんか。」  
と云つたが、この交渉はうまく纏まらなかつた。幾ら産婆でも餘所の臍の緒を半分胡魔化す譯には行かない。

その後どう結末がついたか知らないが、何んかの時には嫁の落度の一つに數へられたことは云ふまでもあるまい。

盲人の徽章

じんめりと露をふくんだ夏の夜の十一時過ぎ、芝居が果て、閑のない話。

我橋筋でカーツーンニストのSと、ユーモリストの斯くいふ候とがヒヨツコリと出逢つた。二人は戀人にも出逢つたやうに、往來の眞中でピッタリと寄り添ふて立話をはじめた。

しかし若い血の燃えるやうな男と女との立話でないためか、餘り人眼をひかなかつたらし。

といふのは、突然Sの白靴をイヤといふほど踏みつけた男があつたからである。Sは天下の往來に、こんな大きな男が轉ろがつてるのが見えないとは、如何にも怪しからん

と云はんばかりの顔色で振り返へり、何か口の中でブツブツ云つた。ところが對手は頗ぶる愉快な氣味で頭を下げた。

Sの眼には逸早く對手の杖が映つた。一遍にガツカリした顔をして、

「仕方がないねえ。」

と私に向つて云つた。

私は「盲目には勝てず。」と標語らしいものを口の中で繰り返へした。二人は眼と眼で笑つて靜に歩き出した。これは大正九年ごろの話だ。

それから少しく後のこと、私は何かの用で中央公會堂へ行つた。ところが全國から盲人の代表者が集つて大毎の後援で全國盲人大會を開いてゐた。大毎からは中村憲吉氏が出て來て世話をやいてゐた。

こんなに多數の盲人が集つて一體何を話すのであらうと好奇心に驅られて自分もその中へまぎれこんで様子を見てゐた。

ところが面白いことには、それ等の盲人達は何れも會場へ遣入つて來た時に、眼開き  
 がするやうに徽章を渡してゐる。だから入場して椅子についてゐる連中は、みんな胸に白  
 い徽章をつけてゐた。そしてつゝまじやかに俯むいてゐる人もあれば、盲人らしく仰向い  
 てゐる人もある。斜かひに向ひて耳をそばだててゐる人もある。隅の方では今遣入つて來  
 たばかりの盲人に徽章をつけてやつてゐる盲人もある。

僕は全く奇異の感にうたれた。あの人達は、あんな徽章をつけて一體誰に見せるんだら  
 う?と思つた。

それは大毎の眼開き達に見せるものであつたかも知れない。けれどもそんな徽章をつけ  
 なければ盲人であることが判らぬやうでは、眼開きといふものは不自由なものに違ひない。  
 會議に移つてからは、ますます驚かされるばかりであつた。彼等も又眼開きをするやうに  
 口角泡を飛ばして堂々と論じるではないか。

按摩業を盲人の専業とすべく政府に請願するの可否とか、鍼灸も聽診器を持つ以上醫師

草徴の人盲



法に準據すべきものだとか、選挙の際盲人の投票は點字で認むべきだとか、點字の教科書問題から點字新聞の問題に至るまで彼等の提出したそれ等の議案なるものにも驚かされたが、いづれも見當違ひの方向を向ひて論争を續けてゐるのには思はず吹き出しかけた。

こゝでは衆議院のやうにつきあひは仕ない。もつとゼントルマンらしく審議を行つたが、矢張り議長々々を連呼するし、あちこちから「議長何番ツ。」と叫んで立ちあがる。云ひ忘れたが、各自の席には三角形の番號札が立てゝあつたやうに思ふ。

「按摩業を盲人の専業とすべく政府に請願することは盲人の屈辱である。」  
と叫んで、大いに盲人の意氣を見せたため其の議案は絶對多數で否決されたと覺えてゐるが、それは逆も凄じい會合であつた。私は生れて以來、こんな不思議な集りを見たことがない。夫れ等の人達の中には大正の保己一を以て自ら任じてゐる人もゐたであらうし、多くの澤市もゐたことであらう。

そんなことを考へてゐるうちに思ひ浮かんだ盲の句を列べて見やう。尤も盲自身が詠ん

だ句ではなくて眼開きが盲を詠んだ句である。

多聞に

泳いでるやうに盲は馬をよけ

といふ句がある。眼開きには滑稽に見へるかも知れないが、帽子を風に取られて追ひかけてゐる眼開きの多いことを思ふと笑はれもすまい。かすをの

保己一も憂鬱になる春と秋

の句を読むと有識盲人のなやみの人一倍強いことを思はされる。刀三の

年頃の盲へ赤い帯をさし

に至つては盲目の娘を持つ親心が想像されて、そぞろに涙の湧くを覺える。生れながらの盲ではなからう。紋太に

ちんまりと坐つて盲風を聞き

といふ句があるが、何んといふ淋びしい句であらう。

この句から、若くて死んだ四洋のことが思ひ出される。色彩の幸福を奪はれてゐた彼は一二三つ年下の妹に手を引かれて来て、ちんまりと坐つて作句してゐた。それは風を聞いてゐるやうな淋しい姿であつた。妹も兄の世話をしながら時々作句してゐたやうに思ふ。四洋が死んでから父の花樂も彼の妹も薩ツ張り姿を見せなくなつた。今は何處でどうしてゐることか。既う十一年も以前の話である。

## 蛙

蛙は戀もすれば尿もする。古池へ飛び込んで俳句の革命もすれば柳に飛びついて忍耐力の養成もする。詩でござれ、歌でござれ、童謡でござれ、俗謡でござれ、どこへでもひよこくとあのぶさいくな姿をあらはしては常に詩人と握手をしてゐる。

古池 や蛙 飛び込み 水 の音 俳句

古池に蛙飛び込み浮いてゐる 川柳

一つ宛かへるをしまふ水の音 同

きやつといふ娘のあとに蛙とび 同

一人子に草をわかつて赤がへる 同

俳句では寂びを教へ、川柳では滑稽を示してゐる。

古池に蛙飛び込み浮いてゐる

は芭蕉の俳句から脱化した寫生句で、輕みと皮肉味を横溢させてゐる。

一つ宛かへるをしまふ水の音

は人の足音に驚いて、次から次へと飛び込む態を巧みにスケッチした句で、川柳的な觀方を示した句だといふことが出来る。

きやつといふ娘のあとに蛙とび

はすましこんだ娘さんの魂を寒からしめ、

一人子に草をわかつて赤かへる

の句には人情味がよく出てゐる。

この滑稽な飄逸な而も人情味たつぷりな詩人さまも曾てはお玉杓子にすぎなかつたのであるが、尻がむづ／＼して、いつのほどにかしつぽが短くなり、續いて手や足が生へ、水

から陸へのそくとあがつて来て柳に飛びついたり、蓮の葉に飛び乗つたりして、廣い世  
界が水以外にあることを知るやうに、われ／＼人間も、つねに何んとかして何んとかせね  
ば子子の尻振り踊で此の世におさらばをしなければならなくなるだらう。

夫婦喧嘩の解剖

夫婦を鴛鴦に譬へるのは既う陳い。寧ろ二本の箸に譬へた方が適切だ。時には途中からボキと折れたり、二つに裂かれたり、さくと中から妻揚枝が出て來たりするところなどもよく似てゐる。仲のよいのも夫婦だが、仲の悪いのも夫婦だ。こゝからいろんな川柳が生れて來る。葭乃の句に

繋ぐ手の羞かしいほど月が冴え

といふのがあるが、これは新婚當時の句だ。何んでも彼でも二人の世界であることが嬉らしい。地球も二人のために回轉してゐたのだ。太陽も二人のために輝き、月も二人のために照つてゐたのだ。亭主思ひの葭乃はその後も、

呑んで欲しやめても欲しい酒をつぎ

といふ名句を吐いてゐる。武子の句に

亭主とは思へぬほどに酔ひつぶれ

といふのがあるが、酒呑みの亭主をもつた妻君はみんな巧い句を詠むものだ。

はらのたつすそへかけるも女房也

これは「柳樽」の三篇にある句である。もしか戻つた時に、寝込んでゐてはと、女房の心づかひも上の空、明け方近くにどんく叩いて、ア、疲れたと、そこへごろ寝をしてしまふ。いそぎの用は兎も角も、好きな女に逢ふて来て、あゝ疲れたでもないのだと、思へば思ふほど腹が立つて仕様がなけれど、ひよつと風邪でもひいてはと、そつと裾へかけてゐるのも女房なればこそである。情味のある句だ。こんな時には何んにも云はない方がいゝ。古句の

どうしても泊つて来たが亭主負け

である。

寝た形りで居るはきれいなりんき也

これも「柳樽」にある句だ。

戀に上下の隔てがないやうに、情氣に身分の上下がない。相當の身分の人でも情く人は大いに情くものである。情氣は必ずしも女に限つたものでもないが此の句などは句振りから見ても女の情氣を詠んだ句である。

しかし身分柄やい／＼と胸倉を取るわけにも行かず、苦しい思ひをしながらも、寝た形りでゐる情氣もあるのである。この句などはそれだ。

ところが、下層階級になると、さうした遠慮は反つて水臭く感ずるのである。萬事が辛口でゆく。愛することも二人なら喧嘩するのも二人である。しかも猛烈である。

これは友人のKから聞いた話であるが、既う十幾年も以前のこと、或る長屋で、

「アレーツ、どなたか来て下さい。」

と時ならぬ金切聲が聞えた。

ところが向ひ三軒兩隣りでは心得たもので、

「フム、また例のが始まつたんだなア、まさか殺しもすまいし、殺されもすまい。そのうちに誰かが行つて何んとかおさまるだろ。」

と澄ましたものだつた。さうなると一番近い隣りが満更棄てゝも置けず、ノコノコと出掛て行くことになる。出かけるといふてもその家を出て、隣りまでは十歩のうちにある。行つて見ると、妻君が馬乗りになつて亭主が組み敷かれてゐる始末。流石に女房は女だけに亭主に馬乗りになつてゐながらも近所の人の助けを呼んでゐるのである。

早速、二人を引き分けて「阿兄さんも阿兄さんや、そんな手荒なことをしないで」とは云つたものの、手荒なことをしてゐたのは姐さんなので、あとは口の中でムニヤ／＼と噛み砕いてしまつた。兎も角も時の氏神をつとめたからには、事の起因を聞かされずには済まない。聞いて見るとザツト斯うである。

妾わたしといふものがあるのに、亭主ていしゅが外の女まへに色眼いろめを使つたのが怪けしからぬ。それに歸かへりが遅おそかつたのは乾度きつと女のところへ寄よつて居ゐたのに違ちがひないといふのが女房にようばうの云いひ分ぶんで、つまり古句こくの

風吹けばどころか女房大あらし

であつたのである。亭主ていしゅは亭主ていしゅで俺わしが留守るすに、男おとこが來きて居ゐたに違ちがひない。第一だいいち坐布團ざぶたんの置おき場所ばしよが變かはつてゐると事ことも細こまかい嫉妬やきもちが振りから生うまれた夫婦喧嘩ふうふけんくわであつた。

こうした喧嘩けんくわに限かぎつて大風たへかう一過くわ、濟すんでしまへば光風霽月くわふうせいげつ、オイ一杯はいつけて呉くれと餘外よその見る眼めも美うらやましいやうな夫婦仲ふうふなななのである。古句こくに

仲直りもとの女房の聲になり

といふのがあるが、こんな喧嘩けんくわにウツカリ下した手てな口くちでも利きかうものなら、いつくまでも恨うらまれるのである。

また、こんなものもある。或あるる若い夫婦わが、しかも新婚しんこん一年ねんい以内ないの夫婦ふうふで子このない氣樂きらくさは

主人公が勤先の休日を利用して樂天地へ遊びに行つた。ところが演藝を見てゐる間にフト主人公が黙つて椅子から離れたので妻君も理由は判らぬものゝ主人公が立つたので自分もついて歸つて了つた。それから主人公の機嫌が莫迦に悪いので、どうした譯かサツパリ判らず妻君は妻君で不愉快な顔をして一日過ごしてしまふ。あとで判つたその理由が面白いこれは若い妻君の特に氣をつけねはならぬ話だから、ヨク置えて置き給へ。その妻君がかけた椅子の横へ若い男が來て腰をおろしたのでさうだ。ところが、其の男の腰が妻君の腰に觸れるので、若い亭主は嫉けてたまらず、演藝をヂツと見てゐる氣がせぬので直ぐに歸つたのださうだ。若い妻君たるものウツカリ男に口もきけない。電車に乗つても立つてゐるか、老婆と老婆との間ででもなければ腰を降ろせないわけである。

こんな詰らない原因が夫婦喧嘩を構成して行くのであるから、役者を夫に持つた妻君や女房を仲居や藝者にしてゐる夫が倍氣から喧嘩の火花を散らすのは無理のない話である。箸のこけたやうな事件から離縁話が持ち上つた話なら數へ切れぬ程ある。

次に自分が立會つた夫婦喧嘩の中で尤も珍らしい現代式な奴を御紹介せう。

世界戦争も峠を越し、米國のウキルソンが仲裁者として乗り出したころの或る夜のこと、私は友人のO法學士を訪問した。ところが心やすだてに平常のやうに二階へ上つてゆくと、室内の風雲が頗ぶる急であつて、まさに夫婦は交戰状態に入つて居る。我輩も豫期せないウキルソンの役廻りがついたので兎に角その原因を聞いて見た。ところが事の起因はホン一寸した間隙にあつたのであるが、いやしくも知識階級である。事は男と女の争鬭となつて重大化したのであつた。

夫君は夫權の絶對權を主張して一步も譲らず、妻君は妻君で夫權を侵したことはないと釋明之れつとめたが、遂には「是れ位あやまつても承知してくださらなければ容して頂けません。」と之れ又仲々の強硬派である。

この法學士センセイ頗ぶるつきの朝寝坊で、特に勤務先の近くへ住み、勤務時間のギリギリまで寝てゐるといふ始末。ところがなんかの拍子に女中に逃げられて妻君自ら朝餉の

仕度をしなければならなくなつたので、常日頃より早く起きねばならぬことになつた。

○君にしても、毎日のやうに妻君に起されるのも苦痛なので或る日のこと眼覚し時計を買つて来て、コレなら大丈夫と寝込んだまではよかつたが、妻君も○君より一時間先きに起きねばならないので、萬一寝過してはとの心配から、○君のかけて置いた眼覚しが一時間さきに鳴るやうにして、チリチリツと鳴りかけると、直ぐ様跳ね起き、○君が起きる時間かんに鳴るやうにして置く。

ところが、○君は妻君おつくんが起きる時にチリチリツと鳴る眼覚しが耳觸りになつて仕方がな  
 50

「ツラ／＼考へるまでもなく、俺の錢で俺が買つて来た眼覚しである。妻君が勝手に使用して俺の目的を不可能ならしめるのは所謂夫權を侵すものである。斷じて許すことは出来な50」

と、積み積つた肝癩玉を破裂させたのである。

妻君は妻君で

「一時間も先に起きるもの身になつて呉れたら、時計を使用する位は許して呉れてもいゝぢやありませんか。それもチリツツといふたら直ぐに止めて置くんですから、それ程耳觸りにもならないでせう。だから一時間も先に起きるものに同情して欲しいと云つても、チツとも聞いて下さらないの。」

といふ。詰りこれを大きく云へば新舊思想の衝突とでも云ふのであらう。流石のウキルソシも大いにその調停には骨が折れた。

○君は時々夫婦喧嘩をやる。時には古句の

たま／＼はよいと亭主は太く出る

の、遊びの喧嘩もやるが、多くは奇抜な喧嘩で我輩を驚かせる。或る夜の如きは

「兎に角歸れ、云ふことがあれば法廷で争おう。」

などと、四角張つてゐる時もあつたが、未だに一緒に暮らしてゐるところを見ると、夫婦

喧嘩といふものは面白いものだと思ふ。

或る警察の司法主任に聞いた話であるが、或る交番の巡査のところへ夫婦喧嘩をするときまつたやうに轉げ込んで来た妻君があつた。

それが、いつでも殺してやるとか、殺されますとかいふ騒ぎなので、その巡査もうるさくてたまらず、

「そんなに喧嘩ばかりするのならいつそのこと離縁れてしまつたらどうだ。」  
と云つたところが、

「離縁られる位なら、喧嘩までして旦那に御迷惑はかけません。」  
と云はれて、流石に巡査も苦笑したさうである。

夫婦喧嘩の味は又格別で、カルピスの味の比ではないことが、この話でも判る。餘外の喧嘩ばかり彼是云つてゐると、ウツカリ暗がりが増えてなくなるから、罪ほろぼしに自分等夫婦がタツタ一回経験した夫婦喧嘩を披露して酒の肴にでもして貰おう。

夫喧嘩の解剖



大體自分と自分の妻君とは、小説で云へば相思の仲とか、アイボレ石鹼とかいふのでせうが、幾ら惚れた女房でも顔ばかり見てゐて腹が大きくなるものではない。我輩にしても三度の食事は矢張り喰べなければ爲すべき仕事も出来ぬわけです。しかるにです。我輩の妻君、我輩の顔ばかり見てゐる加減でも有りますまいが黙つてゐれば何時まで経つても食事を與へて呉れない。サア如何に忍耐力の強い我輩でも食ふものを食はずには働けない。こゝに妙計を案出した。

それは外でもない。例へ不經濟でも仕方がない。爾今更に一家を設けてそこで食事をするといふことの宣言をしたのである。

これを聞いた妻君、更に一家を設けるのはいゝが、食事の世話をするのは屹度女に違ひないとまで想像して來ると、コワー大事とばかりうちうなづいて

「では、これから屹度間違ひなく食事をいたしますから家で喰べて頂戴。」  
と早や涙ぐんでゐる。

「イヤ、もう何んといふても、誰が挨拶をしても男が一旦こうと云ひ出したからには後へは引かぬ。」

と妙なところで男をかつぎ出して腹が減るのもかまはず、遂々一日空腹罷業をしたところ友人のKが中へ這入つて「まあ〜」といふやつさ。これも古句の

惚れてゐるだけが女房の弱味なり

でよかつたものの、ではさうして下さいなどと出られた日には、男の意地で離縁れてゐたかも知れぬ。

去つたあす物を探すにかかつて居

「柳樽」の二篇にある句であるが、何んかの拍子に男はこのみじめさにぶツつからねばならない。昔から男は家の事にこせ〜するものでないと云はれてゐるだけに家のことと來たら手拭一本、紙一帖からして何處に仕舞ひ込んであるのか判らない。少々欠點があつても女房は大事にすることである。

都 會 地 獄

一夜セロ一也と正札でも附けてやりたいやうな女がイヤにすましてあるいてゐるのが癩にさわる。エレヴェーターが人間を無闇に詰込んで上つたり下つたりしてゐるのが、いかにも勞働者を嘲けてゐるかのやうに思へて癩にさわる。民衆的である出雲屋までが機械化して、お客様をエレヴェーターで押しあげ、機械化された仲居が、それも仲居と女給の混成品のやうな仲居が無表情で機械的に料理を運んで來るのが癩にさわる。機械はすべてのものを冷めたくする。ダンスとか稱して男女の押し合ひを見せつけられるのが癩にさわる。

足、一度往來に出づれば、ヤレ左を歩けの右を歩いてはいけなひのとうるさいこと限り

なしである。西洋の漫畫に、交通巡査を眺めた子どもが母親に若し自動車がなくなつたらあの巡査はどうするんでせうといふのがある。いゝ面の皮である。

家といふ家が箱へ穴をあけて右の箱から左の箱へ移るやうな殺風景な状態である。街路には殺人電車、殺人自動車、殺人自動車が縦横無盡に悪魔の手をひろげてゐる。シヨウウキンドそのものは人間の眼を欺かんとしてデコレーションの限りをつくしてゐる。夜の街は灯をもつてすべてを胡麻化し去らうとしてゐる。それをなんぞや、赤い灯だの青い灯だのと讚美するに至つては彼等も又飛んで灯に入る夏の虫ではなからうか。

ツラ／＼考ふるまでもなく人生の若さや潑刺さを犠牲とすることを、すこしも呵責しないのが都會が持つ惨虐性だと云はねばならない。

田舎者がノコ／＼と憧れて来る都會、都會人が我が物顔に誇りつゝある都會こそ、實に地獄の前衛に外ならないのであるが、神ならぬ身の誰一人そこに氣づかず蠅取紙にくつついた蠅のやうになつてしまふのである。

十人、百人、千人、萬人、百萬人とむらがり來つて有限のものに飛びかかつて我れこそ獅々の割け前をしてやらうとする者が都會人なのである。彼等はどこまでも體裁のいゝ顔をしてゐる。而も紳士であり淑女であると自らをあざむき、都會生活の濁流に泳いでゐる。彼等は目前の死を忘れてゐる。死を忘るゝものは生を忘るゝものである。欺き欺かるゝ中に泳ぐもの、けだし地獄への道を辿りつゝあるものでなくて何んだ。

僕は近來、事務的に機械的に惡魔的にすべてを進行せしめられるべく餘儀なくされてゐる彼等の生活を惡むこと甚だしくなつてゐる。空を見てゐる生活、水を見てゐる生活、まづくらな庭の中に一人佇立する生活、ただ靜に故人と語る生活を思ふ時、精神的に都會生活に麻痺しつゝある人間を憫まずにはゐられない。

ああ、椅子も角張つてゐる。机も角張つてゐる。煽風機は虚偽の風を送つてゐる。電話は死したる聲を取次ぎ、ラジオは不愉快な雑音を送つて我等の生活を淨化すべき藝術さへも墮落せしめやうとしてゐる。

煙り多き大都會の市を見よ。その中央には幾條の線路が横はり、ごう／＼たる雑音に人間をします／＼變態ならしめてゐるが、しかもそれ等の塵埃と雑音の中に床几を持ち出して夕涼みをせしめるに至つては、けだし悲惨の極ではないか。呪ふべきは都會である。都會の機械化である。美醜善惡何事をも擴大すべき大顯微鏡下に都會を晒さんか、その醜惡虚偽に何人か正視し得るであらう。

しかしながら都會に生れ都會に育つた人達はあくまでも、それ等の醜惡の中に咲いた惡の華を讚美することをやめない。その證據には

かほるの句に

大阪は轢れかけても好い所

といふのがある。飯山の句にも

大阪のひろさ先妻にも會はず

といふのがある。

都 會 地 獄

かと思へば又おもまた

大阪を立退き際の岩おこし

毒仙

大阪でだまされたのも修業や

山雨樓

宣傳のピラ堺筋ごみとなり

眠聲

といふ都會地獄を裏書した句もある。

君も僕も死ぬ話

人間は時々死ぬといふことを考へる。別に考へても考へなくても、死ぬ時には死ぬのであるが、考へずにはゐられないのが此の問題である。

いつ死ぬだらう。どうして死ぬだらうと考へることは人間にとつて一つの楽しみかも知れない。又一つの恐怖心からでもあらう。津田梅子さんのお父さんは東京から鎌倉へ歸る汽車の中で眠つたやうに死んでゐられたさうだが、昨日までピチ／＼してゐた人がころりと死んでしまう人もかなり多い。さうかと思ふと死んだがために、まだ生きてゐたのかと思はされる人もある。死んで惜しまれる人もあれば、死んでやれやれと思はれる人もある。草や木が枯れるやうに、自然に枯れて死んでゆく人もある。自分で死を早める人もあれ

ば他人に死なされる人もある。

死んだことが問題になる人もある。問題にならぬ人もある。それは人間が偉いからとかあかんからとかいふ意味ではない。その死方の方法、時、場所等によつて違ふ。ヤレ國葬にしろとか勞働葬にしろとか云つて騒がれるのも、みんなそのためである。

自分も幾度か死にかけた。病気で死にかけたこともあれば、自分で死のうとしたこともあつたが、なか／＼死ぬるといふこともさう簡單には行かぬものと見へて、未だに死なずに死なされずに、こんなことを考へたり喋べつたりしてゐる。

近ごろ死んだ人では、西園寺さんの思はれものであつたお花さんがある。新國劇の澤正がある。舊勞農黨の山宣がある。

その他、何々博士や、何んとか會社の社長や、戦争の時でもあれば、大いに騒がれる何々大將もある。異國で自殺した軍人もある。その他、日日數へきれぬほど死んでゆく。

が、それ等の死の多くは、自分の家の猫が死んだほどにも響かぬ。最近流寒で死んだ人

達は竈が足らぬので、受付けたまゝ積み上げておかれた慘状である。まるで雑喉場の魚と同じ扱ひである。人間も死ぬと一つの物體として取扱はれることになつてゐる。これは人間のこしらえた法律でさうなつてゐるのである。だから積みあげられても不服も云へぬ。汽車でも電車でも人間を人間として扱つてはゐない。輸送すべき一箇の物體として取扱つてゐる。鐵道などの輸送規則をのぞいて見たまへ、さうなつてゐる。だから不平も云へぬ。

一步譲つて規則でさうなつてゐないとしても事實はさういふ風に扱はれてゐる。人間一個、市電では片道六錢である。かためて前拂ひをすると少しはまけてくれる。ただ普通の荷物だと仲仕の手をかりなければならぬが人間のお荷物は、勝手に轉げ込んでゆくだけの違ひだ。それもラツシユアワーと稱する時間になると、押し合つて勝手に轉げ込んでゆく。會社の方にとつてはまことに便利なお荷物だと云はねばならぬ。

それでゐて人間といふものは、いろんな理窟をつけて、勿體ぶつてゐるが、大きな目で觀てゐるとまことに笑止千萬な話である。

お花さんが死んでも、澤正が死んでも、山宣が死んでも、どうせ死なねばならぬものが死んだのだと思ふて、あきらめる。他人の事だとあきらめ易い。従つて涙一滴流さなかつた。尤も澤正の發病から臨終までといふ記事を椅子にもたれて讀んでゐた時には頬を涙が傳つてゐた。けれどもこれは芝居や映畫を見ても流れる涙と同じ涙で、僕の純情が流す涙だ。が、わが子が死んだ時には、ほんとに無常を感じた。何れは死ぬべきものが死んだのであるが、理窟ではいかぬ。私の父は私よりも先へ死んだが、私の子も又私より先に死んだ。私が先に死ななければならぬ理窟もなささうだ。私の父が死んだ時に焼場の空に黄ろい煙りが立ち昇つてゐるのを見た時には、何んだか變な氣になつたものだ。他人の煙りが、朦々と立ちのぼつてゐるのを見ても、紡績の煙りほどに私たちの心をしげきするものではない。自分の子どもの煙りだつたら、目をあけて見てはゐられないだらう。想像してもいやだ。すべては理窟ではない。長男のロンドンが死んだ時に、

子を死なし學校に子の多いこと

といふ句を吐いてゐる。學校の横に住んでゐた自分にとつては殊にその感が深かつた。なぜ、こんなに澤山なことでもがゐるのに、特に自分の子が死んだのであらう。あの中には死んだ方がむしろ幸福な子どももあるのであらうのにと、つく／＼思はされた。餘外の子が死んだ方がいゝなどといふ非人情な事を考へたわけではないが、運動場でワア／＼騒いでゐるのを見せつけられることは、かなり苦痛であつた。私は直ぐに引越してしまつた。この私のこゝろもちを汲んでくれる人は相當に多からうと思ふ。私は子どもを失つた人に悔みを云はうとは思はない。悔みといふものは、形式的なものだ。すらく／＼と巧く云はれれば云はれるほど、悔みといふものに對して反感をもつ。だから私は、そんな時には、悔みを云はない。なるべく悔みをいふことを避ける。悔みをいふよりも、一度来てくれ給へ、一緒に泣かうではないかといふてやる。一緒に泣くのが一番いゝ。お互ひに死んだ子のことを愚痴ツテ、涙が涸れるまで、泣くことにするのである。人前といふことを考へないで、泣くことが、一番慰められる。若しお互ひに寄つて泣くことが出来ない時には

二階に一人ゐて、死んだ子と話をすることである。夜が更けて來ると實際死んだ子が、いつの間やら自分の机の前に來て坐つてゐる。こんな時に私には詩が生れる。これが私の川柳なのである。

お父さんはやはり川柳々々と云つてるよ

お前がゐたらと思ひ出すと煙草ばかり吸ふ

お父さんはネ覺束なくも生きてゐる

日あたりのいゝうちだが物足りなさに變りない

信心をはじめたおツ母さんも可哀さうだ

お父さんの神經衰弱がわかるかい

湯さめするまでお前と話そ夢に來よ

これは、ロンドンの一周忌に私が、一人さびしく泣いてゐた時に生れた川柳である。

川柳と云へば滑稽なものだとばかり思つてゐる人に、滑稽や穿ちばかりが川柳でないとい

ふことをついでに知つておいて貰ひたい。

死んだ漱石が、こんなことを云つてゐる。浪の荒い時に和歌の浦へ行つた人は、和歌の浦といふところは浪の荒いところだと云ひ、浪の静かな時に行つた人は和歌の浦といふところは實に浪の静かなところだといふが、和歌の浦から云へば浪の荒い時も静かな時もあるのであると。川柳もこれに似て、穿ちの川柳にのみ興味をもつてゐる人、滑稽な皮肉な川柳にのみ興味をもつてゐる人は川柳といへば穿ちや滑稽が全部だと思つてゐるのであるが、それは大きな間違ひだ。

話が、妙な方面へ飛びさうだ。また、もとへ戻つて、悔みのところから出直さう。

「土園子」の第一卷三號（大正七年九月一日發行）に

しらじらしき悔みの淀ます

といふ句がある。これは八月一日に二女の御世子が死んだ時に詠んだ句であるが、そのころから私は世の常の悔みといふものに反感をもつてゐる。

ロンドンが死んだ時にも

まだ弟があるやうにいふ悔み聞き

といふ句を詠んでゐる。幾ら子どもが澤山あつたからとて、そんなものではごさいませんと云ひたくなる。

だす入りの一つ缺けてもがたがたし

といふ句を味つて欲しい。

被らない帽子があるに気がつまり

で、何を見ても、それが思ひ出の種とならないものはない。最近朝鮮である醫者が急死したため、その未亡人がこども二人にモヒの注射をして死に至らしめ、自分もモヒの注射をして自殺をはかつたことがあるが、その擧に賛成はしないまでも、こゝろもちはよくわかる。こんな時に僕はしみぐとなれる。

自分の子どもの死についてあまり多くを語りすぎたやうだ。ちと、しめつぽくなりすぎ

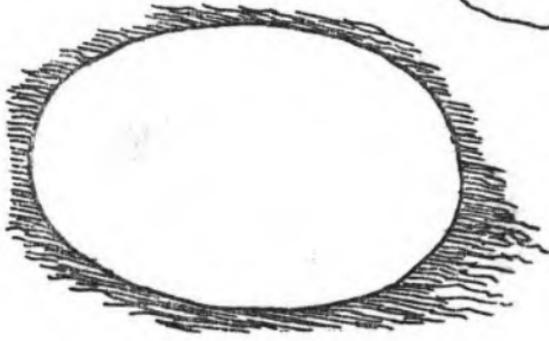
た。同じ死んだ話でも、昔の人の死んだ話なら、もつと樂に聞ひて貰へるだらう。

一昨年きせんの夏なつだつた、私は二柳にりゅう子し、万まんよし、かほるといふ社しゃの同人どうじん達たちと、大社たいしゃから松江まつえの方面ほうめんへ出かけた。松江では宍道湖しんじこ上に浮うかぶ一料亭いちりやうていでの歡迎句會くわんげいが深更しんこうに及んだ。雨後うごの月つきが雲間くもまをもれて湖上こじやうに、のびたり縮ちぢんだりしてゐて實じつに美しい夜よるだつた。講演かうげんをしてゐた私わたしは思おもはず、その美びにうたれ、李白りはくの死しを思おもひ出だした。

李白りはくは牛渚ぎゅうしよの磯いそを渡わたつてゐる際さい醉興さいきやうに月つきを捉とらへやうとして水みづに落おちて死しんだ人びとである。私わたしも、その夜よ、宍道湖しんじこの月つきを捉とらへやうとして死しねたら、どんなに幸福かうふくだらうと思おもつたのでそのことを語かたつたことがある。樂天詩人らくてんしじんの李白りはくでなくとも詩人しじんの詩しは或ある意味いみに於おける夢ゆめでなければならぬと思おもふ。詩人しじんは永久えいきうに死しなない。が、肉體にくたいは、おそかれ早はややかれ亡ほろぶそれも腐くつて蛆むしがわくやうな醜骸しうがいとなることは詩人しじんにとつて、あまりに慘酷ざんこくだ。詩人しじんの肉體にくたいは、夢ゆめのやうに消きえうせるがいゝ。李白りはくはいゝ死方とたをしてゐる。

空想詩人くうさうしじんのシエレイも、或ある日ひのこと輕舟けいしゅうに乗のつてレリシの灣わんを出でると忽たちまち嵐あらしに遇あひ、

君も僕も死ぬ話



二十分ばかりで晴れたが、遂に彼はかへらなかつた。十日してキイツの詩を懐ろにした骨ばかりが打ちあげられた。彼は何處へ行つたのであらう。春のやうな空想詩人シエレイの死も又空想的であつた。

キリストの死、四十七士の死、佐倉宗五郎の死、廣瀬中佐の死、乃木大將の死、原敬の死、大杉榮の死、Aの死、Bの死と次から次へと凡人非凡人の死を夢みることも私の一つの楽しみである。少しく古川柳の方をのぞいて見やう。

片棒をかつぐ夕べの河豚仲間

もう外に死人なしかと河豚を買ひ

死なぬかと雪の夕べにさげてゆき

これは河豚を食つて地獄に墜ちる人々を詠んだ句であるが、いづれも淋しい句だ。しんみりとさせられる句だ。多少の皮肉味も含まれてゐる。ある種の人達の人生が、まさしくと浮びあがつて来る。

死にやば死にやなどゝこはくゝ母はいひ  
四書五經讀んでしまふと息子死に  
姑の頓死のしらせ嘘のやう  
死にきつてうれしさうなる顔二つ  
死に兼ねる蒲團の下に二三兩  
代脈がちと見直した晩に死に  
近よつてやつと聞きとる辭世の句  
薄 墨 で 昨 十 九 日 娘 事  
醫者衆も辭世をほめてたゞれけり  
南無女房乳をのませに化けて來い  
書置は目つかり安いとこへ置き  
男めは逃げたさうなところをかけ

頓死の人をくすぐつて叱られる

二階から落ちた最後のにぎやかさ

橋の番たしかに投げた水の音

人魂の頓死と見えて矢の如し

いくらでもあるが、殆んど穿ち本位の句である。聞かされた時にはこの方が面白いかも知れぬが、「南無女房」の句をのぞいては死といふものを自分とは全く無関係のものやうに看過してゐる。風の吹き廻しによつては、意外に早く順番が廻つて来るかも知れないのに。

レディーメイドの書置

書置は名文よりも思ふたまゝを泣き乍ら書いたと思はれるものの方がいゝ。達筆よりも下手な字でくどくどと書いてある方がいゝ。それも當字が澤山あつたり、墨がにじんだりしてゐる方が相應しい。娼妓などの呂律の廻らぬのは一層いじらしい感じを與へられる。人間は死ぬ前になると純真な心に立かへるものらしい。

雉子郎（吉川英治）の句に

書置のやうな心でなぜ不孝

といふのがある。酔狂で書置の一つもかけるほどの人間は死ななくとも済むからであらう。

古句に

書置は目つかり安いとこへ置き

といふ句があるが、書置を紛失したために飛んでもない喜悲劇が生れることがある。胸に病氣をもつた或る青年が脈世自殺をする心算で静岡邊の鐵道線路の上を迂路々々してゐる間に、書置を落してしまつた。もつとも本人はそれを少しも知らず驚々たる列車の響きに怖氣づいて何處ともなく立ち去つた。

ところが其の翌日、同じ場所で一人の青年が鐵道往生を遂げてゐた。懷ろを探ぐつて見ても遺留品らしいものは何一つ持つてゐなかつたが、その附近で一通の書置が発見された。その書置に據ると京都の者であることが知れたので警察ではかたの如く遺骸の引取方を親元へ打電した。親元では驚いて早速叔父の何某が静岡まで駆けつけ、遺骸を袋毘に附して持つて歸つた。

これで一ト先づ片は附いたが、それから數年後のこと、色の蒼めた一人の青年がその警

察の受付へしよんぼりと姿をあらはした。

「私は數年前、どこその鐵道線路で飛び込み自殺をいたしました京都の何がしといふ  
ものですが……」

と、まで云ふと、受付は皆まで聞かずに逃げ出したといふ話があるが、レディトメード  
の書置で死んだ一青年こそ、實に天下の洒落者である。

戀を追ふ一人者

楽しいのも一人者だ。淋びしいのも一人者だ。空想と理想をちやんぼんにして、虹のやうな美しさを夢みるのも一人者の特權だ。下宿で愛の押賣りをされるのもいゝ。マチネーで戀人を物色するのもいゝ。すべては

戀の疲れズボンを敷いて寝る 刀三

である。淋しいのは遠く旅に出て病むくらゐなもので、それも思ひ出となれば美しくなる。置電燈の下で事業の設計をするやうになつては萬事窮すである。

「柳椅」の中に

寝てとけば帯より長いものはなし

寢どころをへし折つて置く一人者

ひとり者ほころび一つ手を合せ

といふ句がある。どれもこれも昔の一人者らしさがよく出てゐる。

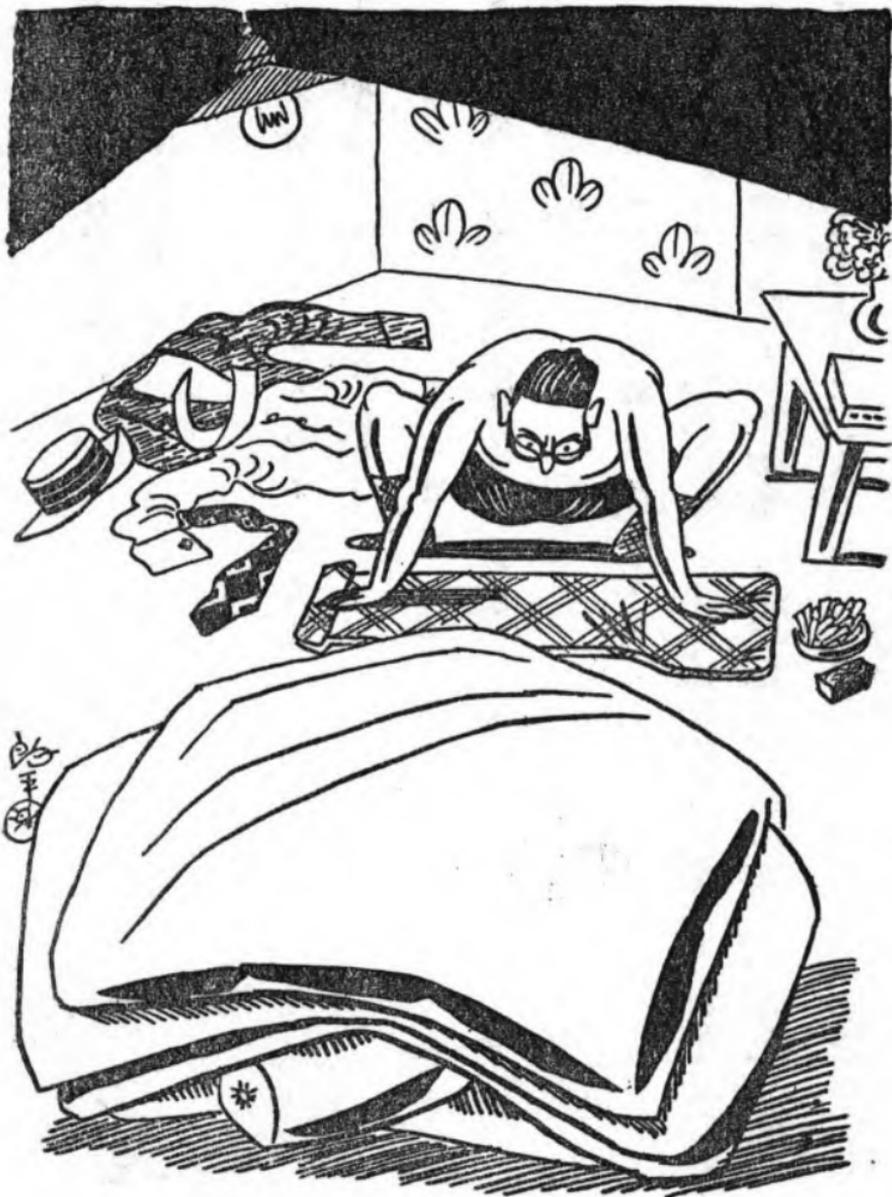
一人者は大體不精に出来てゐる。寢所へもぐり込んでから足袋を脱ぐくらゐはなんでもない。帯までも解く。

さて朝となる。起きあがつたが、寢どころを二つにへし折つて置くのが關の山、何處までも不精に出来てゐる。たま／＼綻びが出来ても不精と不器用さから人頼みで生きてゆく。

Wは永年苦勞さした元の女房を下駄が古びたやうに棄て、しまひ、世の一人者がするやうにAからB、BからCの女へと、その匂ひを嗅いで廻つたが、一旦妻帯した者にとつては單なる匂ひに満足出来やう筈がない。ひさしぶりに彼に逢つたら

「僕の背後からステツキを持つてついて来るやうな女はゐないかしら」と云つてゐた。次に逢つたら

戀を追ふ一人者



「病氣の時だけはかなはん」

と悲鳴をあげてゐた。

刀三の

裏切つた女よ人の子を生め

は一人者の傷ましい聲であるが、翠峯の

朝戻り父は叱ると思ひきや

まで来ると、一人者の利那主義が首を擡げてゐる。

「繪本柳橋」の中に

辨慶と小町は馬鹿だなア嬢

といふ句があるが、辨慶や小町を馬鹿と罵るほどに、二人者は一人者よりも幸福だと云へるであらうか。牛若と斬りむすんだ辨慶、七ツ道具を引ツ背負うた辨慶を一人者と呼ぶのは何んだか滑稽なやうでもあるが一人者であつたことは間違ひのないところであらう。

あの武骨な辨慶にも一人者の歴史を飾るべき美しい戀はあつた。辨慶は決して

プラトニツクラヴと號すや片思ひ 町二  
ではなかつた。

樽曳や葡萄色なる闇もよし 町二  
で、私生兒までももうけてゐた。

## 指 切

「柳樽」の初篇の中に指切を詠んだ句が三句あるが、三句とも佳い句である。

## 指の無い 尼を笑へば 笑ふのみ

といふのがその一つである。

戶外はこがらしが吹きすさんでゐる。比丘尼と二人火桶を圍んで、いろんな物語に耽つてゐるうちに、ふと尼さんの指が一本短いことを知つた。淨い生活、寂びしい生活とのみ思つてゐた此の尼さんの過去にも華やかな夢があつたことを知つた。彼は微笑をふくんで尼さんの顔を見た。尼さんの頬には常ならぬ紅がさしのぼつた。

けれども尼さんは、その過ぎ去つた経緯については談さうとはしないで、眼で寂しく笑

つたばかりである。彼の頭には指まで切つて心中立したこの美しい尼さんのローマンスが渦を捲いた。吉原を出て尼の生活に入るまでの波瀾重疊は尼さんのみが知る神秘としてこのされるであらう。

ゆびを切るも實は苦肉のはかりごと

指を切るからは九品の淨土まで

が他の二つである。何れも表現の巧みなこと、後人の範とするに足るであらう。

遊女を傾城とよんだところから、實は苦肉のはかりごとといふやうな言葉が、ひとしほ興味を唆るのであらうと思ふ。

「妾はあなたより外には決して情人はもたない」

と、もたれかかつただけでは男の心をほんとに捉へることが出来ないので、色と慾との二夕道を満足させるためには苦肉の策として、指をきつてまで情人への歡心を買ふことを諷したのである。勿論さうした遊女のなかには、慾の一ト筋で突きすすんだもの、早く苦界

を遁れ出たいための一策として指切を探んだ遊女もあつたであらう。お輕が賣られて行くとき、母親が「髪は切つても、必ず指など切つてたもんなや。」といましめるのも、勘平といふ人があつたからであらう。

「指を切るからは九品の淨土まで」からは上品な句振りを學ばなければならぬ。一本切るから九本だといふやうな解釋は狂句的な觀方で、この句をさういふ目で觀ては全く癡なしである。

先年、照葉が情人乙宗さんのため指を切つて一躍天下に名妓?としての嬌名をはせたのも、これ等先輩の古智に學んだだけである。この照葉が宗右衛門町に出てゐたころは、遊二郎の養女だつた。指を切つてハンカチに包んでゐた照葉は、尼にならうともせず、最初の情人とも添はず、一人の男から他の男の手へと移つて行つた。昨年道頓堀でテルハ酒場を開いてゐたが、それも一時の夢にすぎなかつた。

斯うして昔も今も指を切るが指を切つて情人に心中立をすることは、いつの頃からはじ

まつたものであるのか、今詳しいことを知るよしもないが、徳川時代の産物であることだけはこれ等の句によつてもわからう。

全體指を切るのは赤誠を示すための意志表示で、必ずしも遊女の専賣ではない。大阪へ始めて貯蓄銀行を創設えた外山修造も指を切つた一人で、これは女を口説くための手段ではなく、東都遊學を兩親がどうしてもゆるしてくれぬので、一夜ひそかに小指を切り血判の書置を遺して越後の一寒村、小貫村をあとにしたのであつた。

この外、こどもなどが固い約束を誓ふ時、指切といふのを行ふが、これは別に血を見るわけではない。

## 鼠

私の家にBといふ青年が轉がり込んで来たことがある。詰まり世間に云はせると私が置候でその青年が居候といふことになるが、この置候と居候とは私の家では同じ待遇をうけてゐた。

私には置候規定といふやうなものがあつた。先づ私の家の居候たらんとするものは私にその旨を告げる。すると、私はそれを私の家族、女中に至るまでも一應相談することになつてゐた。この相談は否決されたためしがない。けれども一應相談をして置かないと居候の居心地の上に非常な影響があらうと思ふのと、私の家族が十人居れば各人が十分の一づゝの生活力を殺がねばならぬからでもあつた。

B と私とは共に二階で寝た。私の家は家族が多いために蒲團が常に不足勝ちだつたから B のために特にベッドを設けることが出来ないで、B と私とは一つ床にもぐり込んだ。

ところが私は仕事の關係から夜遅くなるので朝を少しくゆつくり寝てゐたが、B は夜早くから寝るので、朝はウンと早く床を離れる。それだけなら別に問題はないが、B は朝早くから起きて次の部屋の大机の上でその日の卦をたてる。神經衰弱でなやんでゐたために轉がり込んで來た彼もこればかりはかかさずやつた。世の常の易者がやるやうに、B は筮竹をがちやく、ばちツばちツとやつては算木をひつくりかへし、かちやりと指で引寄せるとびに起る尖つた音が、朝の空気を破つて素派らしく響く。それにはいさゝか閉口した病人の唯一の慰安であることを思うて黙つてゐたが日ならずして一つの事件が起つた。

B は若い詩人の誰もがするやうに頭髮はウンと長く延ばしてゐたが、身の廻りなどは一切かまはなかつた。友人や先輩が着せてくれるものを着てゐた。夏が來ても冬物を平氣で着てゐるので、被給へと先輩が自分の着古しの絹の羽織を着せると冬が近くなつても

矢張やばうそれを着きてゐるといふ質たちであつた。従したがつて羽織はかまの紐ひもなども紙捻かみねりで間に合あはせてゐた。だから女の臭きひをかき廻まはるやうなことはしなかつたやうだ。女をんなもきらいではないのであらうが自分で自分じぶんに愛想あいきをつかしてゐたので女をんなが惚ほれやうなどとは思おもつてもゐなかつたらしいので、自然しぜんその方面ほうめんのことはあきらめてゐたやうだ。曾かつては骸骨がいこつを珍重ちんちょうしたり、新あららしい講談かうたんを書くことに興味きょうみをもつてゐたが、私わたしの家うちへ來きてからは殆ほとんど易學えいがくの本ほんをのぞいてゐるか算木さんぎ筮竹せいちくをひねくりまはしてゐた。

ところがある朝あさのこと、Bがいつもよりも、もつと不愉快ふげつがいさうな顔かほをしてゐるので、「どうした？」と聞きくと、鼠ねづみが易學えいがくの本ほんを齧かじつたんだといふ。

「フ、ム、君きみの感化かんくわをうけたんだネ」

と云いつて笑わらうと、彼かれは

「これから大阪おほさかへ行いつて來きます」

とまるきり見當けんたう外はれの返辭へんじをした。

「ハハア何か又不愉快なことが生れたんだなア」と思つたので

「ちや、行つて来たまへ」

と電車賃を渡してやると、一日かかつて大阪から戻つて来たBは一枚の洋紙と、外に宮崎八十八へ寄つたと云つて更に八卦の道具を買つて来た。彼は下階から糊をもつて来た。そしてその洋紙で易學の本をたんねんに袋包みにした。それまではよかつたが、今度はそのために本が箱に這入らぬやうになつたので一層彼を悲ませた。暗い顔が更に暗くなつた。私はその顔を見るにつけ私が鼠を飼つてでもゐたかのやうに氣の毒に思つたものである。

私は鼠のために随分被害を蒙つてゐるが、そんなに鼠をにくめない質である。天井裏をあれ狂うてゐる時には「やつてゐるなア」位にしか思はない。流し元へ二三匹出て来てきよとんとした顔をしてゐる鼠を見ると、なんだか、可愛らしい小さな生物といふ感じがする。殊に、さかしらな眼、可愛らしい鼻などを見ると憎めないものである。風呂場のあたりを迂路々々してゐるのを見ると、リーダーやお伽などの鼠の話を思ひ出したりする。

美扇に

提げて來た鼠に巡察欠伸する

といふ句があるが、私はこの句から一つの話を思ひ出した。

それは死んだ小説家の渡邊霞亭さんの家に、風亭と蚊亭といふ二人の書生がゐた。その二人が風呂錢一つ持ち合はしてゐないのに、煙草が喫みたいといふ慾望をおこした。ところが恰度その時、臺所の方で玉が鼠を採つた物音がしたので、外の事には不精な二人もなんだか閃めくものがあつたのであらう。飛んで行つて、玉のくわへた鼠を掠奪してしまつた。それからその鼠の所有權争ひまでした結果、二人で交番へ持つてゆき、それを煙草にして分配せうといふことになつた。既う立ちのぼる煙りを夢みながら交番へ行つた。ところが巡察が鼠に頭のないことを發見し、鼠一頭に付五錢だから、頭のない鼠は買へないと一日渡した五錢を取り戻さうとする。二人は鼠を買ひあげる理由はベスト菌の有無にあるので、ベスト菌が頭にしかないのであれば兎も角、鼠全體どこにゐるか分からないのだから

ら、さう規定に拘泥せないので買つて貰ひたいと云つても繁文縟禮の巡查には、彼等二人の雄辯も何等効を奏せず、頭だけ失敬した玉を恨みながら、すこく戻つて来たといふ捕鼠事件である。風亭も蚊亭も未だ生きてゐる。どちらも私の友人なので假の名にしておいたが、この捕鼠事件を小説家の蚊亭から聞いたので、私は早速滑稽小説を書いて、その原稿料とあかさずに蚊亭に一杯吞ませてやつたことがある。鼠といふと私はこの事件を思ひ出してひとりで顔面筋肉をゆるめてゐる。

これは又最近の話であるが、私が天井裏の騒々しさを思ひながらうとくしてゐると「人間に對するいゝ戦術はないかネ」といふ聲がした。

「戦術？」

といふ外の聲もする。

「さうだ。古くは拵落した、捕鼠器だ、近くは猫要らずだといろんな手段で攻勢に出て來

るが、それに對する吾々の新戦術が發明されてもいゝぢやアないか」

「何が新戦術なものか、僕は人間なんか輕蔑してやつてもいゝと思つてゐるよ。何んしろ吾々の視覺や嗅覺を全然無視してゐるんだからね」

「でも、吾々のうちには今なほ彼等の陷阱に一命を落すものがゐるからな。」

「そりや、ゐるさ。全然ゐないとは云はないが、彼等のために一命を落すものは、人間が飛行機から墜ちて死ぬのと同じで、率先して冒險をする連中か、然らずんば、あはて者に限るんだ。それは全くその者の不注意から來るので鼠全體から云へば大した問題でもないよ。それよりも今のところでは運豪といふ人間が欠伸まじりに詠んだ

齧るのを止めて鼠も考へる

といふ句のやうに、少しく注意さへしてゐれば決して間違ひはないと思ふ。逕信大臣や實業家の息子が自動車や電車にぶツつけて即死したのもみんな不注意からだよ」

「さう云へば、それに違ひないが、人間社會も大部進歩したからな、どんな新手をあみ出

さなにも限らないから實はびく／＼してゐるのさ」

「進歩と云へば段々と洋館が殖えるぢやないか。吾々から云へば、人間の眼をかすめる位は伊賀流も甲賀流もあつたものではないが、あの鐵筋コンクリートにかかつては全く齒が立たないから閉口さ。ところで病鼠はどうだい、少しはいゝかね」

「有難う、近ごろでは、よほど良くなつたが、何んしろ神經をなやましたものだから未だに、ぶら／＼してゐるよ」

「僕は暫く旅行をしてゐたので、詳しいことは知らないが、何んでも奇態な病氣に罹つたやうに聞いたが、原因が不明ないのかい」

「なあと、原因は判つたさ。判つて見れば何んでもないが一時は大騒ぎしたものだ。毎年きまつたやうに議會に提出される猫の首に鈴をつけて吾々の生命を保護するといふ鼠族危険防止案を知つてゐるだらう。」

「フム／＼」

「猫の首に鈴をつけるといふ案はいゝには違ひないが、思想善導が云うばかりで行へないやうに、吾々の仲間に一人の犠牲者も出さずに實行する妙案がないので、いつも審議未了のままになつてゐる譯であるが、その鈴が猫の首につかずに反つて家の病鼠の首にくつついてゐたのさ」

「そいつあ又どういふ譯で」

「彼奴が、いつものやうに、下水通りから竈横町の方へ食糧を漁りに出かけたところが、運悪く何かに蹴躓いた拍子に捕鼠器の中へ落ち込んでしまつた。どうせ一命は無いらぬと覺悟はしてゐたが、それでも遁れられるだけは遁れて見やうと四方八方へ眼を配つてゐるうちに、人間の足音がした。サアしまつた。いよく最後の時が來たと觀念の眼を閉ぢてゐると、アラ、可愛い鼠がかかつてゐるよ。といふ聲がしたので、そつと眼を明けて見ると、ソレ美錠丸といふ人間の匂にあるだらう

鼠とり寝卷のまゝで子がしやがみ

といふわけで、その家の十二三の坊ちやんだつたさうだ。その坊ちやんがソロ／＼捕鼠器の中へ手を突ツ込んで来たさうだが、袋の中の鼠とはよう云つたもので、さうなつて見ると靜かに捕へられるより仕方がない。多分又下水の水をウンと云うほど吞まされて呼吸を引きとることと覺悟してゐたさうだが、一向さういふ氣配がなく、可愛さうだから逃がしてやらうよ。と云ふ坊ちやんの聲がしたかと思ふと、すつかり自由の身になつてゐたんだとさ。ところがあまりの嬉しさに一所懸命に駆け出すと、すぐ耳元で鈴の音が高らかに鳴り響いた。漸く人間の手を逃れて又々猫にやられてはと、後をも見ずに駆け出したさうだがこちらが激しく駆ければ駆けけるほど、激しく鈴の音が追つかけて來るので、それからは無我霧中で天井裏町まで戻つて來て悲鳴をあげたさうだが誰一足彼奴を助けてやらうとはしないで、猫の襲來ツと一疋が叫ぶと、みんなが叫んで、急いで戸締りをするやら、あはて、節穴に身をもつて遁れるやら全くの大騒ぎさ」

「なるほどね」

「ところが、その事件があつてから數日して、彼奴が、ぶツ仆れてゐるのを發見してくれ  
たものの話に、彼奴の首に一つの鈴がくツついてゐたさうで、それを知らずに猫に襲はれ  
たものと早合點して逃げ惑つたのであつた。それから鈴を離して介抱したところが呼吸は  
ふつかへしたが、なんだか氣が變になつてゐて猫のことばかり囁言に云つてゐる始末さ。  
今日はよほど氣分がいゝやうだが、まだどこやらに頭が變だと云つてゐる。醫者に云はせ  
ると、近ごろ人間がよくやる神經衰弱ださうだ」

「では日數の問題だね」

「何にしろ強迫觀念に囚へられてゐるので弱つてゐる。まあ、當分はぶらくさせて置  
くより仕方があるまい」

「横町の娘鼠は猫要らずで自殺したさうだが、近ごろは吾々の仲間にも疎なことは起らな  
うね」

「やつぱり時節が悪いからだよ」

「まあ、病鼠を大切にしまへ。これから、一仕事やつて来るから」

「どうも有難う。家族が多いと、何彼と事件が多くて困るよ」

と云ひく／＼小ざかしい眼付をした大きな鼠が足音を盗むやうにして、風呂場の方へ走つて行つたと思ふと聽て又がら／＼と天井裏でしどい悪戯が始まつたので私の意識がはつきりとした。置電燈の光が鈍く眼を射た。私はふら／＼と立つて水を呑みに階下へ行つた。

もう鼠の音がかたんともしない。

盜 人

あつちでも、こつちでも頻々として起る強盜沙汰、それも眞物の説教強盜は容易に縛につかず、一般の家庭では、その方の神経が急に敏感になり、ソレ大工を呼んで来い、この穴をふさげ、戸締りを嚴重にしろといふ騒ぎ、無人の家ではピストルまで買ひ込んで眞逆の時の準備をさく／＼怠りなしとか聞いてゐる。

「柳樽」の中に

盗人にあへば隣りでけなるがり

といふ句があるが、昔の人は昔の人らしく悠々迫らざる觀察をしてゐるところに面白さがある。

型の如く黒装束がぬつと這入つて来て先づ大きな黒い影を壁に投げかける。それからお定まりの凄文句であるが、これを現代語に翻譯すると、

「四の五の云はずに、有金をみな出したまへ、ワツとでも云つたが最、すぐ澤正の劍劇ですぞ。さすればですネ。首が胴に別れを告げなければなりませんよ。」

とか何んとか云つて威かした末千兩箱の二つか三つを擔ぎ出したのでもあらうか。兎に角相當の被害品があつたことは云ふまでもない。

それを聞いた隣りでは、

「同じ人間に生れても、エライ違ひや。金もある所にはあるものだな。家でも早く盗人に奪つてゆかれるだけの結構な御身分になりたいものだ」

と氣の毒がるより、けなるがるのが人情かも知れない。そこをとらへたのが、この句の生命だ。

猿轡和尙をはじめたてまつり



これも押込強盜を詠んだ句である。

寺に早がねが鳴つた。それつとばかり村人が驅けつけて見ると和尚をはじめ、納所、小僧にいたるまで縛り上げられ、猿轡を嵌められてゐる。寺に小金を貯めてゐるのを知つて押込みが這入つたのである。

「和尚をはじめ奉り」でその場の光景を躍如たらしめてゐるではないか。同じく盗人を詠んだ句でも

晝あるきよせと盗人子を叱り

といふのもあれば

よく締めて寝ろといひいひ盗みに出

といふのもある。矢張り戸締りに注意するのが一番いゝ豫防法だといふことが判る。盗人もまた盗まれることがあることも知れる。滑稽な云ひ方の句であるが滑稽味よりも皮肉味の方が多分に盛られてゐるやうに思ふ。

見つかつて馬盗人は乗つて逃げ

といふ盗人の機智を詠んだのもあれば

さうくはもう盗人になすられず

といふのもある。これは盗人を詠んだ句ではなくて極道息子が持ち出したものを、母親がかばつて、盗人のせいにしてゐたが、度重なつてはさうく盗人になすりつける譯にもゆかないといふ母親らしい感情の流れた句である。同じく子に甘い親の情を穿つた句に

盗人を捕へて見れば我が子なり

といふのもある。前句と對照して見れば一層興趣を深くさせられるではないか。

女の三十

政界の大御所西園寺老公の寵愛を會ては恣にしてゐたお花さんが、三十五歳を一期として、淋しく琵琶湖畔に永眠したといふ記事を見て、ふと「武玉川」の中にある

三十になると女の世がすたる

といふ句を思ひ出した。確かなことは知らないが彼の女の世が捨つたのも三十前後ではあるまいか。

右の句が、そんなに巧みな句でないにしても江戸時代の女の三十といふ歳を取り扱つてゐるので、一つの話題にはならうと思ふ。

男なら三十にして立つといふ言葉があるが、女の三十にはどんな意味があるかと云へば

江戸時代には將軍でも大名でも、奥方や侍妾に停年制があつて、その停年が三十歳内外で行はれたので、三十といふ數には特に意味があつたのである。それを詠んだのが此の句であるから三十といふ數字は決して漫然と並べた譯ではない。

妻妾に停年制があるといふやうな事は、とても今時の女には信じられさうもない話であるが、事實は抹殺する譯にはゆかない。それは女にとつて如何にも屈辱的な差別待遇であつたかも知れないが、さうした制度が徳川時代に公然と行はれてゐたのかと思へば、モガが跳梁し、婦人公民權が衆議院で云々される今日では全く隔世の感があるではないか。

昔のお殿様、それも徳川時代の天下泰平に馴れ切つてゐたお殿様といふものは殆んど戀愛三昧のその日暮らし屋であつた。それも眞の愛から發した戀愛ではなく、彼等にとつて戀愛は一つの玩具に過ぎなかつたのである。それは恰も胡蝶が花から花へと狂ひ廻つてゐるやうな偏愛、溺愛の生活で、徒らに異性を虐げることによつて、あたら人生を醉生夢死のうちに送つて悔ひなかつた不良組のお殿様が大半を占めてゐたのである。その裏面には

又次のやうな事が行はれて、それ等のお殿様の歡樂を、より有頂天ならしめたのであつた。

當時、將軍や大名の妻妾が三十歳内外になると、寢所を共にしない習慣になつてゐた。この制度がどんな政策の下に生れたかといふやうなことに氣づくほど聰明なお殿様は一人もなかつた。ただ眼前の美しい人身御供に滿喫を感じてゐたのであつた。

お殿様が夢想だもしなかつたと同様に、それ等の人身御供にされてゐた妾妾達も何故三十歳内外になれば、さうしなければならぬのか、そこに深いたくらみがあらうなどとは夢にも考へなかつたのである。ただそれが、一つの掟であるから、それが女としての宿命であるからと觀じてゐたに過ぎないらしい。

そんな穿鑿は第二として奥方は三十歳を越すと、健康體であつても、おしとね御断りと稱して、孤閨を守る身の上になり、同時に自分の附女中の中から美しい女を見立て、それを主人公に推薦するのが例になつてゐた。もし三十を過ぎて、依然として、おしとね

御断りをしない時には、嫉妬深いとか何んとか隘口を云はれたものである。

お妾も矢張り奥方同様に停年制があつて、君寵のまだ衰へないうちに他の役に轉じてしまふのが慣例となつてゐた。

それが

一ト先づ夢の覺める三十

といふ十四字詩となつて残つてゐる。

傳へ聞くのに、西園寺老公でさへ、一時はお花さんでなければ夜も日も過ごせなかつたさうであり、お花さんの潜勢力の偉大さは、大臣や政黨の首領でさへもお花さんの一撃一笑を氣にしないわけにはゆかなかつたさうである。馬鹿殿ならぬ老公でさへ一婦人の魅力に戀着すること斯くの如き始末である。まして凡々たるお殿様が色慾に溺れて、愛妾のいふがまゝ、なすがまゝになつた時、お家騒動を惹起させないとは誰が保證し得やう。

妻妾に停年制を設け、より若き、より美しき女と取り替へて君寵奪斷から生ずる陰謀を

未前に防ぐことの老猶なる政策をはじめて案出したのは果して誰であつたのであらうか。  
以上の外にも、女の三十を詠んだ句は多々あるであらう。けれども

美しい氣を捨てて三十

などの句を味讀する時には、それ等の女が一種の諦めに生きてゆかねばならなかつた淋しさを想像するに難くなう。

賽

錢

熊手の跡も清淨に、掃き清められた天満の天神さんの社前へ跪づいた一人の紳士、懷中から燦爛たる銀貨を惜しげもなく、バラ／＼と撒き散らした。

「これは又感心な信仰家であるわい」

と背後に立つて様子を見てゐると、件の紳士は數葉の債券をとり出して遂一番號を読み上げ、拍手の音も高らかに

「何卒、コレコレの債券に三千圓を恵み給へ」

と、しばし額づいてゐたが、やをら立上つた時には、自腹を切つた筈の多數の銀貨は紳士の墓口へと姿を掻き消してゐた。さて／＼、勘定高い信者もあつたものである。



神様の方でも、時節柄さうくお人好しでもすまされまい。おそらく三千圓當選の夢位はふるまはれたことであらう。

何んにしろ、慾の世の中に、祀り上げられた神様こそ、さぞ五月蠅いことではあらうが要するに賽錢は彼等の世迷言を聞くための手數料だと思へば大した間違ひはあるまい。

千二の句に

賽錢に對して多き願ひ事

又、眠聲の句に

神様のお告げ働け働けと

といふのがあつたが、けだし味ふべき句であらう。

重 役

昔は大名や小名が一國一城の主として權威四隣を壓してゐた。その配下に屬する侍でさへ鎗一筋の家に生れたと云つて値うち以上に威張り散らしてゐたが、これを今の世に求めると、お殿様が重役、侍がサラリーマンにあてはまると思ふ。

昔はお家に一大事があると、その責任を家來が引ツ被り腹を切つて申譯をしてゐるが、今でも、不景氣で會社が立ち行かぬとなると、その責任は社員の上落ちて來て首が飛ぶことになつてゐる。思想がどうの斯うのと云つたところで、責任が上になく下にある點など、そつくりそのままの傳統である。昔の侍は自分で腹を切つたものであるが、今のサラリーマンは首を飛ばされるまで齧り附いてゐるのが少しく違ふ位なものだ。これは生き

て行く世界が廣くなつたのと、一にも金、二にも金、三にも金の世の中になつたからでもあらう。

同じくお殿様と云つても百萬石のお殿様と一萬石の殿様とでは格段の相違で、生活様式がズンと懸け放れてゐた。

重役でも、矢張り其の通りで、三井物産あたりの重役と、そこらあたりの名もない會社の重役とでは比べものにならぬ。

最近ある會社の重役が、海外漫遊から歸つて來た時、その會社の社員が上海まで出迎へ下にくと云はぬばかりの物々しい歸朝であつたと聞いてゐるが、そんな大重役もあれば世界戦争の好景氣に乗じて大阪では紙屑屋の株式會社が生れたことがある。今でもあるかどうか知らないが、そんな會社でも會社となれば社長も専務も平取締役も監査役も一通りは出來て、當百の句の

日がな一日紙屑はないかね

と云ふ御出身ごしりっしんの安やすッぽい重役ぢゆうやくが回轉椅子くわいてんいすや脇掛椅子ひしかけいすに、やをら身を凭もたせて、なるほど重役ぢゆうやくといふものは一寸ちよつと乙ごつなものだとおツしやつたことであらうと、ひそかに微笑ほくえまされるデモ重役ぢゆうやくもあるのである。

従したがつて重役ぢゆうやくと云つても偉えらい人ひとばかりではない。昔むかしのお殿様とのさまに偉えらい人ひとが稀まれであつたやうに今の重役ぢゆうやくにも、ほんとに偉えらい人ひとは稀まれである。知識ちしきの點てんから重役ぢゆうやくを診察しんさつすると、大抵たいていは知能ちのう缺乏けつぱく症しやう患者わんじやである。墓ひまがのやうに、萬事ばんじにのさばり出でることは人後じんごに落おちないが、さてとなると社員しゃいんの頭あたまを借かりなければ何なに一つ運はきばない。

私わたしはある重役ぢゆうやくにメンタルテストを行おこなつたことがある。先まづ第一だいいちに次つぎのやうな小咄こぼかしを聞きかせた。

「さる大名だいみやうが家來けらいに命めいじ、お髭ひげを剃そらせ給たまふ時とき、お舌したでお鼻はなの下したやお頬ほべたをふくらませ給たまひ

「どうぢや、斯かくいたせば餘程よほさま剃そりよくあらうかの」

との御意に家來恐縮して、格別剃りよき由を申し上げると殿様したり顔で

「これは予が工夫ちやが苦しくない下民どもにも教へて遣はせ」

話はそれだけであるが、これを聞いたその重役はカラ／＼と笑つて

「さうだらうネ君」

とたつた一言で片附けてしまひ、頗ぶる涼しい顔をしてゐた。

小咄の中で多量に自己を發見しなければならぬ筈が一向にそんな氣配がない。私の豫想では、ソノ重役の顔が七面鳥のやうに青くなつたり、赤くなつたり、紫になつたりしないまでも多少の反應はあるものと考へてゐたが豫想以上に洒々然として

「さうだらうネ君」

には恐れ入つてしまつた。

素人に

重役はものの解つたつもりで居

といふ句があるが、實際重役といふ重役は皆、その積りでゐるんだからこちらで顔を赤くしたり青くしたりしなければ引ッ込みがつかない場合が多い。

貴山の句に

その上に重役賞與までもとり

といふのがある通り、その方にかけては一步も用捨をしないのが重役病の共通した症状で取るものはどしく取り上げる。しかし自分の都合の悪るい時には、臨時に嚙噬症を併發させてしまふ。

二柳子の句の

重役は勝手な時は聞きながし

といふ具合に、墨を吐いた章魚のやうに沈黙する。そんな重役に限つて、會社の利益は悉く自分の懐に入れる。責任は下におツ被せる。そんな時に社員の首を飛ばす手際に至つては實に鮮かなものである。責任と云へば次のやうな話がある。

「何かの談判で、さる會社へ出かけた或る人が取次ぎの給仕に

「一體此の會社で責任を持つてゐる人は誰れなのです？」

と聞いた。ところが給仕は

「誰だか知りませんが、いつも叱られるのは私ですから、私が一番責任を持つてゐるのでせう」

と答へたので、訪問客が腹を立て、

「馬鹿にするな」

と怒鳴つたところ、給仕は平氣なもので

「ハ、ア、これも私の責任ですか」

と云つたさうである。例へそれが重役達の經營がよくなかつたにしても、何かの時にその責任を背負つて立つのはいつも下級社員であることは間違ひがないらしい。その證據には下級社員の首は常に市場にころがり出て、失職の歌を唄つてゐる。

かと思ふと重役の方は不景氣が襲來しても食ふのには困らないで録山の匂にあるやうに

重役は樹で包まれた家に住み

といふ贅澤な、而も複雑な生活をしてゐる。寮所に坐つてゐれば玄關の應接と、座敷の用とが一緒に便じられるやうな實に輕便な長屋生活とは雲泥の差で、先づ玄關に至るまでに數分を要し、呼鈴によつて女中を煩はす仕掛けになつてゐる。何の某といふ一枚の傳票が漸次奥へと取次がれるといふ勿體ぶつた、しかも不自由な生活に多くの時間と費用を投じてゐる。これが所謂日本の重役の生活様式なので、どんな親しい人でも、相當の時間を要しなければ座敷まで侵入することは出来ないのである。ある人の話では日本をほろぼすものは露西亞でもなければ、英國でもない、日本人の持つ盗人根性だと云はれてゐたが、私は盗人根性を最も多量に持つてゐるものは、日日捕はれて新聞を賑はせてゐる盗人よりも重役だと云ひたい。常に私腹を肥やすことばかりに血眼になつてゐる重役が問題にされずに盗人根性の比較的少なく又實際小額のものしか窺取しない盗人がその策の拙なために

捕はれるのだと云ひたい。私は決して盗人のために辯護してゐるのではない。従つて彼等の盗み心が小さいから、もつと大きなものを盗めの、盗み方が拙いから、もつと巧く盗めのと盗人根性を奨勵してゐるのではないが、彼等が盗むのはたとへ少しでも盗まなければ生きて行けぬから盗むので、寧ろ盗まねばならぬやうにされたことを彼等のために悲しむのである。私は彼等が盗まなくてもやつて行けることを希望してゐるのである。彼等をして少しでも盗まねば行けなくして、知らぬ顔をしてゐる多くの重役に反省を促したいのである。私は無闇に重役を罵倒して痛快がるものではない。彼等重役の中にも、ほんともこの解つた重役もゐる。多くの私財を無意味に抱いてゐるために眞面目に煩悶を續けてゐる人もゐる。舊來の道徳心を多分に持つてゐる人もゐる。古句の

大名の過去は野に臥し山に伏し

で、苦しみ抜いたあげく、漸くにして重役の地位を贏ち得てゐる人もゐるのであるから徒らに重役を蛆上に料理することは氣の毒ではあるが一旦重役になると、いじめられた嫁が

姑しやうとあになつたやうに、初年兵しよねんへいが古參兵こさんへいになつたやうに、矢張り重役ちゆうやく根性こんじやうブル根性こんじやうに支配しはいされ易いやすのを遺憾いんかんに思ふおもものである。殊ことに舊道德きゆだうとくといふものが金持かねもちによつてつくられた道徳とくであるがために、いつかど道德だうとく顔がほをして、考へてゐる重役ちゆうやくがあるとしても、それ自體じたいが既に時代じだいに適應てきおうせず、寧ろ漫畫まんがわの材料ざいりやうになるばかりである。だから、そんな重役ちゆうやくが幾人居いくにんたところで今日こんにちの日本にほんをほんとに救ふすくことは出来ない。こんなことを云ふと、君きみは金かねを持たぬからそんなことが云へるのだ。金かねを持つたら、自分等じぶんらと同じ考へかんがになるだらうと云ふであらうが、それは合法的論理がふはふてきロジツクでない。金かねを持つ、持たぬにかゝはらず道理だうりは道理だ。金かねで、ひッ込まこされる道理だうりは、ほんとの道理だうりでない。いつも道理だうりが金かねで引ッ込まこされるからつひこんなわかりきつたことを云つて見みたくなるのだ。

或る雑誌あつしの落語らくごに「金持かねもちになるには何なにうすれば一番早はやいか」との間まひに「そりや、集金しふきん人にんになるに限かぎる」とあつたが、これは決して落語らくごだと云つて笑わらつてしまへない。金持かねもちが金かねを持つてゐるだけであれば、集金人しふきんにんが澤山たくさん掻かき集あつめてきた金かねを持つてゐるのと何等撰なんちえらぶと

ころはない。

今の世の中をすつと見渡したところ、ほんとに、金の使途を知つてゐる金持は少ないやうだ。双柳の句の

悪口はなんぼでも聞く金を持ち

では下さらぬ。それでは金の方が泣く。

私の句に

資本家のくせに妾に借が出来

といふのがある。たしかにそんな資本家もあるが、そんなケチな心かけでは人間の風上に置けない。

先月だつたか、旦那に死なれたある妾が生活に困るので扶養料の請求をしたところが、妾といふものは風紀を害する商賣であるから、妾にも、その子にも、扶養の義務は無いといふ判決が下されてゐた。なるほど尤な話である。妾といふ商賣？を公認したやうな形

で社會に存在させてゐるからこそそんな問題も惹起するのだ。妾も私娼と一緒に檢舉して絶滅を期するがいゝ。こんどの判決から考へて見ると、妾と私娼との差別は僅に性慾の掛賣と一現との相違にあるやうだ。掛であれば差支ないが一現であれば怪しからんと云ふ道理が私には一寸呑み込めない。風紀を害することが悪いことであれば甲乙なしに双方とも檢舉した方がいゝだらう。だが僕が妾を圍つてゐるからとか、僕の親爺が妾を置いてゐるから檢舉することはいけないと云ふのであれば道理が引ツ込んでしまふ。

妾は止むを得ないが私娼は絶対にいけないとは妙なロジックである。法の七不思議の一つに數へることが出来やう。ほんとに生活に困つた時、春をひさぐことによつて生きるのは妾よりも私娼の方に多いだらう。公娼といふ名は穩でないが、兎に角警察の保護の下に營業を續けてゐるのに、私娼の方は警察から目の敵のやうに檢舉されてゐる。眞逆警察官が公娼の營業主と結托し、その手先となつて商賣敵の私娼を檢舉してゐるのではあるまい。

私娼も風紀を紊亂するし、妾も風紀を紊亂する。水の濁つたところに子子が發生するやうに、私娼も生活に窮したところに發生し、妾も同じく生活に窮したところから發生したとしても、その結果に於ては私娼と妾との間には大變な相違がある。私娼は生活の壓迫と法の壓迫と二重の壓迫をうけてゐるが、妾は法の壓迫と云ふても扶養料の請求權が無いといふやうな最後のものが得られない丈けで多くはなか／＼贅澤な暮しをしてゐる。

だから、蔦雄の

三越へ来てお妾になるときめ

と云ふやうな句も生れて來るのだ。

話が妾の話になつてしまつたが、實際妾になつた人、今ならねばならぬ人には氣の毒な身の上の者が少なくない。けれども妾といふ制度が許されないとすれば妾にならずともすんだのである。これも需要があるから供給するので妾を問題にする前に先づ需要者の方をウンと手厳しくヤツつけねばいけない。私娼にしても従來のやうにこれ等の營業者のみを

取締つてゐるから飯の上の蠅を追ふてゐると同じ結果になるのだ。彼等も又人間である以上食はねばならぬからだ。他にそれよりいゝ収入を計るべき道がないからだ。寧ろこれを欲求する人達の方を嚴罰に處する方が現状よりもよりよき成績を擧げ得るだらう。

妾を置くことと別荘を建てることとが金持の誇りであるなら、ウンと税金でもかけてやることである。妾、公娼、私娼と並べると、有閑階級、中産階級、無産階級と云つた形でもいつも三角形の底邊をなす無産階級が手きびしくやつつけられてゐるのまで酷似してゐるやうだ。

以前私が萩の茶屋に住んでゐたころ、その附近に多數の妾が住んでゐた。何れも貧弱な安妾であつたが甚しいのになると、一軒の家に住みかね、又住ましかねたものか、二階も妾、階下も妾といふのがあつた。二階借の妾を措くとは世にもあはれな欲望ではないかどうせ、それ等の妾が一人の旦那を守つてゐやう筈もなく、内職によつて衣食や虚榮心を満足させてゐたらしい。中にはほんとの内職をしてゐる憐れな妾もあつた。妾と云へばみ

こしの松に狎や猫を對手に、ひとり言を云つてゐるものとばかりされてゐた昔とは大變な  
 違ひである。青風の

お妾は急所々々をよけて拗ね

などの句を見ると、生きて行くためにはお妾になつてからも相當の努力は要るのである。

しかも耕雪の句の

閑着も知らず妾の子は抱かれ

の悲惨な事件が生れないとは限らないし、銀坊の

妾の子母の悪口云はれて來

を知つたなら、心平らかではゐられまい。

重役の話が金持の話になり、金持の話が資本家の話になり、それが私娼や妾の話になつ

てしまつた。重役が必ずしも金持である筈もなく、金持が必ずしも、資本家である筈もな

く、資本家必ずしも、私娼を買つたり、妾を置くにきまつた譯でもないのに、春の海ひね

もすのたりのたり哉で、とんだところへ波打つて行つた。これが所謂漫談かも知れないがもう一度話を重役のところまで引き戻すことにする。

重役はどんなに社が儲かつた時にでも、社員に多額の賞與を渡すことを厭ふ。その表向きの理由は多額の金を與へると無駄費ひをして直ぐに無くしてしまふからだ、如何にも同情的言辭を弄するが、その裏面は決してさうではない。一時に纏まつた金を與へて、辭められると困るからである。それをハツキリと口に出して云はないだけだ。彼等重役が口を揃へていふやうに、成るほどサラリーマンは金を手にすると直ぐに無くしてしまふ。それはたしかである。結果はさうであるかも知れないが、サラリーマンに云はせれば少々費つても、まだ何か一仕事出来るほどの金を未だ曾て與へられたことがないのだ。少々費つてもそのうちの幾らかを貯金することが出来るほどに充分貰つたためしがないのだ。では全然濫費しないで、それをそのまま貯めたらいゝではないかと云はれるかも知れないが、彼等の給料は常に彼等の生活を支えるのに充分でないからだ。多少とも這入つた金は辛棒

し切つてゐた、それ等の足らぬ勝ちの生活の穴埋めになつてしまふのだ。決して空費でもなければ濫費でもないのだ。四季を通じて、衣類、調度品をト渡り以上持つてゐる重役階級は、せうと思へば儉約も出来やうが、日常の必需品すら繰り延べた上に繰り延べて来たものが、これをみたすために、貯金をして置きたい金をみすく費つてゐるのだ。それを費つてしまふから、より以上に與へぬとは云ひも云ひたりと云はねばならない。

斯ういふと、サラリーマンには何等の缺點がなくて、重役だけが悪いやうにとれるが果して、サラリーマンには欠點がないか。それに就ても少しく饒舌を恣にして見やう。

大體サラリーマンは無氣力である。重役から見縊られるのも最だも思ふやうに出来上つてゐる。何を云はれても、何をされても御無理御尤の徒が多い。白を白、黒を黒と云ひ得る月給取は絶無とは云はないが、雨夜の星位しかゐない。白を白、黒を黒と云ひ得る社員でも首が飛ぶことは有難くはない。だから梨のしんに蟻がたかつてるやうに齧りつく。殊に銀行員などの嚙りつき方と來たら非常なものだ。彼等が假りに銀行をやめさされ

たとする。彼等は彼等自ら銀行を開店することの出来ないことをよく知つてゐるからだ。たとへ銀行を開くことが出来たからとて、そんなところへ安心して金を預けに來る人は一人もあるまい。重役も又それをよく知つてゐるのだ。それで社員が僅に生きて行けるだけのものにプラス甘言をもつて懐柔してしまふのである。食ふてチヨンの徒に反逆はない。彼等は新しい奴隸制度の下に、だら／＼と無氣力に、首が飛ぶまでを老ひ込んで行くのである。彼等が若し女性であつたら、必ずや妾となり私娼となることを辭せないであらうと思はれる。そんな人間に金より外に尊いものがない重役が、どうして立派な餌を與へるでせう？ 重役の頭の中には大きな算盤がある。その算盤が、いつでもサラリーマンの運命を左右してゐるのだ。だから多くの重役はサラリーマンの顔よりも美人座の方がいゝと云ふだらう。コレからゴルフに行かねばならんから、社員の問題は明日にしてくれと云ふだらう。

フアブルの糞の外交

近年讀んだものなかで、アンリー・フアブルの「昆蟲記」(大杉榮譯)位、私を感激させたものはない。電車の中でも、道を歩いてゐても、食事の合間でも、私は呼吸をもつかずに讀み耽つた。

譯者の大杉榮も中野の多摩監獄の中で、フアブルの昆蟲記を耽讀したことをその序文の中に述べてゐるが、兎に角、この昆蟲記の大部分は糞虫の研究である。

糞虫といふのは、一種の甲蟲で、牛の糞や馬の糞や羊の糞などを食つてゐるところから出た俗稱だ。糞虫が、さう云つた糞を丸めて、握り拳大の團子を造り、それを土の中の自分の巢に持ち運ぶ。その運び方の奇怪さ、又一晝夜もかゝつて、その團子を食り食つて、

食ふ尻から尻へとそれを糞にして出して行く。その徹底的糞虫さ加減！そして又、やはりその團子で、自分が死んだあとでの卵の餌食を造つて置く。その造り方の巧妙さ！それにフアブルの観察や實驗の仕方、の實に手に入つたうまさ！描寫の詳密さ！文章の簡素雄渾さ！讀み始めると、とても面白くてやめられない。

それに糞虫の異様な生活を研究するアンリー・フアブルの根強さと來たら自ら頭が下がる。エドモン・ロスタンの言葉籍りて云へば「此の大科學者は哲學者のやうに考へ、美術家のやうに見、そして詩人のやうに感じ、且つ書いた」のであつた。

しかし、刀三の

蟲なけばなくで原稿料になり

といふ詩人ではなかつた。フアブルはどんな困難にも打ち勝つだけの熱と力をもつた百姓の科學者であつた。研究のためにはどんな莫迦らしいことでも辭しなかつた。一例を挙げると、スカラベサクレ（糞虫）が、どうして幼虫を育てるかといふ難問題にぶつつかつた

時に、彼は大きな虫籠の中へ砂で人工の地を造り、そこへ喰べ物を入れてやりそれを時々新らしく代へてやつた。そして其處へ二十ばかりのスカラベサクレと外にコブリスやジノブルウルやオントファジュなども一緒に入れて糞虫の秘密を探ぐらうとしたのであるが昆虫學の實驗でこれ位彼をてこずらしたことはないさうだ。厄介なのは喰べ物を代へてやることで、なんしろ普通の喰べ物でないだけにそれを巧く手に入れることからして骨が折れたのである。彼の家主が厩と馬を持つてゐたので彼はその家の下男を説きつけた。ところが、あまりに莫迦らしい話なので始めは笑つて相手にしなかつたのを、小さな銀貨で買収してしまつた。それでその虫共の毎日の朝飯が二十五サンチームかかつたさうだ。糞虫の豫算がこんな金高に上つたことは末だ曾てあるまいと彼が云つてゐる。

下男は毎朝、馬の手入れが済むと南方の庭の塀から頭を出しそつと手で喇叭をつくつて「や〜〜」

と云つて彼を呼んだ。その聲を聞くと彼は糞の一杯はいつてゐる壺を受けとるために走つ

交外の蕪のムアアア



行つた。ところがこの取引がなか／＼骨が折れたのである。ある日のこと、その取引の最中を主人に見つけられた。

その糞が塀を越して宿替をするのは、てつきりファブルの庭の美女櫻や水仙のこやしになるのだと早合點をしたので下男は散々叱り飛ばされて、こんどやつたら暇をやるぞと云つて嚇かされた。ファブルが幾らその事實を説明しても無駄だつた。日支外交が一時杜絶したやうにファブルの折角の外交も美事に破ぶれて如何ともすることが出来ない。そこで今度は大道に出ておづく／＼と人目を忍んで彼の生徒等のための毎日のパンを紙漏斗に集めてやるよりほかに方法がないので彼はそれをやつた。別に恥ぢもしなかつたさうである。時には好運が舞ひ込んで来る。シャトオルナルやバルパンタヌの野菜物をアヴィニオンの市場へ持つて行く驢馬が、彼の門の前を通りながら、其の淨財を置いて行つた。さうした棚から落ちた牡丹餅を、すぐに集め取つて幾日かの間、彼を豊富にした。一言で云へば一塊りの糞のために、するい事をしたり、探し歩いたり、走つたり、外交をやつたりして

彼の捕虜を養つてゐたのである。若し成功といふものが、その仕事に對する熱心と、どんなことでも厭はない愛とによるものであるとすれば彼の實驗はきつと成功したのであるがそれは成功しなかつた。暫くするとスカラベ共は、あちこちと廣く歩き廻ることの出来ない、その虫籠の中で懷郷病にかかつて、その秘密を彼に見せない前に、あはれにも死んでしまつた。

南紀田邊に南方熊楠といふ世界的の學者がゐるが、蟻の研究のために、自分の罌丸に砂糖を塗り地面の上に寝轉んで思ふがまゝに刺させてゐたといふ話を聞いてゐるが、何かを研究せうと云ふほどの者は世にも莫迦らしいことを平氣でやれる人でなければ駄目だ。

朝顔に塀の電燈消え残り

の作者美の作が、餌差町に寓居を營んでゐるころのこと、一ト坪餘りの庭の中に、苗床を設けてフランス種の菊を作つてゐたが、そのこやしに牛の糞や馬の糞が要るので、小ファブルをきめこみ、朝早くから頬冠りをして町々の糞拾ひにかかつてゐた。あたりに糞が無

くになると、馬場までも出かけて行く熱心さだつた。最も美の作のは趣味でやつてゐたのであるが、世間には美の作以外にも小フアブルが澤山ゐることだらうと思ふと微笑を禁じ得ない。斯く云ふ私なども川柳の方では、いつも糞拾ひをやつてゐるので、フアブルの糞拾ひは、愛人の聲援よりもつと力強い響きを與へてくれる。

右に談したやうな失敗を幾度か繰り返へしたが此の科學者は決してひるまなかつた。その大虫籠の試験と一緒に直接の搜索もやつた。そのためには兵隊の射的の彈丸を拾ひに隣村から來る學童を買収した。彼等は學校で恐ろしい折檻をうけることをも忘れて幾つか拾つて一錢にしかならない鉛の彈丸を拾ひに來るのであつたが、それ等の子ども達を誘惑するために、彼は若し虫のはいつてゐる糞玉を一つ拾つたら一フランやるといふ約束をした。斯くして彼は次の木曜（フランスの小學校では木曜と日曜とが休み）から同じ場所へ同じ時間にあつまつて多くの學童と一緒に、糞玉の發見にとめたが、これも又失敗に終つた。探し手もがつかりして、しまひには幾人も來なかつたが彼は最後まで熱心に彼の助手

をつとめてくれた子ども等に幾らかの報酬を與へてその約束を解いた。

斯くしてファブルは、一寸見ると、極く單純なやうで、しかし實際は非常に困難なその研究に、自分一人をたよらなければならなかつたのである。彼は昆虫の生活とその本能を研究するために四十年間を費してなほ飽きなかつたのであるから、彼の研究上の苦心談なら幾ら談しても盡きない。

近年フランスでファブルを中心に目覺ましい論戰が行はれてゐて彼を非難する者の多くは官僚の學者ださうである。科學の世界にも官僚と在野、ブルとプロの鬭争があるのである。ファブルは一八二三年十二月二十日に、事實百姓の子としてサン・レオンといふ小さな村に生れたのである。その村は殆んど世間から懸け離れてゐて、繪のやうに美しく、せゝらぐ小川が縦横に通じてゐるさうだ。科學の詩人が生れるのに尤もふさはしい處かも知れない。

彼は生涯百姓をもつて終始した科學者で、宏壯な研究室に立派な道具を陳列してゐる學

者達からは常に「變則者」として斥けられてゐたさうであるが、彼はその著「昆蟲記」の序文の冒頭に

「私は此の昆蟲記の決定版を公にすることにきめなければならぬ。もう老衰して、力がなくなつて目は弱り動くことも殆んど出来なくなつて何んの仕事の手法もなくなつた。私は私の壽命がもつと長びくものと假定したところで今後此の書に更に何物かを付け加へることは逆も出来ないと思ふ」と云つてゐる。

彼は目も弱り殆んど動くことすら出来なくなるまで研究をつゞけたのである。世界的博物學者のこの悲壯な言葉に壓倒的な痛みを感じない人達が幾人あるであらうか。

蟲籠の虫のひげまで見える月

これはひとりといふ人の句だ。ひとりとは誰のことだか知らぬが、フアブルの靈に捧げる句として私はこれを選んだ。

幽靈の靴

春といふのも名ばかりで寒い／＼二月十三日の夜、われ等一行は別府の光卓や三猿堂等に見送られて葦丸で歸阪の途についた。

その時、一行に隣りして寝轉んでゐた一人の青年が大分港を出てから間もなく投身自殺を企て、美事に成功した。こゝでは古句の

ようごんす袂の石をすてなせへ

といふ譯に行かない。すこしく徐行してゐた船は再び速力を出して疾走しはじめた。斯うした場面へつきものの月が出てゐた。

「僕でなかつてよかつた」

と、女房を置き去りにして來た素人がうめくやうに云ふ。

「さうだ。君でなくてよかつた」

と僕も云つた。やりかねない素人だからである。若し素人だつたらといふ考へが暫し僕の頭の中を往來した。

それからはこの話で持ちきりであつたが、いつの間にか一人づつ淡い眠りに落ちて行つた。

翌朝は比較的早く眼が覺めた。向ひ側を見ると會社員風の廿五六の男が船室の鏡に向つて突ツ立つてゐる。ネクタイを結んでゐるのである。まだ手馴れないと見えてなかく結べない。漸くにして結んだ。それから上着を被て、オヴァーを被た。そのすぐ傍らには娘のやうな新妻がゐた。彼の女も下船の用意をしてゐたが、わが君様がオヴァーを被ると、あちらを向かせてブラシをかけてやるその手つきの危なかしい事、まるで現代式の五月人形を掃除してゐるやうである。誰の眼にも新婚旅行の二人である。よそ／＼しい態度のう

ちにも、どツかにうれしさが溢れてゐる。時々、なんか云つてゐるやうではあるが低聲で聞えない。

私は活人畫を見るやうな氣持ちでそれをじつと眺めてゐた。船が今治へ着くと二人は上陸つてしまつた。昨夜の身投げを知らない二人よ。いつまでもく幸福であれ。

船は今治を出て、高松、神戸を経て大阪に向つた。いよ／＼上陸間近になつて二柳子が「靴が變つてゐる」と云ひ出した。「大きさも、色合も、ちつとも違はないが、紐の手觸りが違うので氣づいたんです」

といふ。

ポイーを呼んで色々取調べさしたが判らない。

「昨夜身投げした方のと變つたのではないでせうか」

「さうかも知れない。海の上へ靴をぶら下げて聞いて見たまへ」

と素人が横槍を入れる。

「さうですな」

と、ボーイはさも困つたといふ顔をする。

「身投げするのに、わざわざ他人の靴を穿いて行くとは怪しからんね」

「いゝえ、その方の靴は遺留品として今朝今治の警察へ届けましたので……」とボーイが頭を掻く。

「では、それが二柳子の靴だ。さうすると残つてゐるのは幽霊の靴だ」といふことにきまつてしまつた。

二柳子は今でも幽霊の靴を履いてゐる。

近眼の微笑

老眼の人が新聞を読むのを見てゐると、先づ老眼鏡を出してかける。それから兩の手に新聞をもつて、グツと前方に突き出す。次に新聞と眼の中間に電燈をはさんで遙に新聞を読む。讀むといふよりは眺めてゐるといふ方が適切な形である。それはまことに悠々せまらぬ態度ではあるが傍から見るとなんだか滑稽な感じが湧く。

それと反對に、近眼の人が新聞を読むのを見てゐると、墨の上に落ちた針を探がしてゐるやうな態度で、新聞と眼との距離が甚しく接近してゐて全く鼻を打ちさうに思はれる。これも當人は案外平氣であるが傍から見るとなんとなく滑稽に見へるものである。

力好子題は一體何と何

といふ榮屋落の句があるが、彼は句會に出ても貼り出された題が見えない。それで隣りに坐つた人に必ず題は何と何ですかと聞く。力好などはたしかに石地藏に道を訊く方の第一人者であらう。

先日路上で、同窓の富士多といふ男に逢つた。僅に一間位しか間隔がないのに

「オイ、富士多」

と呼びかけても、ハツと立止まつたまゝで、何とも云はない。誰だか判然しないのである。彼の強度の近眼鏡がぎら／＼と光つてゐるのを見て、ハハア、センセイ見えないのだなと思つたので「阿蘇尾だよ。久しく逢はんア」と云つてやると

「イヨ、どうしてる」

と云ひ出した。何んでもないことだが萬事がこの調子である。従つて債權者が向うからやつて来るのを、早くも見つけて廻れ右ツをするやうな器用な世渡りは出来ない。

夢一佛の

言ひ憎い事に眼鏡の塵を拭き

といふ句の程度ていさの近眼きんがんならそれほど苦くるしくもないが、近眼鏡きんがんきやうを懸かけてるといふ意識いしきがなく  
なつて、眼鏡めがねを外はずす時ときと云いへば、寝ねる時ときと湯ゆに入る時ときの外ほかにはないやうになると我われながら  
滑稽こっけいな失敗しつぱいをするものだ。

私わたしも七度しちどの近眼きんがんで、街路がいろうや電車でんしゃの中なかなどで知しつた人ひとに逢あつても、そしらぬ顔かほでゐること  
があるのはそのためだ。多おほくは輪廓かんくわくでその人ひとを知る位ぐらゐなものである。銭湯せんたうの中なかでは全まったく、  
その輪廓かんくわくすら満足まんじくに判わからない。極ごくく親したしく逢あつてゐる人ひとは聲こゑで聞きわけけるに過すぎない。湯ゆ  
槽はねから出でる時ときに金盥かんだひを履はいて笑わらはれたことを覺おぼえてゐる。

街路がいろうや電車でんしゃの中なかで知しつた人ひとに逢あつても、知しらぬ顔かほをしてゐるので時々ときとき誤解ごかいされることが  
ある。それを遮さへけるといふわけでもないが、そんな誤解ごかいされ易やすい時間じかんを殆ほとんど讀書とくしょの時間じかん  
にしてゐる。私わたしが街まちを歩あるきながら本ほんを讀よんでゐるのは、一つは讀書とくしょに興きやう味みをもつてゐるの  
にも因よるが、私わたしにとつては、はつきり見みえないものを見みてゐるよりも、本ほんを讀よんでゐる方ちやう

が興味深いからである。

電車の中で、硬軟平均して年に一萬二千頁は讀める。昨年神經衰弱をやつてから、つとめて電車の中の讀書は避けるやうにしてゐるが、頭腦の調子が少しよくなると、その時間が惜しいやうな氣がする。私に取つて一日二十四時間は短かすぎる。せめては一日が四十八時間位あつてもいゝと思つてゐる。

大まかに云へば、近眼であるために、醜いものが美しく見える。女でも、景色でも、すべてが美しく見えるが、キネマや芝居などは、はつきりしないと不愉快である。値段の如何にかゝわらず一番前の方へ行く。講演などを聞くにしても辯士の顔がはつきりしないと不愉快だ。それで出来るだけ早く出かけて前の方へゆく。以前は芝居へゆくのには必ずオペラグラスを持つて行つたが、オペラグラスでは榎敷の藝者とか、舞臺の誰彼とか局部的にしかはつきりしないので、やはり興味を殺されることが多い。それで自分の懸けてゐる眼鏡の中へ、更に度の弱い小型の眼鏡を一個落し込むやうにして懸けてゐた。近眼のくせに

役者の表情がはつきりわからないと逆も不愉快で芝居を見てゐる氣がしないのだ。私の眼鏡に映つた喜多村縁郎などは女形であるのに鼻の下が眞ツ青だつたりして喜劇のやうな感じがするのは閉口した。山田九州男なども同じく鼻の下が青かつた。芝居を見るといふことが近眼のために他人一倍苦勞しなければならなかつたのと、殊に熱心に物を見る癖とで、芝居を見た翌日はいつも疲れて何をすることも出来なかつた。最も曾我廼家のやうな喜劇だと翌日疲れるやうなことはなかつた。

學校時代では福井校長が非常に強度の近眼だつた。なんでも二重グラスでその間にアルコールが這入つてゐるんだといふやうな話を聞いてゐた。教室へ這入つて来るのに扉をあけてから、暫くヒツと突ツ立つてゐられた姿を今も思ひ出す。式の時など勸語の中に顔が埋れてゐた。

幸田成友先生も、ひどい近眼だつた。大阪市史編纂の傍ら、私達に歴史の講義をされてゐたのであるが、ある時銀縁の安ッばい眼鏡を懸けて來られたことがあつた。昨夜盗人が

這入つて、枕元の金縁の眼鏡と時計とを失敬されましてね」と濃厚な先生が一寸苦笑されながら講義をされたことを覚えてゐる。近眼にとつて一番困るのは、眼鏡を取りあげられることである。

二三年前だつた。高島米峰先生の紹介で田山花袋氏を訪ねたことがあつた。ところが座敷に通つて見ると私の名刺を斯う透かして見て考へてゐられるので、横から読み上げて漸く刺を通じることが出来た。私の名刺の文字が小さかつたためである。花袋さんの近眼は豫てから知つてはゐたが、それほどひどい近眼だとは思つてゐなかつた。あの巨軀で小さな名刺を透かして讀んでゐられる姿などはどうしても漫畫の材料である。

私が鳴尾に住んでゐるころのこと、川柳家のKがよくやつて來た。彼は來る度に川柳を談すといふよりも、彼自身の戀愛を夢中になつて談して行つた。彼は意中の女をどうして呉れといふのでもなく、ただそれを談してさへゐれば愉快だつたのだ。夜の更けるまで談し込んで泊つて行つたことさへあつた。私から見ればKの戀は、戀を戀してゝやうにし

か思へなかつた。それも二十歳前後の青年がするやうな華やかな戀ではなくて、どこな  
 く雲を攫むやうな、危なかしいところのある實に淋しい戀をしてゐた。それを外の言葉で  
 云へば、戀の卵を懷ろに抱いてゐて、それがいつ孵へるか判らないのに、根氣よくあたた  
 めてゐるといふやうな儂ない戀であつた。私達夫妻は、いつも彼の夢幻的な戀に關する談  
 を聞いてやつて功德をしてゐたのであつたが、遂に彼は、その女を一度見て呉れませんか  
 といふところまで具體化させて來た。

私も、その女を見ることが彼のよろこびであるなら、何時でも一緒に見に行くことを約  
 してゐた。ある夏の夕のこと、彼が私の宅を訪れて

「今夜、これから行つてくれませんか」

とのことに、別に用もなかつたので、早速一緒に出かけた。所は神戸の新開地で商品館か  
 何かの階上に界限きつての大きな支那料理屋がある。Kはさつさとその支那料理屋へあが  
 つて行つた。私も續いた。そして、とある卓子を前にして二人は腰を降ろした。

Kは、いつものやうに、むつちりとしてゐる。給仕女によつて運ばれた僅の料理を私と共に喰べながら、遙の女を指さして

「彼の女がさうなんです」

と云つたが、勘定場の近くに四五人ゐる給仕女のところまでは餘程の距離がある。

「先刻、一寸來てゐたでせう。あれがYといふ女なんです」

と云うが、私にはなるほど、女は見えるが、いゝ女なのか、どんな顔の女なのか、すこしも判然しない。

「それだつたら、もつと、あちらの卓子へ座を占めればよかつたのに、君は僕の近眼を知つてゐるくせに、これでは薩張り要領が得られないぢやないか」

はる／＼と神戸あたりまで引ツ張つて來て、これである。彼に云はせれば、あの娘たちがみんなKを知つてゐるので、肩入に來てゐると思はれるのが嫌だつたのかも知れないが近眼に女を見せるにしては、あまりに遠いところであつたのには閉口した。

遂々私は便所に立つことにした。幸ひ、その女が便所のあるところを教へてくれたので一寸顔を見ることが出来たが、いろんな談をして見ない以上、女がいゝか悪いか、わかる筈もない。それなりけりで、要領を得ず仕舞ひに引き上げた。これも私が近眼でなければもちつと何んとか出来たかも知れない。

私は莢豆の

ひばり鳴いたとてまぎれましよかね赤椿

といふ句を思ひ出す度に、あの新開地の支那料理屋にゐたYといふ給仕女のことを思ひ出すのである。そのYは支那人の父と日本人の母をもつてゐた眼の涼しい女であつたが六年間思ひつけてゐたKのものとはならなかつた。しかし「鳴尾の蛙の鳴き方と讃岐の蛙の鳴き方とは違ひますね」といふデリケートな感覺の持主のKの戀人としては實にふさはしい女であつたか、なかつたか、近眼の私には、一度逢つただけでははつきりしたことは云へない。

私が近眼だつたために、人知れず苦しんだことや、豫想外の失敗を繰り返したことは數限りなくあるけれども、それも既う古い話となつては何等の興味を喚起させることが出来ないものとなつてしまつた。が、こゝにたつた一つだけ今でも思ひ出して苦笑を禁じ得ない話がある。

それは冬の日の午後の五時過ぎだつた。空腹をかゝえて事務室を飛び出した自分は、街路にたち罩めてゐる夕靄の中に立つて電車を待つてゐたが、なんとなく歸りが急がれてならなかつた。ふと振りかへると、後方から黒い大きなものが疾風のやうに近づいて来る。「ハハア、自動車だな」と思つたので、何んの躊躇もなく私は片手を舉げて立つてゐた。黒い影は見る／＼接近して來たが私の手を認めないのか更に速力を弛めやうともしない。さては誰か乗つてゐるのかしらと思ふてゐる間もなく、私の方へ快速力で走つて來たので、私はぐツと身をひいた。その途端に私の眼に移つたのは、大きな金縁の裝飾のある靈柩車だつた。

## 傘の行衛

一年三百六十五日のうち、六十日や七十日は雨が降る。或はもつと降るかも知れぬ。僕は統計表を調べた結果を云つてゐるのではない。ただ感じで云つてゐるのである。兎に角特殊の國は棄て、措いて、どこの國でも雨の降らない月は稀だ。従つて雨の降らない年は無い。雨が降ると傘をさす、ささないと濡れるから乾度さす。さうなると傘は立派な生活の必需品だ。

けれども、雨があがるとすぐに生活の必需品でなくなる。すぐ人間から忘れられてしまふ。傘はどつかの隅ですこぶる手持無沙汰な顔をして突ツ立つてゐるか、寝そべつてゐる。私はこの傘の無聊を慰めてやりたいと思つて、この漫談に引つ張り出して來たのであ

る。

芝居でも傘が一ト役うけたまはつてゐるのが随分ある。お濠端の伊豆守と云へば屹度傘を思ひ出すし、山崎街道と云へば定九郎が傘の雫を切つてゐる姿を思ひ出す。それ位思ひ出す傘を、雨があがると餘所へ忘れてくる。

かと思ふとこの雨に濡れて歸へすのも氣の毒だとウツカリ人情味を出して貸さうものなら、なか／＼に返へしては來ない。

古句は

人柄へ傘を一本貸しなくし

と巧いことを云つてゐる。

ある店では百本の貸し傘が、驟く間に姿を消してしまふので、店員への貸し傘には保を設け、翌日すぐ返へした者には無料であるが、それから一日でも遅れると一日について五錢宛の罰金を課した。尤も紛失した場合には一圓二十錢支拂はされる。延滞料も辨償金も

すべて月末に月給から差引かれてしまうのでウムもスーも云へない。傘は思つたより正確に係の手へ戻つて来た。溜つた金は菓子に化けて配給された。

ところが係が一寸油断した間に、またもや百本に近い傘が雲散霧消してしまつた。これは嘘のやうな本當の話だ。

昔、駿河町の三井呉服店(今の三越)では自店の印を入れた雨傘を作り、お客に貸し與へたが、之れがまたなかく戻つては來なかつたらしい。古川柳に

降りあげくとんだところに駿河町

といふ句がこれを證明してゐる。尤も三井では返へして來なくても、雨さへ降ればあちこちで自店の廣告をして呉れることになるので寧ろ戻らない方がよかつたのだ。これを大阪では下村呉服店(今の大丸)がやつたさうだ。

今では交番や劇場で貸し傘をやつてゐるところもあるが、これは保証金制度であるから戻さなければ買つたかたちになる。不精者の率がどの位あるものか、そこまでは知らぬ。

奈良といふところは總體雨がよく降ると見えて奈良に遊んだ人で、多少とも雨に遇はな  
 い人は稀である。十通行けば七遍までは雨に遇ふものと覺悟してゐなければならぬ。そ  
 の代り他所と違つてバラ／＼と來ると、直ぐ傘を賣りつけに來る。東福寺や二月堂で雨や  
 どりをしてゐると、雨傘や台羽を抱え込んだ男が、鹿と鹿との間を抜けてやつて來る。そ  
 れは奈良風景の一つだとも云へる。

新渡戸博士あたりが思想善導を説けば、なるほどと思ふが、田中首相や落語家が思想善  
 導を説くんでは滑稽なやうに、同じ傘でも一人でさしたんでは色氣がないが、二人でさす  
 と情趣が深い。

鞍馬の句に

相傘は風呂屋の暖簾までのもの

といふがある。古句では

傘も二人でさせば戀になり

傘の行衛



といふのである。なんでもないやうだが巧いことを云つてゐるではないか。

曲藝の綱渡りでも傘を使ふ。これは藝そのものを非常に派手に見せるが、一つは身體の中心をとるのが目的らしい。いつのころから傘で綱渡りをするやうになつたのかは知らないが、日本では空を飛ぶ稽古をするために、最初は屋根から傘をひろげて飛んださうであるから傘と空中とは、古い縁古があるものと見える。

こんなことを云ひ出したついでに、一體傘といふものはいつ頃出来たかといふことを話しておこう。尤も詳しいことは知らない。

今から三百三十五年前、後陽成天皇の文祿三年に泉州堺の商人で納屋助右衛門といふ人ガルスンから蠟燭傘千挺を豊臣秀吉に献上したことがあると、さる本に書いてあつたが、源順の和名抄にも傘の事が書いてあるさうだし、又平宗盛が傘屋の息子であつたとも傳へられてゐるところから考へて見ると、既に文祿よりも以前にあつた譯である。

花札の十一月の二十點には小野道風が傘をさしてゐるが、これも相當の根據があつての

ことか、どうだか知らぬが、何れにしても「からかさ」といふ語から考へて見れば支那から渡つて来たことだけは疑ひのないところであらう。

傘の古句をすこしく並べて見やう。

から傘を半分貸して廻り道

當座逃れは傘を横にさし

傘を上へすぼめる大嵐

かうさしてゆきやれと破れ傘を貸し

面白く傘を取られるつむじ風

からかさを雫で返す律義者

相傘をいたちごつこの様に持ち

女ねぢれる橋のからかさ

相傘の岬も切れる水溜り

傘 行 の 傘

傘借りに沙汰の限りの人が来る

腹立つて出る傘は開きすぎ

「斯うさしてゆきやれと破れ傘を貸し」などは巧いもんだ。「女ねぢれる橋のからかさ」は十四字詩ではあるが、浮世繪を見るやうだ。次に今人の句では

この傘へ入れてやりたい停留所

教はつたとほりに急ぐ宿の傘

どれなりとさして歸れと長火鉢

初戀のとうく傘がきせられず

さしてみても廻してみたい新らの傘

辭退した傘が戀しい軒傳ひ

おきせ申す傘が生憎ひろがらず

追ひかけて来てきせかける芝居茶屋

緑 天

同

同

同

佳 汀

同

同

蚊 象

傘の行衛

先斗町一人二人の傘をよけ	同
ちと寒い様子で疊む宿の傘	水府
傘が倒れて早や終點へ着きにけり	同
傘の雫も一つや二ついゝ女	同
せく傘は風に向つて行く如し	五葉
用あつて出る番傘へ力過ぎ	同
お父ツさん傘が重たい年になり	同
島原を見るだけといふ宿の傘	飴ン坊
お返しに及びませんととんだ傘	同
お隣の子のと學校へ二本提げ	同
お妾があたしの傘を貸してあげ	路郎
母親に押しつけられた傘を持ち	同

新世帯ただ一本の傘を貸し

降りつづく雨に印を入れずさし

などがある。みなそれぐちに味だを出してゐる。

同 同

猫の寫眞

猫といふと、講談では黒田騒動を思ひ出し、一般には藝妓を想起するやうである。愛猫の點から云うとお妾を思はせられ、小説では漱石を思ひ出すやうである。しかし、ここでは、そんなことを談さうとするのではない。私が江戸堀に住んでゐたころ、一匹の仔猫を何ツ處からか貰つて来て、カイゼルと名をつけて可愛がつてゐた。

ところが妻君の方では二人の子供でさへなく、面倒なのに、この上猫の世話までさせられてはと、一寸と顔をしかめてゐたが、私さまアゑゝがな、猫の一疋ぐらゐ、放つて置いても育つぢやないかと云うてとりなしたために妻君も遂に諦めて、カイゼルのために洋食皿を一枚與へ、それへ純ちゃん(長女)の牛乳の幾分を注いでやつて食事をさせることに

した。これでカイゼルも完全に私の家族の一員に加えられ、臺所を中心に迂路々々して暮らしてゐたので私もやれ／＼と思つてゐた。

ところが、暫くすると又々妻君から抗議が出た。

「なんとかならないでせうか」

「なんとかならないかとは、何の談だ」

「あのカイゼルのことですよ」

「カイゼルが、どうかしたのかい」

「どうかしたかどころではありませんよ。純ちやんのお茶碗へ首を突ツ込んで御飯を喰べるんですもの、それにカイゼルの洋食皿から純ちやんがいつしんぼして仕方がありません

わ

「さうかね」

「貴郎は暢氣だから、さうかねと澄ましてゐらつしやるが、そんなことをされては妾が困

つちまうわ。それにカイゼルが御世ちゃん(一女)の胸の上に上つて、澄ましてゐるんですもの」

「そいつは弱つたな。赤ちゃんの胸の上に仔猫が上つてゐるところなどは誰かが描けば面白い構圖にはならうが、實際やられてはたまらないな、それでは近いうちに何んとかせう」

と云うことになつて、そのころ早稻田の英文科に入學するために私に英語を教はりに來てゐたYといふ青年の家へやることになつた。ところがYは、私とその仔猫を愛してゐたのを知つてゐたので、そのお禮にと云つて實物よりもつと大きなカイゼルの寫眞を持つて來てくれた。今でも私の家の玄關の正面に來客を睥睨してゐるのがそれである。

私は其の頃本屋をしてゐたので、その寫眞を額に入れて店頭に吊るした。漱石さんが死んだ時などは一時この猫の寫眞が評判になつてゐたが店をやめてしまつてからは單に一室を護る猫となつてしまつた。

鳴尾時代にも私の家には猫がゐたが、乳離れがして間のない仔猫だったので、次ぎくに二匹とも寒さに凍えて死んでしまつた。裏の塀の壁により沿ふやうにして日向ぼつこしてゐた猫の姿が今でも眼に残つてゐる。何れも裏の庭の隅へ葬つてやつた。

私の家では猫の子は育たないのだといふので其の後猫の子を貰ふことは止めにしてゐたが、どこの猫だか納屋の炭俵の上で三匹仔猫を産んだ。別に追ッ拂ひもせぬので、のそのそと裏庭へ出て來た。天氣のいゝ日は親猫が日向ぼつこをしてゐる横で、三匹の仔猫が組んづほぐれつして遊んでゐた。いつの間にかやら家の子供とも仲よしになつて、家の猫としての待遇をうけてゐた。

亡くなつた長男のロンドンが小學校の一年生に入學すると、猫の作文を作つたりした。

尚乃は 柳談會の時に

叱られもせず迷ひ猫納屋で産み

といふ句を作つた。三太郎の

三匹になるとドラ猫歩き出し

なども其の頃を思ひ出す句である。

ある時などは可愛らしい仔猫がどつかからかやつて来て座敷に悠然と坐り込んで、自分の家のやうな顔をして暮らしてゐたが、二三日すると何處へ行つてしまつた。すぐ裏手に文樂座へ出てゐる三味線弾が住んでゐたが、その猫らしかつた。

岸の里へ移つてからは猫も犬も餌はない。子供の方がだんく殖えるので猫の子どころではなくなつたのである。

ところが近ごろ、私の家では莫迦に鼠が殖えて、五女のリリちゃんに鼠にかまれてから急に猫を飼ふことが問題になり出した。そして猫の子がゐたら下さいませんか、出入りの料理屋や炭屋やその外、人の顔さへ見れば猫を貰うことを頼んでゐる。

それにつけて思ひ出すのは西洋のお伽噺の中に、鼠ばかり澤山ゐて猫の一匹もゐない國へ、ある人が猫を連れて旅をするとそのために鼠がゐなくなつた。鼠でなやされてゐた國

の人々が録の偉大な力を非常によろこんだが、さて鼠が一匹もひなくなると、今度は猫の異様な鳴き聲に不愉快を感じるといふのがあるが、どうせ人間は得手勝手に出来てゐるので私の家でも鼠がひなくなつたら、厄介視される日が来るに違ひない。

私の學生時代に隣家では猫を可愛がつて筆筒の抽斗の中へ蒲團を敷いてやり、そこへ寝させてゐたが、幾ら可愛いと云つても程度を越えると滑稽なばかりでなく一種の浅間しさを感ぜさせられる。

岡本にゐる小説家の谷崎潤一郎氏の家では十一匹もゐるさうであるが、これは全くの愛玩用で猫が鼠を捕ると猫の人相ではない猫相が悪くなるからと云つて決して鼠を取らせないさうであるが、それでも小説を書いてほつとした時などに、びらうどのやうな猫が首のあたりへ駈けあがるのを愛するのであるとすれば人間は人間を中心として勝手なことしか考へないものなのである。尤も谷崎氏の猫は、そこらを迂路々々してゐる猫とは猫が違つて一匹が幾十圓も幾百圓もする猫ださうである。鱒一匹失敬したと云つて竹箒で追ひ

廻はされる猫のことを思うと猫の世界にもブルとプロがある譯だ。太鼓坊の句に

不始末を云はずに猫を叱りつけ

といふのがあるが、あのお伽噺といひ、この句といひ、人間の我は他の動物に對しては殊に露骨に表はれるのも大きな皮肉である。

愛の巢

三角關係、四角關係、五角關係のうちの二角が他の角と交渉を持つことを厭うやうになると、愛し合つた二角だけが、他の角から離れて生活をする。それを世間では愛の巢と呼んでゐるが、その愛の巢も經濟問題のために多くは破綻を來すものである。

小説を讀んで居ると、その中の人物の誰も彼もが、一體どうして生活してゐるのか、ちつとも經濟問題に觸れてゐないことが多い。それでも讀んでゐる方ではそれを別段不思議だとも思はないで讀んでゐるが、愛の巢では小説のやうに、いつまでも甘い戀をささやいてゐるわけにはいかない。だんく懐が淋しくなるにつれて、前途のことを考へずにはゐられなくなつて來る。愛のクライマックスに達してゐた當時には、よしや愛の巢の天井

が低くからうが、襖が破れてゐやうが、二階への階段が攀上らねばならぬやうな急勾配であらうが、更に問題にもならなかつたが、月日が経つのと反比例に懐が淋しくなり、懐が淋しくなるのと正比例に、愛のデグリーが遅減して来る。

さうなると天井の低さが、はつきりと判つて来るし、襖の破れには前途の暗澹さが想はれて来るし、階段の急勾配が、わけもなく腹立たしくなつて来るものだ。お互の夢さへも離れくになつて来て、女の夢の中には曾ての男の愛撫や、老ひたる母が我が子の歸つて来るのを手を受けて待つてゐる姿などが廣告塔のやうに點滅する。男の夢の中には女のだらしなない態度から来る厭悪や、故郷の青い空が愛の手をひろげて自分を待つてゐるやうな情意が交錯して、二人の中に大きな溝をつくらうとする。翌日は二人ともくらしい顔をして無言つて暮らすのが愛の巢の定石だ。

武徳の句に

宿命だなどと愛の巢早や別れ

といふのがあるが、結局ここへ落ちて来るのも、賣れる限りの物は殆んど賣り盡くして終ひ、働くにしてはあまりに世間知らずであるからである。既う手許に残つてゐるものと云へば、お互の愛だけであるが、その愛も家賃や米代の前には三文の値打もないので別れ話  
が首を擡げて来るのだ。

同じ愛の巢でも、琴舟の

愛の巢に若い燕がパンを焼き

といふやうなものもある。朝もパン、晝もパン、二人の食事は至つて單純ではあるが、パンを焼く若い燕には、それさへ大きなよろこびなのである。これとても月日が経つと、生活の壓迫が押し寄せて来ないわけには行かない。假令生活が、どうにか切り抜けるにしても、若い燕にとつては菜文の

愛の巢に愛の過剰を持ってあまし

といふ句に共鳴しないではゐられないだらう。求めて得られなかつた愛の渴望が若い燕に

向つて奔騰するのである。世間がなんと云はうが生活に窮しやうが行くところまで行かねばおさまらない。

稻四郎の句の

愛の巢で女の方は歌を詠み

といふやうな、のんきなわけには行かない。いよ／＼二つ進も三つ進も行かなくなると、私の句の

若い燕死ぬ相談をされてゐる

といふところへ落ちつくのだ。

愛の巢に限らず、もと／＼戀と云ふものは儂ないものだ。私の句に

果敢さは車掌の戀の刹那主義

といふのがあつたが、あれは必ずしも車掌に限つたことではない。誰でもさうなのだ。繰り返へしていふが戀といふものは儂ないものだ。

どんなに愛し合つてゐるやうに見へて居ても心底から信じてはゐないのだ。若しやといふ心が、どツかの隅にひそんでゐるのだ。それが證據に二人の話の中心點は、いつも「あなたは私を愛しますか」「あなたは永久に私を愛して下さいますか」「いつまで愛して下さいますか」「きつと愛して下さいますか」の如きものである。なんと憫れな愚問ではなからうか。戀なればこそこんな愚問も發せられるのだと辯明する人もあらうが、どうしても信じ切れぬからこそ、接吻した同じ唇からこんな愚問が飛び出すのである。彼等は夜中に相手を起してまでも、こんな風の愚問を繰り返してゐるのであらうが、その答も又「勿論です」とか「死んでも二人は離れないでせう」とかいふ頗ぶる平凡な愚答を繰り返へしてゐるのである。この愚問と愚答では何處まで行つても果てしが無い。矢張り信じられない。信じられないから、唯一の道を死に求める。一緒に死ぬといふことをせめてもの慰めにせうとするのだ。最後は古句の

死にきつて嬉れしさうなる顔二つ

となるのだ。しかし、これは既う古い手だ。近代女性は決してそんな真似はしない。モガの哲學では、そんなことを相談する男があれば「お莫迦さんね」と一蹴してしまふ。第一戀愛そのものが利那的だし、戀愛は享樂すべきものとされてゐるんだし、世の中に死に價するほど愛すべき相手がゐるやうなどとは夢にも思つてゐないんだ。従つて三角關係だの、四角關係だのといふ角度はない。當つて見給へ、すべくしたものさ。彼の女たちは何時までも若くて美しい氣で「あの男が私のステツキになりたがつてゐるのよ」なんかんといふ氣になつてゐるが、いつのほどにか七十位の男の看護婦にされてゐるのも詰らないではないか。それよりか、一文字の句の

戀人を逃すまいとて嘘をつく

といふところが人生のもつとも楽しい時だらう。

## 保険屋と新聞屋

漱石の「吾輩は猫である」の中に

「只怒るばかりぢやないのよ。人が右と云へば左、左と云へば右で、何でも人の言ふ通りにした事がない。そりや強情ですよ」

「天探女でせう、叔父さんはあれが道楽なのよ。だから何かさせ様と思つたら、うらや云ふと、此方の思ひ通りになるのよ。此間蝙蝠傘を買つてもらふ時にも、要らない、要らないつて、態と云つたら、要らない事があるものかつて、すぐ買つて下すつたの」

「ホ、旨いのね。わたしも是からさうしやう」

「さうなさいよ。それでなくつちや損だわ」

と云ふ會話があるが、人間は大體、天探女に出来てゐるものらしい。

他人が勧める時には嫌がるが、既う之れでおしまひだと云へば無理にも欲しがる。だから香具師などに

「これは賣るのではありません。まあ、忙がない人は見て行き給へ」

などに見送られて、結局賣りつけられたりするのだ。中等學校の全國野球大會の座席券などもタツタ一枚手に入れるため、昨年などは人死があつたとさへ云はれてゐる。そして買へないとなると五圓のものを五十圓近くまでプレミアムをつけて買ひ取つた人さへある。その癖、保険の勧誘員などが来ると毛蟲のやうに嫌らう。幾ら勧められても人間は死ぬものでないやうな顔をして見向きもしない。

双葉子の句に

保険屋は勝手にまつて歸るなり

あきらめた家を保険屋二度通り

といふのがあるが、何れは死なねばならないんだし、保険金が這入れば遺族のものは大いに助かるんだが、そんないゝことを勧めに来てくれる人を随分侮辱したものである。と云つたところで私の家でも、眞盆まで出して「よく入らつしやいました」とは云はない。と云ふのは〇〇生命とか云ふのに大變不愉快な経験をさして貰つたからである。しかし、これは保険そのものの罪ではない。保険屋の廣告をするわけではないが、保険はいゝものだ。いゝものだから誰でも飛びついて來るとは限らないのが世の中だ。

保険に限らず、貯金でも禁酒でも禁煙でも、すればいゝ位なことは誰でも知つてゐるがさて他人から勧められるとなると何ンとか理屈をつけて逃げたくなるのである。人間は何處までも厄介な動物である。

光路に

新聞屋拜むでからも斷られ

といふ句があるが、新聞屋も紙數擴張のためには随分執拗に勧誘する。勧めるといふよ

りは押しつけに來るのだ。昔はぶツきら棒に突ツ立つたまゝで勤めて行つたものであるが今日では各紙の競争が激げしいので、そんな生やさしいことでは一枚の新聞も餘分には取つてくれない。だから頭から拜み倒しにかゝる。頭を地へすりつけてでも、とらさうとする。この手段はかなり有効らしい。氣の弱い者はどぎもを抜かれてしまう。食ふための努力は凄まじい。品位がどうの斯うのと云つてはゐられないのだ。

普選第一回の衆議院議員の總選舉の時、大阪から出たYといふ候補者の如きは泣く拜む鼻をすゝる、遂には演壇から降りて床に額を擦りつけたではないか。彼の額に砂がくツついてゐたことを目撃したものはあまりの莫迦々々しさに彼を見捨ててしまつたが、この乞食のやうな態度に清き一票が惠投されて彼は遂に當選し今や天下の政友會代議士となつてゐる。新聞屋を笑ふ前に先づ、此の代議士を笑はなければなるまい。

私がある政治家にそのことを談して、政治家といふものの愚劣さを笑つたところが、その政治家は案外平氣な顔をして



「それは泣き落しといふ手なんです」

と云つた。泣き落し、泣き落し、まるで娼婦の手練手管をそのまま應用するだけに、魂までが貞操観念を持たないのも故あるかなである。又彼等の中には、その最後の日の演壇に於ては自己が言論戦で斃れて後己己の愼を示すために、演説の途中で故意に卒倒しかけると、

「先生ツ、危ぶないツ」

と樂屋から飛んで出て、忠臣藏のやうに背後から抱きとめる役が控えてゐるんださうな。すると辯士は後方へもたれかかりながら、悲痛極まる聲を振り絞つて

「棄て置いて呉れ給へ。僕はツ、僕はツ、この儘此處で斃れても、此の演壇は一步も退りぞかないぞツ」

と叫ぶ。聴衆は思はず感動する。斯う云ふ芝居をその夜のどの演説會場でも繰り返へすことになつてゐるんださうな。なんと諸君ツ、あまりにも人を食つた話ではないか。

新聞屋は拜み伏す、新聞屋は泣き落す、しかし、それは彼等政治屋の小さなお弟子に過ぎないのだ。

質 趣 味

I

世の中はさまざまである。短い一生を何んの惜氣もなくせつせと質物を拵えて生きてる人がある。質物も巧く出来ると案外面白いものかも知れぬが、それで生活をしなければならぬところまで行くと反つて悲惨である。

石鹼でも白粉でも、有名品になると必ず七つや八つの質が出来る。他人に廣告させて置いて、自分の粗製品をうまく賣りつけやうといふ算段かも知れぬが、思ふ寸法に嵌まつて行かぬところに世の中の面白さがある。最もこれは趣味でやつてゐるのではなくて、生き

んがために自分の顔に平氣で泥を塗つてゐる人達である。

屏風や軸物でも一生二番ものを描いて暮らしてゐる人がある。人によると眞物を凌ぐやうな作品を描くが、それでも自分の名では、ちつとも賣れないから滑稽である。こんな滑稽は悲惨な滑稽だ。

名は云はぬが私の知つてゐる畫家にも一人あつた。寺崎廣業の二番ものを屏風にでも描かせると、廣業そつくりだつた。巧いものだ。屏風そのものがよければ誰が見ても立派に廣業だつた。が、しかし悲しいかな二番ものには二番ものの悲哀があつた。その畫家が筆を揮ふ屏風そのものが、名古屋物の質の金屏風であつた。しかし地方の古道具屋などは隨喜渴仰して、その質物を持つて行つたものだ。彼等は地方の舊家の賣り立てがある場合にそれ等の二番物を混せて胡麻化して相當の利益をせしめるんださうである。二番物の筆者がいつまでも下積みで甘んじなければならぬのは獨創力がないからで、質は幾ら巧くても質であることの悲哀である。世間はどのやうに胡麻化しても觀る人が觀たらそこには本

當の侍と役者の侍ほどの相違があるのである。

まだその程度の質は、生き甲斐のあるなしは別として、罪が軽いと云へば、云へぬこともないが、紙幣の質造になると脊後へ手が廻はる。しかし世間には紙幣の質造を作つて、うまくと大金をせしめやうとする人間が相當にある。これ等の質造の多くは印刷で大仕掛けにやるやうであるが、なかには毛筆で根氣よく紙幣を描いた男がある。五圓札一枚描くためには、五圓以上の勞力を要する譯であるが、丹念に五圓札を描いてそれで煙草などを買つては剩錢を取つてゐた青年畫家さへあつた。この畫家にとつて五圓札を描くといふことは一つの趣味であつたかも知れないが、描きあげて見てそのあまりに巧妙に出来上つたのに自分ながら惚れ／＼とした。さうなると、他人がどの位信するかどうかがためして見たくなつた。第一回の試験は何んの苦もなくパスした。彼が捕へられるまで引き續いてこの質造札描きで暮らしてゐたことは云ふまでもない。そこにはもう趣味としての興趣は残つてゐなかつたのである。

斯う考へて來ると、一番罪の無い質と云へば聲色であらうと思ふ。聲色は正徳年中、江戸で葛清屋平治が俳優芳澤あやめの聲を擬せ、紺屋町の酒賣の下男某が藤村半太夫の聲を真似たのが本朝の始ださうだが嘘かほんとか保證は出來ない。

川柳家には聲色の巧い人が多い。中でも東京の雀郎などは巧い方だといふことを聞いてゐるが私はまだ聞かない。聞かない方がいゝのかも知れぬ。函館の花童子も一寸やる。大阪では游二郎が巧い。万よしも時々やるが万よしの聲としか聞けぬ。

古川柳に

それは誰だと聲色をむこくする

といふのがあるが、聲色でもやつて見やうかといふ人を顔色なからしめる句である。維想樓の句に

泣いてゐる窓とは知らず聲色屋

といふのがあるが、川柳家の觀察が障子を突き透うしてゐるのも面白い。

味 趣 屢



團十郎の聲色を誰にでも聞かしたがる人に久良岐がある。私も聞かされた一人であるが巧いやうに思はれる。折角の團十郎も巧いやうに思はれるでは心細からうが私は真物の團十郎を知らぬから、うつかり褒めたら嘘になる。巧いらしい位なところで勘辨して貰うことにする。しかし賢の團十郎と賢の團十郎なら比較出来ぬことはない。數年前に阪神の苦樂園で大阪日日主催の川柳大會を開催したことがあつた。その時に一川柳家として出席した袋中は現代稀に見る奇人であるが、私はある機會に彼が創始したといふ茶劇十八番中の勸進帳を観せて貰つた。ところがその堂々たる藝風には感心させられた。正に旦那藝ではなかつた。袋中の藝は九代目團十郎の直傳であり、現代の俳優にして彼に教へられるところが多いと云はれてゐる人であるだけに團十郎を知らぬ私にも、二番ものとしてのよりよきものであらうことをうなづかせられたのである。

袋中は名古屋の産であるが、七福神一萬體を蒐めて七福堂を建立するかと思へば一時に百萬の財を折花攀柳の巷にまき散らして今紀文の名を謳はれた男である。素寒貧となつて

から、流れく／＼て苦樂園に來り、彼獨特の茶劇を創始したわけである。彼は又玩具の蒐集家としても知られてゐるが、彼の愛玩してゐる玩具の如きも世界的に蒐集されてある。袋中はどの點から見ても、もう賀趣味の範圍を立派に脱脚してゐる男であるが、その勳進帳はなんと云つても團十郎仕込みの藝風でおそらく團十郎の二番物としては上乘なのであらうと思はれる。しかしながら二番ものは何處まで行つても二番ものだと考へると春の山に霞がかかつたやうな悲哀を感じないではゐられない。

動物の聲色では猫八が天下に知られてゐるが彼はそれで飯を食つてゐる人である。その猫八の二番ものもちよい／＼聞かされるが二番ものは矢張り眞物に及ばない。川柳家では死んだ松雨が巧かつた。殊に彼の河鹿の鳴聲ときたら玄人裸足だつた。もう一度聞きたいと思ふ。

II

昨日まで仲よく一緒に暮らしてゐた者が、今日は別れて暮らしてゐるやうに、世の中で  
は思ひがけない時に、思ひがけないものを見せつけられるものである。私が私の小さな玄  
關に降りたつた時に不意にいやなものを見せつけられた。それは外でもない。私の玄關の  
敷石が毀はれて肌を露出してゐたのである。私はその敷石が全部人造石だとばかり思つて  
ゐた。なのに、その敷石の一部が毀はれて中から赤顔の煉瓦がにゆつと顔を出してゐたの  
であつた。

「おゝ可哀相な煉瓦よ」

と私は思つた。

「お前は黙つて、そこに隠れてゐたのか。誰にも知られずに葬り去られやうとしてゐたの  
か。おゝ、それにしても可哀相な人造石の敷石よ。お前は僅に二三分の薄い厚味しか持つ  
てゐなかつたのか」

私は心の暗くなるのを覺えた。なんだか近ごろの人間を如實に見せつけられたやうな氣

がしたのであつた。

「思想善導がなんだ」

と私は大きな聲を毀はれた敷石へたたきつけるやうに云つた。社會は此の人造石の敷石のやうに嘘の塊なんだ。それを知るとは悲しいことだが、知らずに生活する事はもつと悲しむべきことだ。打水をしても、じめツと濡れるばかりの人造石の敷石にはウンザリさせられる。少々は變挺に凹んでゐてもいゝから、その凹地の水溜りに顔の映るやうな敷石であつてほしい。

「そんなに人造石の敷石が嫌いだつたら宿替をしたらいゝではないか」

と忠告をして呉れる御親切はありがたいが、今の世の中では、さう樂々と人造石と花崗石とを取換えさせては呉れない。私の云つてゐるのは敷石だけの問題ではなくて、頭の尖から足の爪先まで擬物でないことを希つてゐるのだ。ぞろりとした風をして裏長屋の二階へ戻るやうな生活はしたくないのだ。詰らなければ詰らないなりに、食住衣が均衝させたい

からだ。それでこんなことを云つてゐるのだ。

すつと見渡すと見渡す限り擬物の波を打つてゐる。殊に女はイミテーションの美に憧れの夢をつないでゐる惘れな生物だと云つても過言ではないだらう。その頭髮の中にきらきらときらめいてゐる七色の星もイミテーションなら、身に纏ふてゐる蟬のやうな美しい衣も又イミテーションである。指に輝く石、首飾りの璧、一つとして擬物ならざるはない、それでゐて何等の不安もなく銀ブラや道ブラをしてゐるのを見かけると、ああ偉なるかな女性！と毒舌の一つもたたきたくなる。

指環や首飾のダイヤの如く、イミテーションと知つて、なほそれに快感を感じつつある世の婦人たちはいゝが、イミテーションの敷石に妥協さされてゐたものが、その敷石の中から煉瓦が顔を出して私たちの生活に輕侮の一瞥を投げかけたと知つたなら、それがどんなにか悲しむべき社會相でないとは誰が云ひ得るだらう。しかし、私は私の句の

借金があるとは見えぬ石疊

のやうな欺悪あぐな生活せいかつよりも、煉瓦れんがが顔かほを出だしてゐる敷石しきしの方に、より人間味じんげんみの多おほいことを思おもはないではゐられないのである。

床下の佛像

柳秀がベルリンから「未だ寧日無之赤毛布を持ちあるき居り候。再度の洋行に當り、格別氣づき申候は獨逸婦人の美しきもの極めて稀なること並に大阪市とたいして異ならざる感致し候。二點に御座候」と云つて來た。いささか旋毛の曲つた柳秀は西洋をちつとも讚美して來ない。洋行も面倒臭いと云つた風である。此の點では洋畫家の楢重とどつかに共通點を持つてゐる。楢重が先年佛蘭西へ出掛けた時なども、着くか着かぬに、佛蘭西へ來ても仕方がないといふやうな口吻を洩らして直ぐに歸つて來た。これも物ぐさで異國よりも日本がいろいろらしい。數年間あつちにゐた商大の棗田教授は世界戰爭の中から逃げ歸つても、歸朝した翌日から取引所の講義をすること常の如くであつて、あつちの談を

これつばかしもしなかつたので有名である。さうかと思うと柴舟の句の

小便をしにマルセーユまで出掛け

の口で、一寸西洋を覗いて来て無闇に、あつち、あつちを振り廻はしたり、臆面もなく單行本の一冊も出して低い鼻をうごめかしてゐる人もある。實に皮肉なコントラストではある。

柳秀は醫學博士で醫大の教授である。

「私も病人の手を握つたことがありますですが藪ですから止しました」

と云つて澄ましたものである。それでゐて次から次へと生れて來る博士の産婆役をつとめてゐる。川柳の巧い一徹も柳秀の産婆役で巢立ちした醫博の一人である。一徹の談では「先生は何を聞いても知らん」と云ふてゐられますが、ぼち／＼聞いてゐると随分詳しく調べてゐられるのに驚きます」

とのことだ。私には専門のことは一切判らないが、そらとぼけてゐて皮肉を飛ばす酒間の

柳秀から想像すればうなづけないことはない。亂取に

ドア閉めた後の博士に音がなし

といふ句があるが、専門の研究を續ける外に、此の博士には川柳がある。

箸紙へ内政と書く面白さ

看護婦のひく琴の音は哀れなり

兒のたちがいゝの悪いに夜が更け

借りる氣へ膝をくすせのまあ飲めの

溺れたるかたち空瓶沈み行く

ニタ銚子女房そろく無口なり

大器晩成か歐洲へまた出かけ

玉突の目にしむ煙草棄てをしみ

とりどりに巧い。殊に「ニタ銚子」の句は酒好の博士にとつては淋しい句だと思ふ。

柳秀は又華やかな花柳情緒の匂に於て知られてゐる。少しく列べて見やう。

駈けるほど舞妓錦魚の型になり  
立ち寄つた廓の姉を見違へる  
欺す氣と惚れてる氣とが差し向ひ  
忙しい妓ですと女將口を足し  
力なく咳をせく妓の美しく  
力瘤みせて舞妓をいやがらせ  
心中へ明日のおたちを聞きに来る  
お流れの御返盃のと吞される  
總立ちの中に舞妓はふるへてる  
すかれますさかいと長い腮を撫で  
いゝ氣だてだしたと女將涕をかみ

何んと今云はれようともし差し向ひ

御返盃人の手前も憚からず

相性がどうのこうのと酌がせて居

これ等の句の若さがあればこそ異國の空から「獨逸婦人の美しきもの極めて稀なること」といふ觀察の餘裕も出て來るのであらうと思ふ。

歐洲へ立つ少し以前のこと、拙宅へ來訪されて柳談中、一壺を傾けるべく葭乃が準備をはじめたところが、その手をおさえて

「いや。今日はゆつくりしてゐられない。實は佛像さんと一緒に阪神國道を自動車で御影まで歸らねばならないのだ。それに妻があちらでお迎えする準備をして待つてゐるし、うつかり酒臭い息をふつかけて罰でもあてられてはたまらんからな」と例によつて眞面目臭さつた顔で語り出した談の筋は斯うである。

柳秀の生れた島の内の家は大體醫者であつたが、兄は醫者が厭ひで家を出て他家をつい

だ。それで自分が本家をたてることになつた。ところが最近、兄のうちに病人が出来たが薬の利目が一向に無かつたので、病人の叔母が妙見さんへ伺ひをたてて来た。ところが其の談によると、本家の梯子段の下に佛さんがゐられるが、その佛さんが世に出たいために病人を煩はしたのであるとのことであつた。それにその中の一體は御影へ行きたいと仰しやつてゐられたといふのである。

早速、島の内にある柳秀の家の二階へ上る階段の下の床をめぐつて見たところが、なるほど等身大の佛像が數體顯はれた。それで其の中の一體が御影の家へ移りたいと仰しやつてゐられるとすると、あちらへお迎えしない譯には行かぬ。それにしても、そんな大きな佛像を何處へ置いたらよからうと妻とも相談したがなか／＼きまらない。あの書齋へ置くとしたら來客が驚くだらうし、自分の居間へ置けば不氣味でとてもぢつと寝てゐられないし、眞逆臺所へも置けぬが、まあとりあえず書齋へでもお迎えするより仕方があるまいといふことになつて妻が準備をして待つてゐる。それでこれから私とその佛像と同乗して歸

へるのだとのことであつた。なんだか昔にでもありさうな談である。それが科學者の家に起つた事件だけに一層興味が深かつた。それにしても未だ新聞記者が嗅ぎつけないのが不思議である。

これによく似た談が私の家にもある。私が阪神の鳴尾に住んでゐたところに静岡から來てゐた品といふ一人の老婢がゐた。いろはのいの字も知らなかつたが、なか／＼の外交家で絶えずあちこちへ手紙を出す、小包を出す、それを葭乃や私に代筆をさせてどし／＼事を運ばしてゐた。私の家へ來てから八十の手習をはじめていろはを途中まで讀めるやうになつてゐた。この老婢は至つて負け嫌ひの女ではあつたが若い時分から浮世の荒波に揉まれぬいた苦勞人だけに、こどもに對しては随分と面倒を見てくれたし、お臺所のことでも自分でひつかまへてやつてくれてゐたので、私の家では重要な位置を占めてゐた。それで女中としての名前も呼ばれずにおげちゃん／＼で通つてゐた。このおばちゃんが病氣に罹ると葭乃や私が氷を買ひに走るやら、醫者を呼びに行くやら、その上におばちゃんの仕事を

で背負ひ込まねばならぬので大變な騒ぎだつた。そんなことが年に一度や二度はあつたが大抵の場合おばちゃんは手を振つて醫者を拒絶した。それは醫者の薬がなんとしても咽喉を通らなかつたからである。無理に嚥み下しても胃がうけつけなかつた。仕方がないので賣藥をすゝめて見たがそれさへ同じやうにうけつけなかつた。そんな時には郷里の親戚へ送金して持藥の來るのを待つより外に方法がなかつた。その薬が小包で届くまでは幾日も寝たまゝで待つてゐた。その薬が來ると間もなくよくなつた。このおばちゃんは大の妙見さん癡りで、何をきめるのにも妙見さんに伺つてからでなくては決してとりきめなかつた。それで體が悪くなつた時でも自分で足が運べさへすれば妙見さんに伺ひを立てて薬なども教へて貰つて服んでゐた。妙見さんから教へて貰ふ薬といふのがいつも野原から無代で摘み取られる草にきまつてゐた。それで色々な草を煎じて服むのであるが、その草が折悪しく、どうしても見當らない時には、早速又其の由を申し上げる。すると妙見さんは直ぐさま

「お前の歸る途中の赤屋根の家を曲ると、角の生垣のへりに生えてゐる」

と、まるで見て來たやうに仰せられる。果してそれらしいところへ行つて見ると件の草が伸び／＼とはびこつてゐた。私たちはそんな談を聞かされるたびに近代人が科學の力をあまりにも信じすぎてゐることを輕蔑せずにはゐられなかつた。

偶然かどうだか知らないが、その草がいつでもおばちゃんの病を一掃してゐた。そんな譯で、おばちゃんに總てのことは妙見さんに伺ひさへすれば間違ひのないものと信じてゐた。私の家に引き續いて病人が出來た時にもおばちゃんは早速妙見さんに伺ひをたてた。

そして、いそ／＼として戻つて來ての報告に

「奥さんのおツ母さんが出られて、大分長い間お經を聞かして貰はんが、盆と彼岸には必ずお經を聞かせて呉れ。それを知らせてくたして、斯うしたら家の者が悟るか、ああしたら氣づいて呉れるかと随分なやんでゐられたさうです。さうした佛さんの思ひで坊つちやんや皆さんが病らはれたのですよ」

とのことであつた。

岳父の蘆村は坊さんが嫌ひなので自分の妻君の命日が來ても決して坊さんと呼ばなかつた。ただ花と線香を携へて一心寺へ參詣するのに過ぎなかつたが、この談を聞くと

「聞かなければそれまでだが聞いては氣持が悪くて放つて置けぬ。さう聞けば随分長い間お經をあげたことがない」

と、急に寫眞を取り出して祭つてゐた。有難家でない私の家には佛壇がない。佛具は年忌が廻つてゐるか、新佛でも出來た折でない和新に造るものでない。若しさうでない時に造つたら死人が出來ると昔から云ひ傳へられてゐるので、こどもの勉強机の上へ白布を敷いてお菓子などは買つて來たままの紙袋をその儘供へ、丑の時詣りみたいに蒲鉾の板へ釘を打つて、それへ蠟燭を立て祭つたものである。私の家から阿彌陀經の聲が洩れるやうになつたのはそれがためである。静岡のおばちゃんが自分のこどものために歸郷してしまつた今日でも矢張り、坊さんが私の家の敷居を跨いでゐる。

無 口

山雨樓に

無口もう千日前の灯にそむき

といふ句があるが、とぼとぼと歩いてゐる無口の人の後姿は風邪でもひいてゐるやうに何んとなく淋びしいものだ。

一體無口の人には傍から見ると非常に淋びしく見えるものだ。嫁が無口だと姑に苛められて、肺でも悪いのではあるまいかと思ふし、姑が無口だと嫁との折合が悪いので怒つてゐるのではなからうかと思ふものである。しかし葬具屋などは無口の方が殊勝らしく見え、て商賣上都合がいゝだらう。

亡くなつた柳珍堂は無口と云へば徹底した無口だつた。句會でも滅多に口を利かない。だまつて座つて極く僅な句を句箋に書いて句をあつめる男に渡すに過ぎなかつた。永年句會に出てゐたが日車か私にしか口を利かなかつた。知らぬ者は柳珍堂は偉らさうにしてゐるんだと思つてゐたらしいが柳珍堂は口を利くのが面倒臭さかつたのである。單に句會で黙りこくつてゐるばかりでなく、家庭でもあまり口を利かなかつた。

彼を尊敬してゐた京都の川柳家が彼を自宅に訪ねたところ、差し向ひになつても世間話一つしないので驚いて逃げて歸り、それから二度と訪ねなかつたといふ話がある。

遊びは好きだつたが遊びに行つても臆息に凭りかかり、黙つて盃を手にしてゐるばかりで唄一つ唄はなかつた。行つて歸るまで口一つ利かない。何か云はなければならぬ時でも唯うなづくとか、首を横に振るとかして間に合せてゐたので、藝者などが

「あの方はこれですか」

と云つて口を指さして聞いたりした。私たちが「ううん」と云つても、ほんとにしないこ

とが多く、終ひには面倒臭いので「うん」といふことにして置いた。それで柳珍堂は藝者たちから啞扱ひにされてゐたが、それを辯解せうともしなかつた。たま／＼歸るやうになつて口でも利うものなら

「やつぱりもの云やはんねわ、妾いや」

と云つて、妓たちが眼をぐり／＼させたものである。

大阪にSといふ若い狂人染みた俳人がゐた。大阪の俳人大家を屢訪して脅迫的に短冊を書かせてゐたが、或る日のこと私の家へも短冊を書いてくれと云つて來たので「僕の短冊なんか何にするんだ」と云つたら「展覽會をするんです」と云つて拜み伏す、どうだか的にはならないと思つたが二三枚書いてやると

「これから鬼史さんのところへ往きたいから紹介して呉れませんか」

といふ。鬼史といふのは柳珍堂の俳號で彼は川柳の大家であると共に子規門の大家であつた。

「紹介してあげぬこともないが、鬼史さんは短冊は書かないぜ」といふと

「どうしてです」

とSは不足らしい顔をした。

「書いたものが残るのがいやなんだから」

「そいつあお可笑しいですな」

「お可笑しかつたところで本人がいやで書かないものは仕方ないぢやないか。僕なんかも下手な字が残るのは嬉れしくないからなあ」

「そいつを書くやうに頼んでいただけませんか」

「それは出来ない相談だよ。たつて欲しけりや君が直接頼んだらいゝだらう。昔書いたものでも見つかり次第引き破つてしまうほどの男だし、句佛さんから年賀状が来ても返辭も出さぬ位の筆不精なんだから、僕が云うたから書くといふ譯のものではなからう」

「さうですかな」

と云つたSは私の宅を飛んで出ると直ぐに其の足で柳珍堂を訪ねたさうだ。

「先生は短冊を書かないさうですが是非書いてください。私は路郎さんと、先生が短冊を書く書かぬに就て三十圓の賭をしましたが、若し書いて下さらなければ私のやうな貧乏人が三十圓損をしなければならぬから貧乏人を助けると思つて是非書いてください」と嘘まで吐いて迫つたが、それまで黙つて聞いてゐた柳珍堂は

「書けなす」

と、たつた一言云つたきりで黙つてゐる。Sは聞きしにまさる柳珍堂の頑強さに取りつく島がなく、ふと横を向くと倉の前に、ばんばのつまつた炭俵が置いてあるのが眼についた。

そこでSは

「どうしても書いて下さらなければ、このうちへ火を放けますツ」

と眼の色を變へてつめ寄つたが、柳珍堂は眉一つ動かさないで



柳珍堂氏  
立腹之圖

良平生寫

「そこにはんばがあるから放けるなら放けたまへ」

と云うなり、立ち上つて背後をも見ずサツサと奥へ這入つてしまつた。それには如何な横紙破りのSも参つてしまい、すこく歸つて来たといふ話がある。その柳珍堂の鬼史も子規と同じやうに肺を病んで池田の城山の寓居で亡くなつてしまつた。

柳珍堂に次いでは五葉、綠天、蘆村、葭乃などが無口黨の雄なるものであるが、綠天は失戀をしてから極端に無口になつてしまつたやうである。綠天も蘆村も川柳に飽いたのかいつのほどにか作句をやめてしまつた。比較的新らしい作家では二柳子が無口であるけれども二柳子は柳珍堂や五葉や綠天や蘆村などのやうに變人ではない。飯山に

無口者強ひて笑へばなほ淋し

といふ句があるが、私は此の句を思ひ出す度に蒼白い顔をした綠天の薄ら笑ひが思はれてならない。今は大阪毎日の校正室におさまつてゐるが相變らず黙々として朱筆を握つてゐることであらう。

四五年以前のこと、函館から遙々來阪した花童子の夫人と霞乃とが鳴尾の宅の二階で會つた。

女と女、春の日永、それは必然的に雲雀のやうに、小鳥のやうにプロペラが廻轉したものと想像を逞しくしてはいけない。二人が二人共至つて無口なのだ。

二人はお互に初対面のお辭儀をした。そして長い間沈黙。思ひ出したやうに視線を合致させて莞爾としたが又もや沈黙、ことりとも云はせない。話聲も聞えぬ。ハハア、さては便所へでも立つたのかと覗いて見れば、二人とも膝に手を置き端然と正座してゐる。それで別段居眠つてもゐないし、聞いて見れば淋びしくもないんださうな。

お蔭で私の句の

妻の無口へ浴衣一反

といふ句が光ることになるが、アレキサンダ、ヂューマの「女性に口髭を與へられなかつたのは、それを剃る間無言つて居ることが出来なためだ」といふ名文句？が死んでし

まうことになる。女の無口を詠んだ句では彩秋に

交換手家に歸れば無口な子

といふのがある位なものだ。

附 貨 の 犬

郊外では空巢ねらひが多いので、大抵の家では犬を飼つてゐるが、私の家では子どもが澤山ゐるので代る／＼起きるし、老人がゐるので目ざといし、家族が多いので一年中家をあけるといふことはないし、夜だつて夜通し誰かが起きてゐるやうなもので、わざわざ犬を飼つて泥坊に對抗する必要を感じない。それで犬を飼ひたいなどといふ欲望を起したことは未だ曾てなかつた。ところが岸の里に移つてから四五日すると何處からか毛の抜けた宿なし犬が轉げ込んで來た。それが子どもの喰べ残しを勝手口へ棄てると綺麗に掃除して呉れるので別段やかましくも云はず其の儘にしてゐたが、月日が経つにつれて、だんだんその犬の毛が抜けて桃色の表皮が露出して見るかげもない汚ならしい犬になり、とこ

ろく／＼化濃した部分からは悪臭を放つやうになつたので

「オイ／＼、あれは一體何處の犬だい。あんな犬が玄關先を迂路々々しては困まるぢやないか」といふことになり、それ以來顔さへ見れば一撃を食らはしてゐたが飼主のない犬は矢張り餌にありつくために侵入つて來た。

ある時は出入りの洗濯屋の若者に頼んで松林の中へ連れて行つて貰ひ、樹へ繫いで歸らないやうに割つて見たが犬は使者よりも早く歸つて來た。

「あんな犬にいつまでも迂路々々されちや、家の格好がわるくなるぢやないか。第一變な病氣を子どもにでも傳染されたら大變だぜ。早くなんとか埒をあげなくてははいかんよ」と云はれるので、妻君の方が犬の始末に迂路々々するやうになつた。途方にくれた妻君は遂々、ある朝交番を訪れた。

「御免下ささう」

と妻君の聲が一寸甲走つてゐた。又盜難事件かと思つた巡查は黙つて立つて來た。

「何か用かね」

と巡査は服の釦をかけながら聞いた。

「あの、私の家へ、毛のむしれた汚ない犬が這入つて来て、非衛生で困つて居りますので何んとか處置して頂けないでせうか」

巡査はなんだそんなことかと云はぬばかりに、緊張してゐた顔の筋肉を少しくゆるめて「棒でなぐつたらどうかね」

と云つた。

「どんなに擲いても出て來ますので……」

「人間なら」と人間に特に力を入れて「人間なら交番の方で、どうかかしませうが、犬をどうといふことは一寸困るね」

と、やゝ當惑の様子である。けれども妻君にしても「それもさうですね」とこゝで凹んでしまつてはと思つたので急いで言葉をついだ。

「犬捕に取つて貰うやうに貴方の方から云つていただかれませんか」

言葉は叮嚀だが、妻君何處までも巡査へ押しつけやうとする。

「さうだね。あれは今、市の仕事としてやつてゐるんだから、貴女の方で捕へて繋いで置かれるか、それとも炭俵へでも入れて此處へ持つて来れば、何とかしませう」といふことになつた。巡査にしても、翠峰の

つくねんと立てば巡査の役もすみ

と云うわけには行かないのだ。妻君はやれ／＼と重荷をおろしたやうな氣になつて歸つて来た。それで其の夕方、その宿無し犬は炭俵の中へ自己の運命を托された譯である。

近所の人の話では其の犬は二代前に住んでた人の愛犬だつたさうな。どうした事情のもとに棄られたのか知らないが、人間だつて役に立たなくなると犬のやうに棄られて顧みられない人もある。考えて見れば可哀相な話だ。私の家では「犬まで附貨の家を借りたのはこれが始だ」と云つて大笑ひした。これで先づ一難は去つたわけであるが、筋向ひの〇氏

から見離されて棄て育ちになつてゐたボチと云ふ犬が私の家の背中合せの家へ、いつのほどこにか居候に来るやうになつた。

迷ひ犬呉れた勝手をまた覗き　　はるを

で、私の家の勝手へも扉をくゞつてはやつて来た。そして三度の餘物の骨を漁つてゐた。斯く云へば私のうちでは三度が三度肴を喰べてるやうに聞えるが、兎に角絶えず出入りしては彼の空腹を充たすだけの御馳走にありついてゐた。

にも拘はらず私の家の勝手へ来る御用聞きに吠えついて彼等の心臆を塞からしめてゐた。大體犬といふものは餘ほど物覚えのいゝもので一度でも顔を見知つたり、足音を知つたりすると決して吠えつかないものであるが、此のボチは餘程顔覚えの悪い犬と見えて幾らたつても來なれた御用聞きに吠えつくことをやめなかつた。

ある日のこと、香の物を届けてくれた八百屋の男の子の足にボチが噛みついた。男の子は悲鳴をあげて仕れた。

驚いて駈け寄つた妻君は、萬一その男の子が狂水病にでも罹つたらと考へると心配でならなくなつたので、背中合せのS氏の奥様に

「お宅では、あの犬に注射をして貰つてゐられますか。今八百屋の男の子を噛んだのです  
が……」

と聞いて見た。

「別に注射はしてごさいません。私の方では犬が好きで可愛がるものですから、つひあゝして來て居りますが、こんなことがあるとお氣の毒で……」

と云ふことであつた。そこで妻君が直ぐに思ひついたのは例の交番所であつた。しかし、犬を交番まで従れて行くほどの魅力を持つてゐなかつた妻君は突嗟にだし雑魚を一握り握んで表へ出た。

「ボチよ、ボチよ」

と呼んで、だし雑魚を一つ差し出すと妙案に釣られてボチは尾を振つて近づいて行つた。

又二三間隔て、

「ボチよ、ボチよ」

と二つ目のだし雑魚をつまみ出した。交番までは三四丁行かねばならないので勢ひ一握りのだし雑魚は、よほど経済的に使はねば折角の計略が水泡に歸してしまふ。と云つて間隔を遠くすれば犬の方では諦めてしまつて逆戻りをしてしまふ。欺ましたりすかしたりして二丁ほど来たところでいよく兵糧が盡きてしまつた。困つたなと思つてゐるところへ八百屋の顔が見えたので、だし雑魚を取りに行つて貰つて、とう／＼交番所まであやつつて行つた。

交番では例の巡查が立つてゐたが

「又犬の事件ですか」

と笑ひながら談を聞きとつた。今度は人間に關係があるので棄てても置けなかつた。早速かけ繩を作つて巧く虜にする積りであつたが、ボチは犬運強くその良にかからずに逃げて

しまつた。

「どうも仕方がないねえ」

と云つて巡査は自分の落度で逃がしたやうな顔はしなかつたさうだ。妻君も諦めて歸つて來た。それでボチは今でも何處の犬ともつかずに暮らしてゐるが、相變らず主義者のやうに誰にでも吠えついてゐる。

吞風に

買物をしてると犬が後戻り

といふ句があるが、公設市場などへ出駈けて見ると、右手に堆い買物の籠を提げ、左手には二本の鎖に繋がれた犬を引つぱつて行く女をよく見かける。女が少し買物に手間取つてゐる時には犬の方から鎖を引張つてゐる。女は引張られながらもなか／＼買物に見切りをつけない。漸く買物が済んだかと思へば二本の鎖を中間にして女と犬とは互に引張つたり引きづられたりして歩いてゐる。私は五葉の

お妾は鶉飼のやうに二匹連れ

といふ句を想ひ出して、にや／＼笑ひながらその背後からついて歩く。これは近ごろの郊外風景の一つである。

私の家の筋向ひでは、毎日夕方になると勝手口を開けて

「松ちやん／＼」

と呼んでゐるので、松ちやんと子捕りとを想像して、いつまでも戸外で遊んでゐると、どんなことにならぬとも限らないと内々心配したりしてゐたが、いつも松ちやんらしい返辭がしない。そのうちに森としてしまふ。一體松ちやんといふのはどんな子からしらとふと覗いて見ると、むく毛の犬が尻尾を振りながら勝手口から消えてなくなつた。なあんだ、松ちやんとはむく犬の名だつた。古句に

子を持つて近所の犬の名を覚え

といふのがあつたが、妙なことから近所の犬の名を覚えてしまつた。

考へて見れば世間には犬好きの人も随分多いものである。此の間も薬屋へ行つたら、仔犬にめばちこが出来たからと云つて犬の目薬を買ひに来てゐた人があつた。

人間のこどもでさへ無事に育てるためには幾度もはらくしななければならない人達の多い世の中に、さてく贅澤な氣苦勞をしてゐる人もゐるものかなと、つくく感心させられた。

鼻 の 修 業

(1)

加香の辰吉どんは今でこそ頭髮をのばして金口を喫ふてシユーツとした色男であるが、店の用の合間々々には豆腐二十丁のお使ひから、さては女中さんのヘヤートツブの大一袋のために横町の小間物屋へ走る修業まで積んださうである。その加香が時々やつて來ては私の机の前に腰をおろしてお手のものの香水の話から支那商館の話などをこま／＼と聞かせて呉れる。私は畑違ひの談を聞くのが好きなのでそんな時にはいつでも一と膝乗り出して「ふん／＼」とか「なるほどなあ」とか相槌をうちながら聞き惚れてゐる。ああ

今日も愉快に暮れたなあ」と思ふのはさうした畑違ひの談に興味をそそられた日に限るやうである。自分の専門の談になると愉快といふよりも苦しかつたり、疲れたりすることの方が多い。

露溪に

香水は佛蘭西製を繰返し

といふ句があるが、香水は佛蘭西がいゝのださうだ。そんなことは誰でも知つてゐることではあらうが、おしやれでない私などは一圓の香水と十圓の香水の區別さへつきかねる。いつかも加香が佛蘭西製のシツプレーとかいふ香水を持つて來て呉れた。「香水の匂ひは斯うしてかぎまんね」と云つて香水を手の甲につけ、それを指で擦つておいてそのあとを直ぐにかいで見せた。「此の香水は匂ひがそんなに高うおまへんよつて男の年老つた人が使ひまんね」とは、その説明であつた。

年老つた男の使う香水とやらを貰つた私は有難いやうな心細いやうな氣がした。いつま

でも若いつもりで燥やいでる男には、このシツプレーをデイケートして一度は年のことも考へさせてやることである。

一口に香水と云つたところで男女によつて、年齢によつて、嗜好によつて、用途によつていろ／＼違つたものを要求するわけであるから、餘程鼻のよく利く人でなければ香水の創造は難かしからうと思ふ。加香の店では主人公の姉が實にいゝ鼻の持主ださうで、特に外人などから嗅分けを依頼されるさうだ。香水を嗅分けるだけで一つの商賣になるといふのも面白いと思ふ。

「はじめて来た丁稚には香水の嗅分けを教へまんね。梯子段の一段一段に違つた香水をつけて置いて、それを嗅分けさせるのだが、なか／＼當るもんやおまへん。一段一段の匂ひが順々に高うなつてますと比較的樂ですが、途中で極く強い匂ひを嗅ぎますと鼻が馬鹿になつてしまつて、あとはもう薩張判らしまへん」

といふ。なるほどそんなものだらうと思ふ。匂ひを嗅ぐといふことが丁稚の最初の修業で

業修の鼻



あることも面白い。それに香水の樽の中に這入つて、樽洗ひをさせられることも苦しい修業ださうである。

私はこんな談を聞きながらも、非常に多数の匂ひを嗅ぎ分ける女を探偵小説へ結びつけて、いろんな空想に耽つてゐたが、ふと其象の

束の間の匂ひ床屋はさせてくれ

といふ匂が私の頭に浮かんで来た。安香水の強い匂ひに世の味気なさを感じてゐたんだなあと思ふと肺で死んだ其象のことが偲ばれてならない。其象は五分刈頭の無口の男であつたが、句會の席では何時でも披講をする机のすぐ真下に來て、黙々として匂に親しんでゐた。それは寂びしくもしよんぼりとした姿であつた。

(二)

香水の談から、思ひ出すのはリリー・オブ・ザ・ヴァレー事件である。數年前、函館か

ら花童子がやつて来て、湯の川の奥には香水の原料になるリリー・オブ・ザ・ヴァレーが一面に咲き亂れてゐて、その馥郁たる香氣が函館全市を包んでゐるやうな談を葭乃に聞かせた。葭乃は

## ヒヤシンスの音沙汰でなしパンの事

といふやうな句こそ發表はしてゐるが、花卉に對しては香氣の憧憬者でもあつた。殊にリリー、オブ、ザ、ヴァレーには長い間詩的なあこがれをもつてゐた。彼の女は熱心に花童子の談に耳を傾けた。

その翌年からリリー・オブ・ザ・ヴァレーの幾莖かが葭乃の手許に送り届けられるやうになつた。然し此の花童子の好意は僅にその面影を残して、萎れ切つた姿と、蒸せかへつた匂ひに過ぎなくて、零落れた昔の愛人に出會つたやうな感じがしないでもなかつた。葭乃は花童子の好意に對して心からの感謝の辭を送つた。花童子も送り甲斐のあつたものとして喜んだことは勿論云うまでもなかつた。斯くして毎年のやうにリリー・オブ・ザ・ヴ

アレーが送り届けられるやうになつた。

いつに變らぬ好意に、葎乃の感謝してゐる顔が遂々泣き出しさうになつた。毎年そのころが来ると、きまつたやうに、送費を無駄に使はせるといふことが如何にも心ぐるしかつたのである。

昨年のこと、初夏のころに不意に圓筒状の小包が届いたので「何を送つてくれはつたんやらう」と云ひながら、包紙をめくると、それは一つの磁力の罐であつた。罐の表面には一面に松風の肌のやうにぶつぶつと錐で穴が開けられてあつた。蓋を開くと、例によつてリリー・オブ・ザ・ヴァレーが萎れた姿で異臭を放つてゐた。

「ああ、難儀やなあ」

と葎乃は大きな溜息をついた。折角の好意が長途の旅の疲れで萎れきつてゐるのを恨めしさうに眺めてゐた。好意に對する苦痛が護謨風船をふくらませるやうに擴がつて行つた。それでもありのままを知らせる氣にはなれなかつた。彼の女はすこぶる婉曲な讚美をもつ

てその好意を謝したのである。

暫くすると、風呂場でその罐がアート（二男）の如露の代りになつてゐた。それは實に高價な玩具だと云はねばならない。

八月になつて私が函館へ行つた。何かの拍子にこの談を花童子にぶちまけたので大笑ひで済んでしまつたが今年からリリー・オブ・ザ・ヴァレーの苦しい禮狀を書かなくてもいいのでほつとしたのは葭乃であつた。

## なりさがり魂

沈没船を引揚げてはしこたますくひ、倒けかかつた會社を引受けてはポロ儲け、無代のやうな土地を買うて置くて電車が敷けるやうになつてべら棒な値上り、すること爲すこととんく拍子で彼方に向ひて、此方に向ひてゐる間に金が唸るほど出来てしまふ。俄に本宅が建ち換はる。赤屋根の別荘を避暑地へ建てる。道具屋がベコく頭を下げて来る。そこで書畫骨董を買入れる。邸内へ玉突臺を置く。弾けもせぬピアノが据えつけられる。奥様やこども用の自動車が出来る。何んでも彼でも、びかく光つたものを掻き集める。周囲の人たちからは成上り者と呼ばれて輕蔑されるが、そんなことには一切お構ひなし、金さへあればといふ顔をかか光らせて云ひたいことを云ひに歩く。

さうした態度に眞ツ先に反感を懐く者は人生意の如くならざる方面へ轉回しつゝある成下りである。この成下りと成上りとは肩を並べて住めば住むほど激げしく睨み合をやる。名譽職の會長争ひまでして唾み合ふ。

「あんな成上りを會長にして我々の體面を汚されてはたまらない。自分は潔く退りぞく」と云つて、その實いや／＼辭表をたたきつけ口惜し涙を流すのが成下りなら

「寄附なら幾らでもするよ。彼奴等に決して負はとらぬ。何んといふても金ぢやからな。

口だけ達者でもすることをしなれば駄目ぢや。時に會長問題はどうなつたかな」と暗に會長を金で買うとするのが成上りである。その結果は云はずと知れた成上りの勝利である。その時の成下りの口惜しがることは眼もあてられない。今更昔のことをくどくどと並べ立てても追ツつかない。僅に出入りの者に成上りの缺點を吹聴して、積り積つた鬱憤を舜らすに過ぎない。

「それからな」

と成下りは云ふ。

「くさ」

と出入りの者はもう一度坐りかへる。

「私の家の先祖は××伊賀守ちうて一國一城の主で、なか／＼威張つてたものだが、斯う成下りになつてはせうがないなア」

「どういたしましたして、お宅さんなどはなか／＼結構な御身分でゐらつしやいます」  
といやでも云はなければならぬ。それを聞くと成下りはいささか慰められて

「さうでもないがな、なんぼ偉い系圖があつても、そんなものは今の世の中には三文の値打もないさ。昔賣立てをやつた時の目録を時々出して眺て、あれもあつた、此れもあつたと死んだ兒の歳を數へてるやうなことをしてゐてもはじまらんからな」  
といふ。如何にも仰しやる通りだ。

全盛は杉植えつけた頃の事

雅幽

ではあるが、それを繰返さへねば腹の蟲がおさまらないのも成下りの悲哀であらう。それに反して成上りは次から次へと何かと買入れる。買入れたものは一々見せつけねば承知が出来ぬ。自分が見てゐるだけでは金の光りが薄いと思つてゐるらしい。それを成下りが癢に觸へて「又、道具屋の高橋が毎日のやうにべこくしに行つてると思つたら、こんな格好をした鶴の置物を買はされよつたぜ。千五百圓やさうだが、てんで眼が利かんからな。欺まされてばかりゐるのや」

と成下りは、手を擴げて鶴の格好をして見せる。

「へい。千五百圓」

とほんとに驚いて、出入りの者も鶴の格好をして見る。それを見て成下りの御機嫌がいささか回復するのも面白い。

實際成上りは金高さへ高ければいゝものやうに思つてゐる。びかびか光つてさへわればいゝやうに思つてゐる。家を建てるにしても、だだツ廣くさへあれば堂々たる邸宅のや

うに考へてゐる。佛壇のやうな家に住んで其處に極樂を發見してゐるのであるてなことを云うと

「お前なんかは金を持つたことがないから、そんな事を云うてけなしてゐるが、實際は羨ましいのだらう。俺の眞似の半分も出来るかい」

とおつしやるに違ひない。なる程金が無いとそんなことを云はれても指を銜へて控へてゐるより仕方がない。うんと金を持つて、さうでないことを一遍知らせてやりたいと思ふ時もあるが、そこは金を持ってないやうに出来てる人間だけに、そんな考へがいつまでも續かない。續かないどころか、思つた次の瞬間には、もうけろりと忘れてしまつてゐる。

成下りといふ誇りを持つてゐる以上は、まだ一餘燼を止めてゐる。例へ成上りから借家者と罵られても、それ等の成上り者に何かにつけて對抗して行くが、うんと成下つて來ると、成上り者と同じやうに、書畫や骨董に對しても眼が利かない。そのくせ僅に成下りといふ誇りを持つてゐるので、琴の爪を紙屑屋に賣るのに「昔は五本とも爪が揃ふてまし

た」といふ落語があるが、それに似た悲惨な滑稽を演出するものである。

しかし、成下りと成上りと比べると成下りには嘘の云へる人が尠ない。少々は云へるにしても、嘘のつきかたが下手である。別段嘘を云はなくてもいゝところで嘘を云ふ。たま／＼嘘を云つて損をするのも成下りの悲哀である。成上りで嘘を云はぬものは殆んどゐない。その嘘は必ず打算的な嘘である。彼等は嘘の巧くつけない人間をつかまへて莫迦呼ばはりをしてゐる。

Yといふ男は刑務所へ二三遍も遣入つて來た男であるが、今では五十萬の金を握つてゐる。その五十萬の金は嘘の塊なのである。嘘の塊は遂に郷國の人を欺まして代議士にまでなつたことがある。だから此の成上り者は妻君が電話を掛けてゐるのを横から聞いてゐて

「莫迦ツ。そんな嘘のつき方があるか、朝から出て居らんと云へッ」と、嘘のつき方が下手だと云つて怒鳴りつけてゐた。

これに反して成下りのNの家では妻君が一寸氣を利かして「只今留守でございます」と云つたのを、今旅に出やうと仕度してゐたNが

「現在ゐるのに居ないなんて云つてはいけない」と云つて肝癢玉を破裂させてゐた。

成上りの嘘は、なかに嘘だつて構やしない。少しでもよく思はれさへすればいいのだ。

少しでも多く利益が得られればいいのだと云ふ考へ方の表はれであるし、成下りの方では武士は食はねど高楊枝、痩せても枯れても昔はといふ誇と瘦我慢とをちやんぼんにした成下り魂の表はれであるのも面白い。一文字の句に

戀人を逃すまいとて嘘をつく

といふ句があるが嘘といふものも吐きやうによつては生活に一つのうるほひをもたらす役目をひきうけてゐると云へぬこともなからう。が、私は嘘は嫌ひだ。舊道徳だと笑はれてもいい。人物が小さいと云はれてもいい。嘘はてんで嫌ひだ。嘘から來る生活の複雑さは煩はしいばかりである。わざ／＼訪ねてくれる來客のために、考へる時間や書く時間など

を奪はれても、それは仕方がないと思つてゐる。しかし、時には閉口する。

ひろしが来て「ちと留守をつかつたらどうだす」といふが、そんなことはやう云はぬ。せめて面會日をきめやうかと思ふが、偉らさうに見えて柄でないし、そんなことは日本人には向かない。

ひろしはよく畫家を訪ねるが、畫家は大抵家人に「先生は東京へ行つてゐられます」と云はせるさうだ。その實、二階でせつせと描いてゐるので、描き上げたら東京から戻つて來るのださうだ。旅行につき年末年始の禮を缺いで炬燵にゐる口よりも同情は出來るが、私のやうにこどもが澤山ゐて「お父様は二階にゐるよ」とやられては駄目だ。それに堂々たる邸宅なら兎も角、二階から大空を仰いだり、椅子に凭れて考へ込んでゐる姿が戸外から見えるやうな生活ちや駄目だ」といふと「それもさうですな」とひろしが直ぐに賛成した。結局少しは成上りの修業でもせねばならぬといふことになりさうだ。ああ、それもいやなことだと思つた。

校長さんと煙草

私は窓にもたれて、人が歩いてゐるのを根氣よく眺めてゐることがある。二本の脚が互ひ違ひに、僅かづゝ前進するのを不思議にも面白く感ずるのだ。左が出ると、右が出る。右の次には左が出る。少しも間違ひなく左右の脚が前方に出る。幾ら眺めてゐても同じ方の脚が續いて二度と出ない。そんな事を考へてゐると、いつの間にやらその人影が私の眼界から去つて終つてゐる。あんなに僅かしか歩かないのに既うそこらにその人が居なくなつてしまふ。何んといふ奇態なことだらうと思ふと私は獨りで、にんまりと笑つてゐる。「そんなことはあたり前ではないか。そんなことを考へる君の方がよつほどどうかしてるよ。閑人は違つたものだね」と素見されることを百も承知してゐながら、矢張り窓に凭

れて、次から次へとしやくとり虫のやうに根氣よく歩いてゐる人を眺めて「可笑なもの  
が歩いてゐるな。私もその可笑なもの一人なんだが……」と又しても思ひつゞけるの  
である。

こんなことを考へてゐると、妙に人世が面白く感じられるが、幾ら暢氣な私でも、いつ  
でもこんなことばかり考へてゐるのではない。こんなことばかり考へてゐるにしては、あ  
まりに俗用が多すぎるので弱つてゐるのであるが、それでも忙しい中で時々こんなことを  
考へてゐるのが好きなのだ。

今日も又、いつものやうに窓にもたれて戸外を眺めてゐたが、ふとこんなことを考へは  
じめた。

人間が煙草を喫ふのも可笑しいぞ。何故煙草を喫はねばゐられないのだらう。それも鼻  
の穴からさも得意らしく、シューツと二筋の煙りを吐き出してゐるが、あれは一體何にな  
るのだらう。何故あんなことをしてゐるのだらう。別段體軀の肥料になるやうでもないの

に、人も疑はなければ自分でも變だとも思はずに喫つてゐるのはどういふ譯だらう。殊に男でも女でも、金持でも貧乏人でも一樣に煙草を喫ふ。居候でさへなけなしの財布をはたいて煙草だけは喫つてゐる。こんなところから考へて見ても世のタバコニストは本願寺の門徒よりも、もつと多數であることは疑ふべくもないことである。大正三年に煙草を煙りにした數は實に七十五億六千七百九十六萬本、國民一人當百四十二本だが大正十年には二百三十七億六千八百十三萬本となつて、一人當四百十九本に増加してゐる。さても偉大な煙草の魅力ではないか。

一體煙草を喫ふといふことは人間に限つて與へられた特權のやうだ。象も煙草を喫はないし、犬も喫はない。七面鳥も喫はない。蚊や蚤のやうなむしけらは勿論煙草なんか喫はない。猿に煙草を喫ましたら、鼻から煙りを出す位なことはするだらうが、それは單に人眞似に過ぎなくて煙草が好きでたまらないから喫んでゐるのではなからう。私はまだ猿が一服やつてゐるのを見たことがない。

天王寺の動物園に太郎といふ狢々が居たが、この太郎はなかくの愛嬌者で法被姿でパイプをくわえて暮らしてゐた。これとても巧く人真似をしてゐたので煙草を喫ふことによつて快味を感じてゐたわけではないらしい。

私などは煙草の味が、どうの斯うのといふ方の人間ではないが、それでも自然と味に好き嫌ひが出来てゐる。匂ひなどもさうだ。私が煙草を愛するのは其の煙りが果てしなくゆらくとゆらめきながら立ちのぼつてゆくのを見送つてゐるのにあるのだ。何か考へてゐる時に、たちのぼる煙草の煙りのあとを眼で追うてゐると、その考へが深められるやうに思ふ。考へが纏つたところには煙りがあとかたもなく消えてゐて、次の煙りの輪が用意されつゝある時である。

煙草は男でも女でも喫むが、電車の中などで女が煙草を喫んで二つの鼻腔から勢ひ凄じく、直線的に二夕筋の煙りを吐き出すのを見てゐると何んとなく浅間しく感じられて顔をそむけたくなる。男の得手勝手だと云へば云へぬこともないが、女といふものをもつと優

しく、美しく眺めてゐたい私にとつて、大きな二つの鼻の穴の存在をあまりにはつきり知らせて呉れることは有難いことではない。

近ごろ、パットや朝日が煙草屋の店頭から影を没した。パットでなければおさまらぬタバコニスト、朝日でなければおさまらぬタバコニストにとつて、それは思ひもかけぬ憂鬱であつた。それ等のタバコニストは血眼になつて街から街を探がし求めたことは云ふまでもない。私もその一人で、朝日を求めるために平素はあまり賣れさうもない街の隅の小さな煙草店まで探がし歩いた。

朝日やパットが一般に配給されなくなつたのは賣残りの昭和をはかしたためだといふ噂がパットと立つた。さうかも知れない。何處の煙草屋にも昭和が城壁のやうに積み上げられた。お茶屋や料理屋では煙草と云へば必ず昭和を運んで來た。

小賣店の談では「朝日二十に昭和を二十つけてでなくては配給して呉れません」と云つてゐた。「朝日を賣りたいために、賣れない昭和を背負ひこむ事は出来ないので弱つてゐ

ます」と云つてゐた。それは無理のない談である。

古句に

賣れ残りげに十目の見るところ

といふのがある。これは遊女の賣れ残りの句であるが、何も遊女に限つたことではない。昭和が四億本とか六億本とか賣れ残つたのも、實に十目の見るところである。これと云つて特徴のない昭和が相當高い値段で賣れさうな筈がない。專賣なるが故にそれを無理にもはかさうとするのは何んと云つても愚かな談である。代用といふことは非常の時にのみゆるされることだ。せつば詰まつた時には代用で辛棒するが、それはながくは續かないことである。まして嗜好品を他人に支配されることは好ましいことではない。

つむじを曲げなくてもいゝところへつむじを曲げて、昭和を一切手にしないことにした。値段が高いとか、安いとか云ふことはさうなれば既う論外である。專賣といふことについて考へざるを得なかつた。大きく云へば憂鬱は思想を悪化すべく誘導した。

こんな話はもう止さう。それよりも、もつとのんびりした談で、その憂鬱をまぎらさう。

古句に

ねだられて禿にやりし煙の輪

といふのがある。禿の無邪氣さと吉原の遊びの悠々たりしさまがよく出てゐて面白いと思ふ。今でもこどもを抱いて煙草をふかしてゐると、こどもは煙りの輪にチャームされてそれを捉えに行かうとする。煙草の煙りを含んで頬を指で小さくたたいたんびに、ぽつくと煙りの輪が流れて出る。それは實にうららかな情景である。

こどもは煙りの輪にこそチャームされるが、煙草そのものを喫もうとはしない。酒を呑むこどもに比較して煙草を喫むこどもは稀れではあるが全く居ないこともない。

今年三つになる朝陽のこどもは非常に煙草が好きで火鉢の中から喫ひさしを拾つて喫んだり、電車の中などでも、人が喫んでゐると、それを欲しがつたり、車中に棄てられた短

い煙草の喫ひさしを捨ひかけたりするので、體裁が悪いので別にこどものために煙草を用意してゐると談してゐたが、これなどは眞似といふよりも俗に云ふ虫が好くといふのであらう。私が秋の茶屋に居たころ、出入りしてゐた髮結もこどもの時分から煙草が好きで、小學校から歸ると一番先に一服喫ひつけて、ぶか／＼ふかしましたと云つてゐた。友達からは

「あんだ、煙草臭いのね」

と、よく云はれたさうである。

私はいつの頃から煙草を喫み出したのか、はつきり記憶してゐないが、金卸時代にバンドに眞入を提げて校門をくゞつた事を覚えてゐる。その頃は未定年者の禁煙令が出てやかましい時代であつたが校長の福井昆陽學人はなか／＼愉快な人で私たちタバコニストのために控室の一隅に大きな火鉢を据えて呉れた。

「煙草を喫むんだつたら此處で喫め、便所の中に突つ立つて喫うたりしてはいけない」

と云つて皆を苦笑さした。みんなは此の皮肉な校長さんの命を奉じて、その火鉢以外では決して喫はなかつた。

「好きなものは仕方がない。學校の中では許すが、校外で喫つて若し巡査に叱られたところで私は責任をやう持たぬからその積りで喫み給へ」と何處までも要領のいゝ校長さんであつた。

授業が済むとタバコニストは我一と控室の一隅へ走つた。此處ではお互の顔がソフトフォーカスのやうにぼんやりと霞んで見えるほど朦々と煙りを立ちのぼらせた。多くは腰から煙管を抜きとつて、すばすばと刻みをやつたものである。たま／＼敷島とかオリエントのやうな煙草を持つて來やうものなら、持つて來た當人は僅に一本しか喫へない。あとは周圍から手が出て

「オイ一本」

「オイ一本」

草煙とんさ長校



「僕にも」

「僕にも」

「僕にも」

と忽ちにして消えて無くなる。中には巻煙入へ敷島と朝日を詰め込んでゐて、煙草を呉れと云へば朝日をやつて、自分は其の中から敷島を引き抜いて喫んでゐた男もあつた。そんな男になると素早く煙入をポケットに忍ばしてしまふ。

學校を卒業してから煙管を捨てたことは云うまでもない。ハイカラな煙草屋のウキンドーを覗き廻つてMCCなどをふかし始めた。日本煙草等はてんで口にしなかつた。埃及のタバコがどうの、露西亞のタバコがどうのと一人者の贅澤さをそんな方面へまで發揮した。マドロスパイプをくわへて見たり、黒い板のやうな煙草を買つて来て削つて見たり、喫ぎ煙草に通がつて見たりしたものだ。それが家庭の人となつては無闇に贅澤な煙草を漁つて歩けなくなつた。止むを得ず敷島のやうな極く平凡な煙草を喫ふことによつて満足しなればならなくなつた。筆の生活に遣入つてからは口つきは原稿紙の上へぼたぼた灰が落ち

るので兩切りに限られるやうになつた。兩切りでは主としてエアーシツプ、スター、リリー、バツトを喫つた。エアーシツプは主に輸入時代に喫つた。それが十本入の輸入りが出て後暫くは喫つたが、そのうちに質が落ちたやうに思つたので止した。そしてスターに移つた。同じ煙草をいつまでも喫ふことはよくないことを知つた。少しく質がをかしくなつたやうに思うと、他の品を選んでは移つて行つた。必ずしも質が落ちたばかりではなく、その刺戟に慣れ切つてその煙草の價値が減少したのにもよるだらう。新聞に關係してゐたころは殆んどバツトを喫つた。毎朝出がけにバツトを七つポケットに放り込んで行くが歸るころには一つも残つてゐない。

昔から「既う煙草にせうか」といふ言葉があるやうに、煙草は休息の時間を意味してゐるのであるが私の煙草には休息の意味は少しもなくて寧ろその反對である。私のは船が石炭をたいてゐるやうに、原稿を書いてゐる間、左手の指の股に兩切が挟まれてゐるのであ

る。そして仕事に疲れてほつとしてゐる時には煙草も同時に止めてゐる時である。

それほど好きであり、寧ろ生活の必需品であつた煙草も、病氣のために數年間止めてしまつたことがあるが、その淋びしさ、物足らなさと來たら全くお話にならない。そのころの私の句に

禁煙もあるぎり喫ふてからにする

だの

其の當座火をつけないでくわえて見

といふやうな如何にも未練たらしい句を吐いてゐる。それでも病には勝てず、感心にさつぱりと止めてしまつてゐたが、原稿生活と他人を訪問した時などには、どうしても煙草がないとやりきれない。それでなるべく煙草氣の少ない、身體に有害でなさうな煙草を選んで喫ふことにした。それが今も喫ふてゐる朝日である。朝日は乃木さんが喫ふてゐたので乃木煙草と云う名で、ある社會から愛煙されるやうになつたが、一つは煙草としての害

が少ないのにもよるであらうと思ふ。

前にも云つたやうに、近ごろ朝日が品切になつたので、金卸時代に立ち返つて刻みを買つて見た。ところが長煙管ですばすばやつてゐると、同時に仕事をする事が出来ない。右手で長煙管を持ち、左手で刻みを圓めて詰め込まなければならぬので、煙草を喫むといふことが一つの仕事になつてしまう。それだけに長煙管で煙草を喫ふてゐると悠長に見える。私のやうに仕事をしながら、汽罐を焚いてゐるやうな調子で煙草を喫むといふことは不可能である。いやでも朝鮮人式にのんびりと構へ込まねばならぬ。しかし、そんな悠長なことは時代がゆるささないなどと難かしく考へないで、少しくのほほんにやつて見やうと思つて當分朝日と兼用することにした。田中首相が首相と外相とを兼ねたやうなものである。なんでも兼ね兼ねられぬことはない筈である。社長兼小使でさへ、やつてやれぬことはないからである。

長煙管で刻みを喫ふやうになつてから一つの発見をした。発見と云へば大きく聞える

が、同じ煙草を喫むのに巻煙草と刻みでは火鉢の置場所が變つて来る。右手にペンを持ち左手に巻煙草を挟んで居る場合には左側へ大きな火鉢を置いてその上で灰をはたき落してゐたが、右手に長煙管を持ち左手で刻みを詰め込んで喫う時には右側に火鉢がないと吹殻をはたくのに都合が悪い。右と左といふことが、物によつて國によつて違つて来るのも面白いと思ふ。人が往來を歩くのに左行令といふのがあるかと思ふと軍隊のやうな團隊になると右を歩かせてゐる。日本では左行令であるが外國では右行令になつてゐる。着物でも右前と左前と國によつて違ふ。本の開け方なども右から開ける本と左から開ける本がある。鉛筆をけづるのにも私たちはナイフの刃を前方に向けて、そのけづられた肩が外方に飛ぶやうにけづるが、外人はナイフの刃を自分の胸の方へ向けてけづるからその肩が外方へ飛ばない。斯うした習慣の相違を一つ一つ考へて見るのも面白からうが、それ等の習慣も巻煙草と刻みの場合の火鉢の位置のやうに、そこには必然的な理由が存在してゐるのであらう。

談が又、妙にかたくなりかけたから、少しく句の方を覗いて見やう。

巨頭子に

吹殻のゆくへに客の方も立ち

といふのがある。客までが立つて迂路々々してゐるところが面白い。談が途中からボキと折れてしまつたのは勿論である。敬甫の句に

火もつけて出ればよかつた煙草店

といふのである。誰もがよく經驗するところで、折角煙草は買ったが一本抜き出して口にくわへたままはどうすることも出来ない。もう一度あと戻りするのも莫迦々々しいし、知らぬ家へ飛び込んで火を借りるのも變だし、と如何にも口惜しさうに立つてゐるが、あたりに煙草を喫んでゐる人を見かけると、早速飛んで行つて頭を一つ下げる連中は大抵こうしたうつかりやさんである。

この外に

相談と聞いて煙草を喫ひつける

悟郎

意見聞く方もとう／＼喫ひつける

宗郎

鬱憤は空へ消えるか卷たばこ

葭乃

なけなしの煙草袂に折れてゐる

力好

といふやうな句もある。それから古句に

すひがらを禿を呼んで尋ねさせ

といふのがあるが、花魁の悠長さが出てゐて面白い。同じく古句に

銀煙管落した話 三度聞き

といふのがある。その時代の銀煙管が如何に幅をきかしてゐたかが想像されて面白いではないか。

## 私の墓

人間が生きてる間には、いろんな物を喰べたがったり、いろんなものを身に着けたがったり、いろんな家に住みたがったり、いろんな装身具や家具を手許に置きたがったり、いろんな本を読みたがったり、女は男に、男は女に想ひを寄せたり、さうかと思へば女が女に、男が男に想ひを焦したり、子の出来る茶碗まで買つて子を欲しがったり、大空を飛行するレコードを作ることに腐心したり、兩極を究めやうとしたり、いろんなありとあらゆる空想を描いて自己の生活の内容を豊富にせうとするものである。中には自分が死んだ時に葬式の會葬者がどの位あるかを知りたいために、生き乍ら葬式をして見る人さへある。

テロリストの古田大次郎は獄中記の中に、自分の墓の形式と大きさを圖面でもつてあら

はしてゐた。人間は死んだ跡の跡まで氣になるものである。自分の墓がどんな墓でありたいといふ希望は誰でも持つらしい。しかし、大抵の人は自分で自分の墓を見ずに死んで行く。そのために當然墓が出来るだらうと思つてゐる人の墓が遂に建たなかつたり、案外な所へ、案外立派な墓が他人によつて建てられたりすることがある。古句に

桶と花持つて定紋見てあるき

といふのがあるが墓地へ来てさへ、プロとブルの相違を見せられることは嬉らしいことではない。

昨年さくねんの夏なつ、函館はこだてに遊あそんだ時とき、花童子かこうしの案内あんないで歌人石川啄木かじんいしかはたくぼくの碑ひを訪おもつた。碑ひは立待岬たちまちさきの共同墓地きょうどうぼちで、すぐ海うみに臨のぞんだところにあつたが、その碑ひが豫想よきょう以上に立派りっぺであつたのに驚おどろかされた。東海とうかいの渡島かしまヶ磯いそで泣なきながら蟹かにと戯たはびてゐた貧乏詩人びんぱしじんの啄木たくぼくの碑ひとしては、頗すこぶるふさはしくないほどに堂々だうだうとした碑ひであつた。

「私が死んだら」と私は花童子かこうしに云いつた。私の碑ひは餘り立派りっぺなものではなくていい。寧ろ墓ぼ

は淋しい位がいゝと思ふ。唯この立待岬の尖端に建てられたら建てゝ欲しい」と云つた。

「尤もこれは一つの空想に過ぎないが、人間の空想は時には實現せないものでもない。空想さへせぬことが實現することさへあるのだ。おそらく啄木もこんな立派な碑が、こんなところに建つとは夢にすら見なかつただらうと思ふ」といふやうなことを話した。

花童子も「僕が出来たら建てあげるよ」と慰め顔に云つて呉れた。私は死んでからのいい落ちつき場所が出来たやうに思つた。それは八月十九日の美しく輝いた日だつた。

啄木の碑は岬の尖端から二丁ばかりの手前にあつたが、それから更に二丁ばかり手前に自然石の手ごろの墓があつた。私はそれを指さして「墓はこの位でいゝね。あまり堂々とした墓は、しんみりとしたものを持たないからいやだ。これ位な墓なら知らぬ人の墓でも何んだか談しかけたいやうな氣がする」

と、いふと花童子はその墓の碑面を眺めて

「これは若原鎮吉の墓だよ」

と、彼も不思議なところで不思議なものを見たように云つた。

「若原鎮吉といふと？」

「鎮吉は新聞記者で、川柳もやつてゐたが若くして死んだのだ」

「さうかね。さう云へば川柳家に鎮吉といふ名があつたやうな氣がする」

こゝで花童子と私とは暫くいろんなことを談合つた。

遇然にも私は函館まで来て川柳家の墓に呼びかけてゐたのであつた。啄木にしても、鎮吉にしても若い詩人は斯うして永遠に眠つてゐるのであつた。が、それにしても六厘坊の墓が未だにないといふことは寂びしいことだと思つた。何かの機會に若くして死んだ天才六厘坊の墓だけはどつかへ建てやりたいと思つた。

二十二日の朝、小樽の越中屋を出た花童子と私とは手宮の古代文字を見に行つた。

大きな岩壁に鳥や龜のやうな形をした文字が彫刻されてあるが私たちには一字として讀めない。けれども、案内記の記すところでは一つの碑文ださうである。

永年(ながねん)いろいろな人々(ひとびと)によつて研究(けんきゆう)されたが、それを讀破(よみとく)する人は居(ゐ)なかつた。ところが遂(つひ)に中目覺氏(なかめあきし)がそれを次のやうに讀破(よみとく)した。

「我(われ)は部下(ぶか)を率(ひら)ゐ…大海(たいかい)を渡(わた)り…闘(たか)ひ…此(この)洞穴(きうけつ)に入(い)つた……」

鞅鞅語(まじまじご)を古代土耳其文字(こくだいどあもごもじ)で書(か)いたものだとのことである。私(わたし)たちはそれを何處(どこ)まで信(しん)じていゝかは知らぬが、今(いま)のところではそれを覆(くつ)へすだけの説(せつ)もないらしいから先(ま)づさうだと信(しん)じたい。それにしても私(わたし)はこの碑文(ひぶん)の意味(いみ)の力強(ちからつよ)さに一種(しゆ)の壓迫(あつぱく)をさへ感(かん)じたのであつた。私(わたし)は今(いま)でも「我(われ)は部下(ぶか)を率(ひら)ゐ…大海(たいかい)を渡(わた)り…闘(たか)ひ…此(この)洞穴(きうけつ)に入(い)つた…」とくちづさんでは、遠(とほ)き昔(むかし)に此(この)地(ち)に來(きた)つて死(し)んだ人々(ひとびと)のことを偲(しの)び、死(し)ぬにのぞんで自分等(自分ら)の足跡(そくせき)を斯(か)うして止(とど)めやうとした努力(きうりく)を思(おも)つた。彼等(かれら)の魂(たましひ)が私(わたし)たちの胸(むね)に蘇(よみが)へることは實(じつ)に大きな歡(よろこ)びであつた。

八月(ごうがつ)の末(すえ)に北海道(ほくかいだう)から戻(も)つた私(わたし)は九月(くわがつ)に社(しゃ)の同人(どうじん)や家族(かきぞ)と共に高野山(たかのやま)に登(のぼ)つた。山上(さんじやう)の一(いち)の橋(はし)から奥(おく)の院(いん)の大師廟(だいにしやう)までは十八丁(ちやう)ある。路(みち)は松(まつ)や檜(ひのき)の林(はやし)の中(なか)を一筋(すぢ)に貫(つらぬ)いてゐる。

その兩側には無數の石塔がむらがり立つてゐる。こゝばかりは階級意識を超越して貴賤道俗を問はず、女人禁制であつた高野山上に女人の墓さへ堂々と立つてゐるのであるから、その偉觀には何人も驚かされるばかりである。私は高野には數回登つたが著名な墳塔だけでも二百四十餘基あるさうであるから悉くはちつとも覺えてゐない。しかし生きてゐる間の敵も味方も奥の院へのこの一筋の路の兩側に眼白押しに押並んでゐるのを眺めると「死んだら終ひだなア」といふ感慨を深うしないわけには行かなかつた。死んでから斯うして並んで平氣でゐられるのなら、生きてゐる間から敵も味方もなく、平氣で斯うして暮らしたら、世の中はどんなにか、平和に、安らかに、詩的に生きることが出来るだらうのにと思はざるを得なかつた。

こゝに並んだ數千基の墳塔中、第一の巨塔は駿河大納言忠長卿の母崇源院殿のそれで、高さが二丈八尺、臺石が八疊大で、第二が淺野長晟夫人の高さ二丈餘で、巨塔が何れも女性性の墓である。女人禁制の御山にこれほどした皮肉なことであらう。武田信玄や上杉

謙信の廟が對立してゐるのも面白いし、熊谷直實の墓と敦盛の墓が並んで立つてゐるのも考へさせられる。筒井順慶の墓もあれば明智光秀の墳もある。順慶は高野山を焦土にせうとして攻め寄せた一方の大將であり、光秀は高野山の危急存亡を救ひ出した間接の恩人であつたのであるが、説明の案内小僧が以前は「これは逆賊明智光秀の墓」と云つて鞭でたたいたものであるが、今はたたかなくなつてゐる。平六茶の句に

お輕のはないかと探がす泉岳寺

といふのがあるが、こゝ高野山にもお輕の墓はないらしい。しかし芭蕉の碑もあれば、豊澤團平の墓もある。近くは大阪の新大和屋の墓までもあるが、今は斯うしたお茶屋の墓までが金にあかして堂々たる墓地の買占をやつてゐるので、淨域といふ感じが薄らいで見える。なんだか莫迦々々しく騒々しい感じがする。私は矢張り一人離れて、遠く函館の立待岬の尖端に建てたいと思つてゐる。それが空想に終つたところで一向差支えはない。

川柳

染ちがひ

○  
コン泥と間違へられやうが、猫の戀だとひやかされやうが、お互ひに書生氣質の物臭同  
士。足の尖に古新聞を巻きつけて屋根傳ひ。

「いい天気だな」

「もう書留が来てもよささうだ」

「焼芋でも食ひたいな」

「湯銭もないのだ」

まだ漸く月の半ばが過ぎたばかりを、こうした惨な會話を交じへながら屋根の上へ薄ッぺらな蒲團を干して、その上へ仰のけに轉んだ。



下宿したところは屋根からよく訪ね



伊さん、さう悪ふとつて貰ろたら、妾が困りまんがな。決して逐ひ出すんやおまへんで

逐ひ出すんやおまへんが時々歸つてあげ  
なはらんと、御寮ンさんが可哀相やおま  
へんか。……いゝえ、お金のことなんか  
心配して、こんなことを云ふてんのやお  
まへん。家はソラ何時までもあそんで  
貰ろたらよろしおまんねけど、お宅かて  
伊さんが何日もおいでやなかつたら差支  
えることもあるやろと思ひましてな。兎

に角一遍お歸りやして、また晩からでも来てくりやはつたらよろしうおまんね。な、わか  
りましたやろ。わかつたら機嫌を直して、もう一杯呑んで歸つとおくんなはれ……。

遊ばしもするが意見もする女將

○

何にでも反抗するのが好きな社會主義  
者とかいふ人達でも、別莊をあげると云  
へば懐から手を出すにきまつてゐる  
と、私は思ふ。

一つや二つ別莊を持つよりも、天下到  
る處の宿屋へ滞在してゐた方が、よつぼ  
どよかりさうに思ふが、さうはいかんものと見える。



誰でも一寸金が出来ると、すぐに別荘を建てたがるからをかきなものである。別荘といふところは、小間使と呼ぶ小さな動物とイチャ／＼するところらしい。愛人とやらを祭り込んでおくところらしい。よくは知らないがね……。

別荘は波に浚はれさうに立ち

○

「まあ、可愛いお子さんですね。

幾つ？ さう三つちゆですか」

と、女の手から奪ひとつて

「ソラ叔父さんが高い／＼してあ

げまちゆよ。應さう／＼ハンモツクに

乗ッけてあげまちようね」





と、今の先まで、自分が乗つてゐたハンモックの上へ載つけて  
「揺ぶつてあげますから、しつかりつかまつてゐるんですよ」  
と頻りに子供に口をきく。美しい女を傍に立たして。

ハンモックあいそに乗せて泣き出され

髪結さんも職業婦人である。女按摩も  
職業婦人である。蠟割り女も職業婦人で  
ある。ヨイトマケの女も職業婦人であ  
る。が、しかし若い女であり、知識階級  
の女であるといふ一種の誇を持つてゐ  
る女が職業を撰む時には必ず先づ婦人記

者を志願する。大きく言へばこれが天下の趨勢だ。要するに男子のすなる労働を論じ、男子のすなる政治を論じ、男子のすなるあらゆるものを一管の筆にまかして論じやうてんだ。

速成の洋装よろしく、オペラバツグ型の如く、とてもく太陽の前では正視することが出来ない凄まじさではある。

飯炊いて出たとは見えぬ婦人記者

○

お父様自身のいふところに據ると、優に五十は撞けるんださうな。しかし、その子供達の會話を聞ひてゐると、斯うである。

「お父さんは？」

「また撞球にいらつしたわ」

「あきれたな」

「でも、あんなに夢中になつてゐら  
つしやるんだから、巧いんでせう」

「何が巧いもんか、倶楽部では何時  
でも、球を立て、煙草ばかしふか  
してゐるんだよ」

「でも五十撞くんだツてね」

「そりやア、下役と撞くからさ」

いつ稽古したか重役五十撞き

○

いよく、この二階にも居られなくなつたので古木屋を呼んで来る。



「賀川豊彦の『死線を越えて』ですか。こんなモン駄目だッせ」と膝から横へ拂ひ除けてしまふ。

「小彌太の『舊約』だつか。これもあきまへん。安う出てまツさかいなア」

と一顧も興へて呉れない。古本屋の口にかかつたら賀川豊彦も江原小彌太もあつたもんぢやない。一山三文の値につけて

一反風呂敷を押しひろげたかと思ふと

茶や大根でも引ツ包むやうな調子で、

サツサと持つて行つてしまつた。有識

無産階級の悲哀とでもいふべきか。

古本を賣つて二階の暇乞ひ



「みつともなうて、他人様の前へ出られしまへんがな……」  
といふ聲をきく。

なるほど、じつと見ておれば

此の娘さんは昨日よりも今日の

方が一層太つたやうにも思へる

事ほど左様に偉大なる體軀を横へ

てゐらつしやる。

痩せる法といふ本ものぞいて見た。痩せられる

薬といふのも嚙んで見た。しかし何んの効果もない。悪戯すきな神様は屹度、微笑んでゐ  
らつしやることでせう！



77

太つたを娘片輪のやうにいひ

「日本でも近頃は搾る階級と搾られる階級とが、よくごたく／＼するやうですね」

「そりや、もう憐れなものですよ。」

鴻池あたりの小作人までが、所謂眼  
覚めたと言ふんですかね。やい／＼  
言つてますよ」

「おそろしい世の中になりました  
な」

「屋と牛と言ふ譯にはゆきませんからね。搾る方も搾られる方も、人間では當分ごたく／＼す



るでせう」

言ふだけは言ふ氣で資本家に向ひ

二階の一室にごろ／＼して「碧い  
眼をしたお人形は、あめりか生れの  
せるろいど……」

を唄つてゐるかと思へば、流行性感  
冒に罹つたやうなヴァネオリンを艶  
歌師仕込みに抱へ込んで更に近所泣  
かせのキー／＼をキー／＼言はしめてゐ

る。……去年も一昨年も高等學校の入学試験には美事に落第、それでゐて既に一人半の子



持ちとは滑稽千萬なり。

はらませるだけは孕ます親がかり



「もう一杯どや……」

「へえ、もう結構で」

と、もちくしてゐる。

「それでも大分いけるやうになつたやないか」

「交際で、ちよいく、やるもんだすよつて」

「さうぢやろく、少々はえゝで」

身體の滋養になるでな」

と相手には屈託がない。

こちらは思ひ出したやうに、窓外を眺めて

「エ、天氣だすな」

「ウム、エ、天氣やな」

酒ばかり呑んで言ひ出しかねてゐる

○

空模様險悪。

「大丈夫ですよ。おツ母さん」

「大丈夫でもいゝから持つてお行きよ」

「ほんとに大丈夫ですよ」

「持つてつた方が、ほんとに大丈  
夫ぢやないの」

「そりや、さうなんですが……」

「では持つてつたらいいぢやない

？」

「曇り、後晴れなのに、莫迦く

しいな」

「測候所なんて、あてになるものですか。愚圖々々云はずに持つてお行き」  
遂々持つ。

母親に押しつけられた傘を持ち



「妾なあ、旦那ハン。風呂の老舗を買ふて風呂屋をせうか知らん思ふてまんね。なん位あつたら出来まつしやろ」

「さあ、二三萬は要るやろな」

「へえ、そないに要りまつか。そないに要つたらあげへんがな。そやあつたら、撞球屋をしまつさ。撞球屋やつたら千圓もあつたら出来まつさかい。あとは、ぼつ／＼稼いでから入れたらよろしゆおまつさかいな」

と言ふてゐたが未だに仲居をしてゐるところを見ると千圓の金もなか／＼出来ないものに見える。

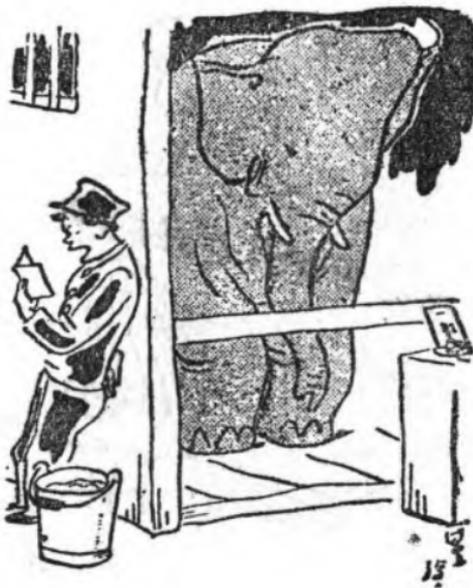
千圓がまだたまらない仲居なり



曇れる日の午後。△△△公園動物園の一隅、象は細い眼を一層細くして、タゴールのやうに瞑想に耽つた。

「日本へ来てから、もうよつぽどになるなア……。近ごろでは薩ツ張り故郷の夢も見なくなつたが、お隣りの春子さんなども何處かの果で暮らしてゐるんだらうな。……俺も斯うしてゐれば

別段不自由はないやうなもの、このまゝ老ひ込んで仕舞ふのは何だか口惜しいやうな氣もする。あゝ又何處かで籠の鳥の唄を謳つてゐるな。俺はあの唄を聞かされると



たまらなく焦々して來るのだ」

象思 へらく俺は孤獨だな

「こんなところに、すつ込んで出勤を  
しなくつてもいゝのかね」

「なあに、店の方は一週間に一遍か二遍  
顔だけ出しやアいいんだよ」

「フーム、偉いもんだね。僕も早くそん  
な御身分になつて身たいな」

「こつから山が見えるだらう。雪がちら／＼する時なんざア素的だよ。湯豆腐かなんかで  
一寸一杯ひつけて、うつらく／＼といふ奴さ。炬燵にあたつて梅曆をのぞいてゐるのも悪



くないからね」

「なる程。しかしこれだけの家だと失敬だが随分取るだらうね」

呑みに来た友に家賃をきかれて居

夫、姑、猫入らず——と考えて

来てハツとする。

身體がいつの間にやら冷めたくな

つてゐる。

女湯で考へる嫁風邪をひき



「今の世の中は二一夭作の五で不可んでな。こどもはこどもで何んとかするやろ。俺かて未ださう老ひ込んだといふ歳でもなし、貯金が出来んのはわしの罪ではない。貯金が出来ただけくれんのやから仕方がない」

「それでも蛸梅の暖簾をくじるだけはどうにかとれるんやから、さう苦勞がるにも及ばんやないか」

昨日も吞んで来た。今日も吞んでゐる。明日も吞めるつもりでゐるのが男親の心理状態である。

いつまでも働く氣なり男親





といふ言葉が彼の女の口から外へ轉け出やうとした時に、彼の女はあはて、袂の端で押さへつけてしまった。

泣顔を見せずお茶漬だけは喰べ

「思へばこの園が、去年の秋の病ひに、いつそ死んでしまふたら、斯うしたなげきはあろまいに……」

と隣りから流れて来る蓄音機の音譜にさへ身につまされて、ほろりとなる今の境遇ではあるが

「いつそ死んでしまふたら」

「いつまでも可愛がつて呉りやはりま  
つか……」

「そんなこと聞かんかて、判りきつた  
話やないか」

長火鉢で差し向ひになると、こんな  
莫迦氣た會話でさへ、滑稽でもなんで  
もなくなるのだから世の中といふものはをかしのさ。

差向ひ案じ過した事もいひ



一ト昔前の大坂見物

地獄極楽や、奥田の輕業や、團十郎の二輪加の大阪が何時の間にかやら俗惡極まる活動寫眞の大阪になつてしまつた。

總てにゆつたりとしてゐた大阪が、かさ／＼とした味も素ツ氣もない大阪になつてしまつた。

繻賣屋の店の莫大小の襦衣のやうに見掛倒しの大阪になつてしまつた。

どつちを向いても活動寫眞、どつちを向いても西洋の居酒屋ばかりでは下さらぬ。趣味が單調になつて人間がせゝこましくなるのも無理からぬ話だ。

懐手をして金儲けがしたい、お辭儀なら百萬遍でもするといふ市會議員の連中にまかせて置くからこんな殺風景な大阪になつてしまふのだ。

こんな調子では大大阪とやらいふものも思ひやられる。都市計畫とやらの前途も心細い

かなだ。何れは家斬庖丁であつちの軒先をはつツたり、先祖代々の家邸を生れもつかぬ三角形のペンキ塗にさせてしまつたり、無味乾燥な燐寸の箱を積み重ねたやうな家を建て並べてお金持ちの御機嫌をとることであらう。

日本人のやうに、大阪人のやうに一寸でも薄暗い處があつたら、直に悪い事をたくらむやうな人間に大きな家を建てさせることは大不賛成ぢや。試に十一時を過ぎて石川吳服店の前を通行して見よ。薄暗くて何んだか底氣味が悪くなる。賑やかな道頓堀の通りでさへこれだ。北船場や堺筋と來たらお話にならぬではないか。

今に何處かの街角でポツタクられたとかいふ事件が頻出するにきまつてゐる。

俺はもうそんな事を心配してゐるんだ。俺は元來心配性なんだね。散髪屋で仰向けにされると剃刀が恐いんだし、電車が通つたあとでは電線が切斷されて落ちて來はしなからうかと暫らく見上げてゐるといふ始末だ。

だから大阪の前途に對しても心配でたまらないんだ。別に誰に頼まれたといふ譯ではな



いのだが、詰り苦勞性なのだ。

大阪見物もこんな譯で思ひたつたのだ。今の内に大阪らしい處を見て歩かねば、今に倫敦や紐育の出來損い見たいな大阪になつてしまふからな。さうなつて見たまへ。太閤さんも安井道頓もあつたものぢやないからね。精々今のうちに廻つておいて大阪らしい處をせめて紙の上にも遺して置いてやらうと、尻の重い邪魔臭さがりの、ニヤリと笑つて皮肉な眼を投げかける漫畫家の柴舟センセイを促して大阪行脚も大層ぢやが、兎にも角にも赤靴の紐をしつかりと結んだ譯だ。

「何處から廻らうか」

「何處からでもエ、がな」

「何處がエ、やらうな」

「さア」

「兎に角南地へ行きまへうか」

「そんならさうしまへう」

と、柴舟クンと相談をしてゐるとちつとも埒があかん。其のうちに電燈が點いてしまつた。

二

やつて來たのが戎橋である。戎橋といへば大阪きつての名高い橋である。長さから云つたら天神橋に及ばない。立派さからいうたら難波橋に及ばない。それでゐて天神橋や難波橋よりも名高い橋だ。

名妓八千代ハンもこの橋を幾度か渡つた。春團治も渡つた。鴈治郎ハンも渡つた。丁稚も若旦那も渡つた。斯くいふ我が輩も渡つた。殊に新婚の當時は

美人でもないのに亭主手を繋ぎ

と洒れてよく渡つたものだ。

その頃にはモスリンの廣告燈が幅をきかしてゐたが、まだ／＼その時分は萬事に生やさしかつた。

近頃のエゲツなさと來たらどうだ。前後左右に廣告が目白押しをしてゐる。大阪の食ひ辛棒を當て込みに大して賣れもしない食堂とやらがおツかぶさつて、薄暗い氣分にして呉れる。

パウリスタが平倒つて攝陽銀行の庭園ひになつたなんざア、さまア見ろツと云ひたくなる。

益々我橋は壓迫されるばかりだ。そも／＼我橋が虐待され出した始まりと言つば、おまゐるのやうな巡航船が橋杭にぶツ突かり出してからのことだ。近頃では兩側の河岸ツぶちを埋たてゝます／＼道頓堀川をあじきないものにしてしまつた。

チラ／＼と青樓の灯が川底に吸はれて行つて、道頓堀川の水の色の黒さに、浮き川竹の思ひを偲ばせてこそ我橋に南地の情緒も流れてゐたのである。

この調子では今に我橋も殿めしい鐵橋になつてしまひはせぬかと行末が案じられる。

南詰には赤煉瓦の交番が突つ立つてゐる。こんなものをこんな處に拵えたのがそもそも

我橋の情緒をぶち毀した始め

なのだ。

交番を背にして查公がヘル

メツト帽を冠つた消防と二人

で話合つてゐる。一體彼等は

どんなことを話合つてゐるの

であらうかと忍び寄つたが、

僅に片言隻語しか耳に入らぬ

それでも米の値が高いとか安

いとかいふ問題ではないらしい。御身分にかかはるからね。こんなことは我が輩としても



餘りに立ち入つて聞かぬことにした。學校教育を受けたお蔭で流石に良心といふものを持ち合はしてゐたから。

讀むと直ぐ投げ捨てゝ行く戎橋

でこんな處を廣告配りの一の場所視してゐる大阪商人は度し難い。都市の美觀も風致もあつたものではない。

相棒の柴舟センセイ、欄干に寄り添ふて頻にスケッチをやつてゐると、この寒いのに何をやつてゐるのかと言はぬばかりに覗いて行くが、柴舟クンにグツと睨み返へされると縮み上がつて逃げて行く。「睨み返してやると直に逃げて行つてしまふ」と柴舟センセイ心得たものである。

パツパツと見せる蹴出しの戎橋

だなアと見てゐると、相棒も仲々眼が早い。

「あれPか。足の歩きやうを見いな。顔にはかり氣をとられてゐるので足のことを忘れて

わるんやで」といふ。

三

竹林寺といふても知らん人がある。「千日前のお寺やないか」と云へば「フムあの賑やかな露次のあるお寺かい」と法善寺と混同にしてござる。それほどハツキリしない小ツぽけなお寺かと思ふとさうでもない。かなり古くて、かなり大きな寺である。

弘法大師が安置つてあるお寺としては世間から閑却され過ぎてゐるやうに思ふが場所が場所だけに相當のお賽銭はあがるらしい。

竹林寺だから竹林唯七でもまつつてあるのだと思つたら大きな間違ひだ。公設便所の隣のお寺だと云へば誰にでも早わかりがするお寺である。

このお寺の北横町は不思議と人通りがチツともない。盛り場のドマンナカにどうしてこんな淋しい場所があるのか、その原因は一寸した經濟學者の手には合はない。

まア片側はお寺の塀だからいゝとしても片側は一體どうしたものだ。讀賣り一人立たんぢやないか。

じめくとして何時でも魔のさしたやうな路である。この路が又東西に亘つてかなり長い。氣の弱い人間は廻り路をしても通らない筈だ。

我輩と相棒の柴舟センセイは御苦勞にも、この細い長い小路へ遣入つて來た。

「どの邊やろ」

「さあ、どこやろな」

と二人は相變らず不得要領なことを話しながら歩く。

「こゝやないか」

と相棒が指さす。指さゝれた塀の方を見ると、成る程人間の背丈けよりは少し高い處に、顔がニユーツと出る位な長方形の穴がある。二人は期せずして立ちどまつた。コレ、コレ是れに違ひあるまいと思つてゐる拍子に、直横の簀戸がガラ／＼と開いたので、二人はギ

ヨツとした。怪しげなものが出たとしたら、二人はたしかに逃げてゐたに違ひない。けれども、そこから飛び出して来たのは矢張我々同然の人間だつた。

急に度胸が据はつた。

「これが、あの、齒痛のお

稻荷さんだツしやろか」

と聞いて見た。誰もゐない

と思つてニユツと首をつき

出した相手もこの突然な質

問に面喰つて碌々口も利け

なかつたらしいが、別段怪

しいものでもないといふことが解ると「さうです」といふなり、ふツと振き消すやうに居

なくなつてしまつた。



二人は仔細にそこらを調べた。ドイルヤルプランの探偵物で教育せられただけに、犬のやうに其處等を嗅ぎ廻つた。穴の中は眞つ暗である。其處を拜んで行くなんざア何んだか神祕的だなアと思つてゐると、その穴の下の方の扉から溝へかけて小便や大便がひつかけてある。拜んで行く人もあれば小便をひつかけて行く奴もあるんだから世の中は面白いと思つた。

小便を引つけて行く方では、眞逆こんな處に齒痛のお稻荷サマが銀座ましますとは思ひもよらないのだ。

やがて、そこへ美しい魔性の女が一人やつて來て立ち止まつた。

嫌曳のやうにも見える齒痛也

搔ツ拂ひ齒痛稻荷を横へ外れ

四

中の島公園と云へば、僕の小さな時分には大阪唯一の遊び場所であつた。目曜なんかには、よくお辨當をバクツキに來たもので、ほんとにその頃は天下泰平だつた。

なんしろ西洋人が珍しかつた時分でゾロ／＼と食つついて歩いたり、時には黒山のやうに人だかりがしたものであつた。

通辯は梅田から下車するとすぐに中之島の公園へ連れて來た。そして

「これが中之島パークだす」

と變天古な英語で、猫の額ほどの公園を紹介したものだ。

紹介された西洋人こそエ、迷惑で、くすぐつたいのをこらへて義理にも賞めねばならなかつた。

その時分には、今の市廳舎もなければ圖書館も公會堂もなかつた。

そのあたりに洋館建といへば大阪ホテルしかなかつた。それも焼けぬ前のホテルだつた。隣りに森吉樓があつた時分だから古いものさ。

その時分の公園は小さいながらも市民の唯一の誇りとなつてゐた。

市民大會と云つた風なことがあれば屹度この公園地に集まつて來たものであつた。よかれ悪かれ集まつて來た。實に市の中心點をなし、デモンストレーションの淵源地をなしてゐたのであつた。

ところが時の力は用捨もなく、公園地帯をせばめ／＼て遂々仕舞には劍尖の方へ追ひやつてしまつた。

あとには圖書館が建ち、公會堂が建ち、市廳舎が建つた。

市廳舎へ太閤サンは尻を向け

太閤サンの銅像が何時の間にやら隅の方へ押込められてしまつた。豊國神社は肩身の狭い思ひをして圖書館と市廳舎の間に僅に存在を認められてゐるに過ぎない。

物見阪大の前昔ト一



以前はお社ももつと大きかつた。そして今の公會堂のところにあつて、ホテルの方が表門になつてゐた。

八日の縁日には夜店も出てゐた。それが、この頃の豊國神社はどうであらう。義理か厄介かのやうに置いて貰つてる始末である。庇を貸て母屋を取られてしまつた形である。この調子ではお賽錢も大してはあがるまい。雪ぞらを見上げながら玉垣の中へ這入つて行つた。中は暗かつた。

左手に寒さうに燈明が見える。白玉稻荷サンである。神様の世界にも住宅難はあると見へて太閤サンと昔から同居をしてござる。

御本尊の太閤サンの方は眞ッ暗で森閑としてゐる。世間では左前になつたといふが、太閤サンは此方へ移つてから南向きになつた。そして北の方が勝手口になつてゐる。

今ではもう不心得者の通り抜けにまかしてある。太閤サンは落ぶれても矢ッ張何ツ處に太ツ腹な處がある。

公會堂がはねたと見へて通り抜け

殊勝とほしこうに一人の青年紳士せいねんしんしが参詣さんぎをしてゐる。一錢せんだか二錢せんだか、ガチャリンと音がした。背後はいごから忍び寄る。不思議ふしぎと忍び寄ることになも馴れて來た。ヂツと近眼鏡きんがんきょうを光らして見る。と彼は早稲田大學わせだだいがくの講師かうしをしてゐた服部嘉香はつべりよしかクンである。嘉香クンと太閤サンでは、公會堂どうのプログラムにもならないと思ふ。太閤サンは歌の神様かみさまでは無い筈だ。大隈サンが亡くなつたことを報告ほうこくに來たのかも知れない。

## 五

阪急電車はんきゅうでんしゃの十三で降りた。土堤どての上にあつた停留所ていりゅうじょが二丁北へ移されてある。神戸行かうべいゆきと吹田行ふいたゆきは此處こゝから岐わかれてゐるのだ。

「十三は市外しぐわいやから、大阪見物おほさかけんぶつに入れるのはどうやろ」と、既に十三に來てしまつてから抗議こうぎを一寸申込んで見るところは如何にも柴舟クンさいふねくン式しきである。

「なアに、大大阪の積りでゐればいゝ、こゝは十三の焼餅が名物やサカイ、一寸膨れてハミ出したんだ」と脱線語を放ちながら、踏を逆に取つて土堤の方へ戻ると、其處に貧弱な洋館建ての一棟がある。これは大阪で一時鳴らした赤壇警部が署長サンをしてゐたことのある十三警察である。

その警察と向ひ合つて頗る廢頹的な茶店がある。これが浪花名物十三の焼餅として知られてゐる今里屋久兵衛サンの店である。

二人はツイと遣入る。久兵衛サンといふのが今もゐるのか、どうだか知らぬが、それらしい人も見えぬ。

「あんやき」としてしの入た古風な行燈が幾つも並んでゐる下で十七八と二十位な娘サンがセツセと働いてゐた。

やがて、一人の方の女が薄汚れた生地なりのお盆に焼餅を十づゝのせて持つて來た。焼餅を頬張りながら柴舟センセイ、そろ／＼スケツチブックを出しにかゝつたのはいゝが、



肝心商賣道具の鉛筆を忘れて来たとおツしやる。あとで買ふとして、兎に角我輩の萬年筆

で間に合はせる。

その間に我輩は、そこらを物色する。

「浪花名物十三の焼餅」とした古い板看板が障子の横に打ちつけてある。この家にふ

さはしいものはこの板

看板と「あんやき」の

しるしの入れてある行

燈位なものだ。

世界大戦平和記念全

國特産博覽會の進歩金

賞牌といふのがかゝつ

てゐるが、この家として不調和も甚だし。

春に來たこともいふてる今里屋

この店の生命は春の摘み草の頃である。給仕風の若い男が二人連れで遣入つて來た。一人は詰襟の洋服にオザアを被てゐる。年嵩の方は和服に袴を穿いてその上から引き廻しを被てゐる。二人の會話は今度移つた下宿の問題で持ちきつてゐる。「七圓では安いぜ」とか「相宿をさせたら駄目だぜ、直に悪くしてしまふからな」とか「もう今度の家に移つてからは金を餘りつかはぬことにした」とか何んとか云つてゐたが、懷中から月給の入れてある状態を引きづり出して、その中から餅代を支拂ふと、連れ立つて出て行つた。

「焼餅を焼いてゐるのが、嫁サンやなうて娘サンやから、面白いぢやないか。あの一人の方は女中だぜ」

と、いふと

「さうや二人の話してゐるのを聞いたら言葉の遣ひ方が違うがな」

と柴舟クン先刻承知ぞと言はぬばかりの顔をする。

「それに娘サンが焼いてゐるのがいゝのだぜ。あの菊石のお婆サンが焼いてゐるのでは一寸手が出ないから」

といふ。大體この焼餅屋の今里屋久兵衛サンの店は享保十二年に今里村から久兵衛サンが出て来て開いたのがはじめて當主で丁度八代目ださうだ

「今里へ行けば先祖の墓があります、明治二十三年に御先祖の百七十回忌をいたしました」

とお婆アサンが話してゐた。

「只今でも、石炭やコークスは使ひません」

とお婆アサンの自慢を聞かされて引下つた。

六

難波へ出て来た。此處は和歌山行きの電車の起點じてんじや。梅田うめだが大阪おほさかの玄關げんくわん口ぐちとすれば難波は勝手口かつてぐちといふてもよからう。

事務所じむしょの前に松本重太郎まつもとぢゆうたろうの銅像どうざうが、如何いかにも淋びさうしさうに佇立ちよまつしてゐる。松本重太郎まつもとぢゆうたろうと云へば、我輩わがはいの小さい時分じぶんには大阪おほさかの財界ざいがいを切つてまはした人ひとで、何んな會社くわいしゃにでも關係くわんけいしてゐた。でもこの人が關係くわんけいしないと會社くわいしゃが成立せいりつしなかつたのかも知れないが、北銀きぎんの岩下清岡いはしたせいおかクンよりも、モツトみじめな晩年ばんねんを送つた人ひとである。

その人が南海電車なんかいでんしゃの事務所じむしょの前に斯うして黙つて立つてゐた處ところで、コレが世よに時ときめいた松本まつもとの重サンぢゆうさんだとは誰たれだつて氣きがつくまい。

扉びらを押して事務所じむしょに入ると青い羅紗らしゃのテーブル掛かをした机つくえに、一人ひとりの女おんながゐた。この女おんな不思議ふしぎと顔かほの筋肉きんにくを少しも動うごかして呉くれない。小學校せうがくかうの先生せんせいを斷ことわられたので、止やむを得えず

受付をして居りますと云つたタイプである。

机の上には小さな紙箱がある。その上に「落書御断り」と書かれてある。こんな處へ來

ても落書をする連

中があるのだと見

える。それが受付

のセンセイの逆鱗

に觸れるのかも知

れないと思ふと少

し位の同情はして

やつてもよからう。

應接へ通されて、

△△クンから、模



範車掌の話を書く。

「アレですかい」

と云つて△△君の語る處では模範車掌笠松兄弟はこの南海に勤めるやうになつてから、もう十幾年の長い年月になるさうだ。笠松兄弟と聞くと、何んだか敵討にでも出さうだが、やゝ夫れに似た物語がないでもない。しかし彼等兄弟の敵といふのは人ではなかつた。金が敵の世の中チユーが彼等兄弟の敵も金であつたのじやさうな。

笠松兄弟は元、中國で相當の家に生れたのであつたが、偶した事から家運が傾いたので三人の兄弟の上と下とが意を決して上阪したのであつた。

石に齧ちりついても成功しなければ措かぬといふのが彼等兄弟の信条であつた。そして彼等兄弟は實に意志の人であつた。

お粥の外には喰べないとか一日にバット一本しか喫はない、それも一服喫ふたら消しておくとかいふ蔭口を聞かされても、更に意としないで目的に向つて突進する彼等兄弟は確

に偉人である。

南海の社長サンが誰であるかはお客サンの多くは知らないが、横範車掌の笠松兄弟の顔を見知らぬお客サンは恐らく一人もあるまい。

彼等兄弟、二タ夫婦はコドモを連れて、六疊一ト間きりの家に住んでゐる。かくして稼ぎためた金は既に七八千圓の額にのぼつてゐるさうであるが、皆んな故郷へ送金して昔賣り拂つた田地の買戻しに努力してゐるのださうだ。何んといつても真似の出来ないエライ人達である。

こんな人達であるから「南海食堂がドチラを向いてゐるのか知らないさうです」と云はれるのも無理のない話だ。

目のとゞく限り眞ツ直な線路と、客扱ひに於て至れり盡せりの感がある横範車掌笠松兄弟を有する南海の株主サン達は仕合せである。

詰め込んで模範車掌は汗を拭き

七

大阪では宿替をする時に、よく鬼門だとか裏鬼門だとか云うてかついでゐるが毛馬の閘門はまさに大阪の鬼門にあたる。

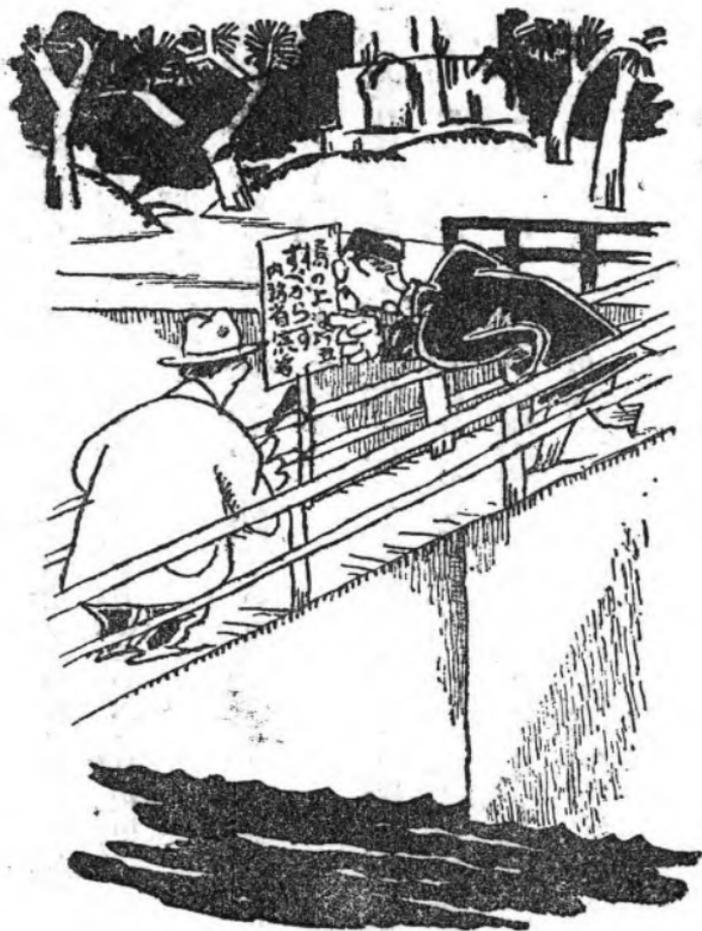
鬼門を清淨にしないと、屹底家のうちに不吉な事があると傳へられてゐるが、毛馬の閘門が出来るまでは、大阪の街は度々水害に惱まされてゐた。

尾籠な話じやが、老人なんか云はせると黄いろいものが街の中をボカボカ浮いて流れてゐたさうな。

エライ舊弊な事をいふやうじやが大阪の鬼門の手入れを放つたらかして置いたからで、其處へ遅時ながらも氣が附いたのは大阪人の偉い處ぢや。

ソコでヤツさもツさで拵えたのが毛馬の閘門である。この閘門が出来上つてからといふものは淀川の方へ無闇に水を落さぬ様になつた。まア例へて云へば西洋の便所のやうに綺

物見阪大の前昔ト一



麗な水を手加減して落すやうになつたのである。

これが爲めに、大阪の市民には寢耳に水といふ騒ぎが無くなつた。こんな有難い所を見物しておかなくツちやア噓だと變な處へ力を入れて之を月並にいふと日が西山に傾いた頃からエツチラ、オツチラ出掛けて行つた。

新淀川の堤防を上りつめると其處が所謂毛馬の閘門である。日はトップリと暮てしまつて、春の淡雪がハラ／＼と顔にかゝつて来る。

遙に北の方を見れば川を隔てゝ大きな雲が山のやうに降りて来てその底の方には人家の燈がチラ、チラ、チラと明滅する。上空にあたつては新月が黒い垂れ幕の中から顔を出してゐるやうに覗いてゐる。何んだかいゝ心持に酔つてしまひ寒いことも何も忘れてしまつてゐた。誰もゐない世界を私達二人で彷徨してゐるやうな氣持で看守場へ通ふ小さな橋の上に立つた。

ところが、その橋の眞ん中ほどに一つの制札が立つてゐる。

二人は云ひ合したやうに、その制札の方へ顔を持つて云つた。月の光りに透かして讀み下すと正に次の通りである。

橋の上に佇立すべからず 内務省淀川看守場

「ここで立つたら不可ンのやないか」

「立たな讀まれへんやないか」

「横を向けてあるからナンボ短い橋でも此處まで來な、何が書いてあるのか判れへんが

……」

「橋を渡るところへ立てゝおけばエ、ノンヤが……」

と頼まれもせぬのに智慧を貸たがる。

渡り切つた處が小公園のやうになつてゐる。中央に淀川改修記念碑といふのが異彩を放つてゐる。

柴舟クンはこの碑の上に突ツ立つて簌々と落ちる閘門の夜景を寫し出した。

我輩は「無用の者入るべからず」とした看守場の中に這入つて行つた。そこには社會劇でよく見るやうな一棟の洋館建があつた。下は赤煉瓦で疊まれて穴藏のやうになつてゐた。側面の階段を忍び足で上つて行つた。處が階上は事務室になつてゐる。誰もゐないのだと思つてソツと顔を出すと十二三の女の子がタツタ一人、こちらを向いて會釋をした。私はどうしても探偵小説の中の人物にならざるを得なかつた。

溝曳も毛馬まで來ると引返し

八

試みに天神橋筋六丁目の市電の交叉點に立つて見たまへ。あの薄汚い貧民窟らしい匂ひが薩ツ張り抜けてしまつてゐる。市中の人は長柄へ葬式を送る外には、こんな處へ來る用がなかつたものだ。

ところが去年の春に、この交叉點の東ツペリに市民館が出來て、文化的社會事業に手出

しをしてからと云ふものは其の邊の空氣を全く變へてしまつた。

勞働者の子がローマ字で年賀狀を出すほどの變り方である。ウカウカすると船場あたりのボンチは蹴飛ばされてしまふ。

我輩は相棒の柴舟クンを引つ張つてこの市民館の地下室へ降りて行つた。地下室には下足預かり所と娛樂室と、散髪屋と食堂と、小使部屋と、俱樂部員室とある。こゝは成るべく靴か草履を穿いて來ないと市民館に散財をかけることになる。散髪屋も家賃が要らんから大勉強の三十五錢、食堂も今橋の「千門」が出張して佛蘭西料理の手際を見てゐる。こゝの定食が又ペラボーに安い。驚く勿れタツタ三十五錢だ。斷つて置くが一枚の値段と間違へては不可ない。皿が二枚とパンがライスかは御當人の好みにまかせて、あとへ珈琲がつくんだ。都合四品取揃へて僅に三十五錢とは何しろ安いもんだろ。飯を食つて散髪をしに、ワザ／＼電車で來る連中さへある。何でこんなに安いかと云へば家賃が不要ないからだ。我々が餘外で高いものを食つてるのは、詰り賃家を食つてゐるんだといふソロバン

になる。

食堂を出た二人は更に上部へあがる階段のところへ出て来た。この階段の下の奥の方が

倶楽部員室だ。恰

度活動に映寫る地

下室のやうな處だ。

誰もゐない積り

で扉をソツとあけ

て見た。ところが

俺は今までに見た

こともない美しい

光景をこの部屋の

中に見出した。



机の向ふ側に差向ひになつた二人の青年がゐる。一人はお伽断のうまい山田たけしク  
 ンで、一人は見知らぬ盲人であつた。たけしクンはさびのある聲で印度の經典ウバニシア  
 ヲドの朗讀をやつてゐる。盲人は少しうつむき加減になつて聴き入つてゐた。その顔は悦  
 びにみちて一種の光りを放ち、盲人特有の陰鬱な蔭は全く拭ひ去られてゐた。我輩はこの  
 時の彼の純真な心持を味はふことが出来た。そして彼の生涯を祝福してゐた。

ロシヤの小説で、斯うした光景を讀んだことはあるが、實際に觸れたことは今日がはじ  
 めてだ。柴舟クンをのぞかせてこの場の光景をスケッチブックに入れて呉れるやうに云つ  
 た。

二人は、この詩人の心をかき亂さぬやうにソツと退脚して上層の圖書閲覧室や、法律相  
 談室や、道場や、音楽室や、講堂迄スツカリ見物をした。少年室では高尾亮雄クンが婦人  
 の爲にローマ字講義をしてゐた。

再び倶楽部員室へ戻つて來ると、さつき朗讀をしてゐたウバニシアツドの講義が始まつ

てゐる。講義が終るのを待つて紹介されたが、此盲人橋本クンと云つて盲人界の新人で、點字で新聞や雑誌を發行してゐる人であつた。大正の塙保己一だなアと思つた。

總てがお役人式である市の事業の中に、一市民館を有することは大阪市の誇りでなければならん。館長の志賀志那人クンに敬意を表して再び地下室から地上の人になつた。

遊んでるやうにも見へる市民館

九

瘦犬が塵芥溜を漁つてるやうに、迂路ついてゐると、一つの小さな御堂を見付けた。それが不思議と、往來へハミ出して、道幅が其處だけ細くなつてゐる。軒先が一寸出張つてさへやかましい大阪で、それがお堂であらうと、何ンであらうと許容されるべき筈がないのに、此は又どうした事であらうと近寄つて見た。

ぐるりにはズツと塔婆のやうな板で垣がつくられ、丸い瓦斯燈には鶯塚地藏尊の五つ

の文字が記されてあつた。

「コレ、書になるやないか、何んだか大阪のやうな氣がしないア」と柴舟クンは早くもスケッチブックを出しかけた。

「まア、そろそろはじめてんか、俺は誰かに聞いて見るサカイ」

と四邊に人がゐないかと思廻した。ところが、判らんことがあつたら乃公に聞くと云はぬばかりの態度でこの寒空に往來へ出て突ツ立つてゐる人がある。その人の背後には、筆太に「東長柄巡查派出所」とした一枚板の板看板がブラ下つてゐた。

「まア何ンでもエ、から此の人に聞いて見やう」

と思つたので、帽子も脱がずに軽く會釋をして

「コレは此の邊での名所なんですか」と云つた。

「大阪の名所です」



「さうですか。それではこの 篤塚とやらについて何か面白い話はありませんか」

「別に面白い話といふてはあるまいネ」

「この邊のことに精通してゐる老人はゐないでせうか」

「知らないネ、多分そんなことを知つてゐる人はゐないだらう」

「でも堂守のやうな人が居る筈でせう」

「そんな人はゐないらしいネ」

「一體このお地藏サンは何に効くのです。例へば眼を癒して下さるとか、齒痛を癒して下さるとか」

「さア、そんな事は知らないネ」

「どんな人達が主にお参りをします」

「さア」

「藝者がおまわりをするとか、役者がおまわりをするとか或る特種の階級がある筈ですが」

……」

「そんなものは無いネ」

「これといふ變つた話はありませんか」

「さうだネ、傳説ならあるだらうが、そんなものは詰らないからネ」

「イヤ、その傳説でも結構ですから聞かして呉れませんか」

「しかしその傳説もよくは知らないのだ。何んでも芝居や、浪花節にまでなつてゐるさう

だが……」

何處まで押して行つても巡查は、知らないの一點張りである。我輩が餘ンまり押強く聞き質してゐるので、頻りにスケツチをしてゐた柴舟クンが、スケツチの手を止めてニヤ／＼微笑つてゐる。我輩が遂々諦めをつけたので若い巡查はサツサと巡回に出てしまつた。

しかし此の儘引下つては詰らないと思つたので、今度は垣の横の平家建の障子に眼をつけた。一二寸あいてゐるので、其處から覗き込むと一人のお爺さんが布團の中に圓くなつ

て寝てゐた。その横に小ッぽけな古机が一つ置かれてある。古机の上には籤箱がのツかつてゐた。この老爺さんの話では詳しいことは知らぬが長柄長者に一人の娘、名はお梅といふのがあつて、その娘の愛してゐた鶯が死んだのでそれをこゝに葬つてやつたので鶯塚といふのであらうとのことであつた。

もう一つは、その娘にまつはる艶つぼい物語であつたが、その方は芝居の筋なのであつた。この地藏尊の和讃があつたので貰つて來たが作者は「九州産無學愚僧松山大晁作」としてあつた。

家へ歸つてから此話をする、夫なら長柄長者鶯塚の由來と云つてよく芝居にします小さい時分に二三度見ましたが、東京の帝劇でも演てゐましたと云はれて「それでは家へ早く歸ればよかつた」

竹光にたゞの乞食でないと知れ

鰻谷の「しるや」にやつて来た。不思議なことには、この味噌汁屋には屋號も無ければ標札一つ出てゐない。何んの誰兵衛サンの經營にかゝるものか、チツとも判らない。

それでゐて鰻谷の「しるや」と云へば誰でも知つてゐる。名前は無くても信用はある。味は萬代不變である。

間口が二間半と云へば、場所柄だけに、さう小さくも聞えないが奥行タツタ半間しかない。これを一言にして盡せば軒店である。だからズツと這入らうに這入れない。ちいと大きな人が這入つて來れば出口をふさいでしまふ。もう一遍表まで出て貰らはねば先の人が出られない程の店である。恰度舊式の電車に乗てゐると思へば大した間違ひはあるまい。それでゐて三百年來の歴史を有してゐると云ふんだから凄じいやないか。誰でも先づ暖簾から首だけ突込んで中の様子を窺ふ。これが決して怪しい振舞でもなんでもない。何

時行つて見ても満員客止めの盛況だけに、自分を入れてくれるべき場席を物色するのである。

ホツと安心は大層な云ひ方かも知れないが、兎に角自分の腰を降ろすべき場所を發見すると、ソツと身體を入れる。すると、亭主が突然に

「エー、鯛に、とり貝に、蛸ー」

とブツキラボーな言葉を浴びせかける。この言葉がハツキリ耳に遣入るやうで無かつたら此處のお客サンの資格がない。う入らつしやい」とも言はずに、その日の献立を呼びあげるのである。うまくて安いばかりではない。こうした一寸したところにも輝る要領がよい。近頃の江戸ツ子が學ばねばならぬことの一つであらう。

「行燈が新しくなつたなア」

と我輩は柴舟クンと話しながら腰を下す。今日は幸ひ空いてゐる。

お客サンと云へば我輩の前に三十七八の髭と、柴舟クンの前に姥櫻ともいふべき年配の



丸髷まるまげと何處どこツかのお店たな者ものらしい貝かひの口くちとである。髷ひげはマントの片袖かたそでをグツと捲まくりあげて汗あせを吸すふのに餘念よねんがない。丸髷まるまげは吸すり終おはつた處ところらしい。そろ／＼赤あかい裏うらのついた財布さいふから銅貨どうげを膝ひざの横よこへ並ならべてゐる。出だしたり入いれたりしてゐるところを見ると、頭あたまの中なかでは男おとこのことでも考かんへてゐるのかも知しれない。足袋たびカバーを穿はいてゐる。足袋たびカバーを穿はくやうになつては戀こひも世帯しよたいじみて不可いんわい。何どツ處かの牛肉屋ぎゅうにくやの仲居なかみかも知しれないと想像さうぞうを逞たくまうしてゐるうちに出掛でけてしまつた。

三百年さんぱんねんから引續ひきついてやつてゐる店みせと云いへば、この廣ひろい大阪おほさかにも澤山たくさんはあるまい。昔むかしは、「をぐらや」や「大丸だいまる」の番頭ばんとうサンや手代てだいが此この店みせの唯一ただひのお客おきゃくサンであつたのかも知しれないと思おもひながら、コロと、とり貝がひの二杯ふたはひを吸すふた。

色氣いろけなしで吸すふ許ゆるりだと逃げを張はり

十五六ひすめの娘むすめの子こが汗あせを運はこんで呉くれる。染緋そめかすりの上に髮結かみむすびサンが被かてゐるやうな白しろいエプロンエプロンを引ひツかけてゐるが、殆ど口數くちかずを利きかないで商賣しやうばいをしてゐる。オベンチャラの百萬まんべん遍へんも

云はねば賣れない店とは天と地、月とすつぼん程の違ひや。大阪も廣いなアと思ひながら勘定をすまして出た。

一一

ドラツグ商會が蹴躪したり、出雲屋がのさばつたりしてから、大阪の色氣も喰氣もズントと下落してしまつた。粹だとか乙だとかいふものは段々影が薄くなつて行く。

有田音松と出雲屋の亭主とを呼び出して

「エ、加減に廢業したら何うや」

と叱つたら

「デモ、お客サンの方がお困りでせう……エへ、へ、へ、」

と云ふかも知れない。

何んでも音松クンの云ひ草では花柳病患者の絶滅をはかるのは國家のためださうな。

さう云へば出雲屋の方でも負ん氣を出して、お手輕に精力絶倫たらしめるには手前の方に限りますので、と顎ひをシヤクルであらう。盗人にも三分の理屈はある。本屋が社會を教育してゐるやうな顔をしてゐると何等變らない。

まアそんなことは何うでもエ、事にして出雲屋の段梯子をのぼる。

「何處がエ、やろか」

と云ひながら二階から三階まであがつてしまつた。

階下では火事場の釘拾ひのやうに、まむしの中から鰻を掘おこしてゐる連中ばかり、二階は五組ほどのお客、三階は驚く勿れタツタート組、これでは電燈代もあがるまいと心配をするのは少々早い。

戸外は絹糸のやうな雨が降つてゐる。我が輩と柴舟タンでは、シツぽり濡るゝ鶯の：でもあるまいか。

二十四番とした大きな下足札を其處へ投げ出して二人は腰を降ろした。



タツタート組のお客サンを解剖して見ると、洋服が二人、小倉の袴が一人、ハイカラが二人、締めて五人連れだ。洋服とハイカラが差向ひになつて、袴だけが、てんまのやうに横にくつついてゐる。

何處ツから見ても安事務員のタイプである。最初の二人は夫婦らしい。次の二人はまさしく嬉しい仲らしい。銚子五本倒して陶然として立ちあがつた。大枚五十銭のチツプを切つて、食ひあましの鰻を折に詰め込むとサツサと歸つてしまつた。これは朝日座の戻りだと脱んでおく。

又一ト組あがつて来た。一ト組といふと二箇連れに聞へるかも知れぬが一人一黨の一ト組である。三十七八の男、我輩等に背を向けて端然と座してゐる。首も動かさねば體もくづさぬ。

「アレ、お公卿サンの出やで」

と相棒が皮肉をいふ。別段女を待つてゐるさまもない。

欠伸でも出さうな顔をしてゐる帳場ハンの横手で六十近いお爺さんが仲居連中をキヤツ  
 くと云はせてゐる。

「アレ、肩入やで、カフェーで好遇なくなるとこんなところへ来るんだなア」

といふてるところへ肩入が又一人殖へた。こん度は少しくお若い。お若いといふても四十  
 の阪は越してゐる。お爺サンの手から逃げた仲居はこの四十男の膝の上にドツカと乗つて  
 抱かせてゐる。人間の鬭争性はこんな處にまであらはれてゐる。いつも戦場のやうな、ロ  
 ハで貰つてゐるやうなゴツタ返した出雲屋ではあるが雨の出雲屋は斯うした人間性の葛藤  
 まで見せて呉れる。

「いつもより仲居が細くてやさしう見へるなア  
 と二人は感心してゐた。

夕刊の聲を出雲屋聞き飽る

出雲屋をおこられ了稚先へ去に

正辨丹吾のお客サンを吟味すると有識無産階級が多数黨を占めてゐる。口では偉さうなことを云ふてゐても、その懐に至つては哀れ憫然たるもので労働者にすら及ばない。

昔から無い袖の振れたためしが無いやうに、自分の懐を痛めてまでも、鶴屋や重亭の仲居サンを煩はすことは性に合はない。何ンといふても落ちつく先は、てつとり早うて安直な正辨丹吾の暖簾のうちである。

法善寺のあの狹ツくるしい露次を芝居裏へ抜けやうといふ小口に俵屋の帳場と間違へられさうな暖簾をブラ下げて上戸黨をせきとめてゐるのが此店の特色だ。

正辨丹吾の生命は難波新地に居稼店があつて前景氣のばい一をきめ込んだ頃にあると思ふ。勿論その頃とはお客サンのネタが違つて來ただけに、こゝで引つけてからの發展ぶりも變つて來た。

我輩わがはいと柴舟さいしゅうクンが關東煮くわんとくしの串くしを小皿こざらの上に幾いくつか並ならべてゐるうちに、セングリお客まやくサン

は新陳代謝しんちんだいしやしてし

まふ。

立ちのぼる湯氣ゆけ

の中から、蒼あをうて

角かくい、浪花節なげはせつでも

唸うなりさうな男をとこが、

顔かほをつき出し細長ほそなが

い箸はしで關東煮くわんとくしをつ

まみあげて呉くれる。

「幾いくらや」  
とお客まやくサンが懐中



物をさぐつてゐると

「エー、サアチイファイヴセン」

と柄にないことをいふ。お客サンの方ではメン喰らつてコソコソと逃るやうにして行つてしまふ。

「エー、シキスチーセン。フォーチーセンお剩錢」

と續ける。帳場の方は又眠つてるンちやあるまいかと思ふほど一言も發しない。それでゐて勘定だけはキ、ツ、チ、リと合はして行く。

帳場に近い所で背の低い職人風の男が、若い衆に煙草を買つて來て貰つた使ひ賃を渡さうとして、努力してゐる。

「取つといて呉れたら何うや」

「いや、大げに、そんなにして貰はんかて、煙草位の使ひはお安い御用だんが……」  
と受け取らない。

「受取つて呉れ」

「いやそんなものはいりません」

と突き返す。五十錢の労働紙幣が行き場を失つてゐる。

「それでは帳場へあづかつて貰らおう」

と此男も仲々ひるまない。

店先で二人づれの男が、懐はあると思つて飲んだのに、少々勘定が足りないからと恐縮をしてゐるのを

「それではその人の勘定を之れで取つて呉れ」

と五十錢をまだ振廻してゐる。よく働く五十錢札や。二重三重に働かせる積りでゐるらし

50

「いや、何ういたしまして」

と相變らず受けつけない。

「それでは、お芳サンを呼んで貰はう」

と向ひの仲居サンの方へ話を振り向けた。しばらくするとお芳サンが出て来た。

「そんなら皆さんにあげなはれ」

と五十錢宛縮て四枚をまきあげられる。お芳サンの裁判にはグーの音も出ない。それでこの事件も忽ち解決をつけたが、この男から見れば、餘りうれしい解決法ではなかつたらしい。けれども、みんなにやる必要はないとも云へず、そんな事でも云はうものなら色男の估券にかゝはるといふもの、そのまま黙つてお芳サンに連れられて、向ひの方へ引きあげてしまつた。あとで一同眼と眼を見合せて苦笑。

色男たらんこと、それ斯くの如く難し。とても我輩等の物臭さでは及びもつかない。女に色眼でも使つてゐるひまに、申の敷を一ツでも餘計にバクツカウといふ了見ではとても女の出来ツこはない。

正辨丹吾逢ひに行くのも交つて居

正辨丹吾これツばかりの金で酔ひ

一一三

我輩が

「今日は貧乏神へ行つたらや」

と云ふと、相棒の柴舟センセイ、うんだとも潰れたとも云はずに、くつついて来る。この調子やと、我輩が地獄へ行くと云ふたら、地獄の底まででもくつついて来るかも知れな

50

戎橋の停留所の處に、見るも汚ならしい古本屋がある。それが貧乏神と云ふ古本屋だ。

二人は其の店先に立つた。店先に立たんかて、這入つたら、よかりさうなもんやと思ふかも知れんが、此の店のお客サンは誰でも、店先と云ふよりは寧ろ往來に突立つて

「ソレ、何ンばや」

とか

「何は無いか」

と訊いてゐる。だから「小雨は半休、大雨來るときは休業」と塗板に書いてある。

店のすぐ横手に貧乏神が祭つてある。覗いて見ると神鏡がキラ／＼と光つてゐる。

「御神體が、こんなかに這入つてんのか」

と相棒が聞く。

「なアに、御神體は、アツチになほしたあんね。一遍見せて貰ろたるか」

と我輩が主人の鐵面クンにボシヤ／＼と掛合ふと「よしや」といふなり、古本が山のやうに積んだる上を踏んで、御神體をおろして來た。

「なんでそんなとこへなほしたあんね」

「此處へ入れたアてんけど『堀江の藝者ハンが、此處は鬼門にあたるサカイ、うちらへお祭りして、お燈明をあげとうくんはなはれ』と云やはんで、なほしたアんね」

「仲々熱心なもんやな」

「お金も呉りやはんで困つてんね。いつでも五錢か十錢くりやはんね。さうかと思ふとあんころを供へて行きやはんねで。そして翌る日に、昨日あんころを供へときましたでと屹度答へて行きやはんね」

と喋べつてゐるところへ、一人の婦人がおまわりをして、一生懸命に拜んでゐる。

「何ンで貧乏神なんか拜むのんや」

「うちへ來とうくんはんなやと云ふて拜んでんね」

「あの人誰やね」

「あれは日本橋の紙屋のお内儀サンや。あのお内儀サンは雨が降つても風が吹いても毎晩まわりやはんね」

「上には上があるもんやな」

「自分が風邪でも引くと、女中を寄越すのんやで、それに貧乏神だけやないのんや。うち

へおまわりするまへには妙見サンへまわつて、それから貧乏神で、その次が金神サン、そ  
れから新金毘羅サ

ンへおまわりをし

て竹林寺へまわつ

て法善寺へまわつ

て去にやはんね」

「まるで神サンや

佛サンの梯子酒や

な」

「あんたが正辨丹

吾やパノンやライ

オンや方々廻んなはるやうなもんや」



「モツとおもろい人が参詣れへんか」

「そやな、ルナパークの喜劇役者で龍田錦といふ人がまるつて來やはる。それに去年の正月にパークで貧乏神の喜劇をした事がおまんね」

その間に相棒は御神體を見て

「エ、色が出たアるな」

と首を振つてる。

「ソんな色を出すなア譚おまへんねで……大體この木は一代の富豪光村藻祐の家の床柱で彫つたもんだんね。大工サンに貰ひましてん」

「夫れを君が彫つたんかい」

「エ、素描を戸張弧雁サンがやつてくりやりましたんで……」

と話はなか／＼盡きないが

「ウツカリ貧乏神にでも取りつかれちやたまらんから、もう此の位にしところや」

と引きあげた。

盗られさうなところへ鐵面店を出し  
値切るのを貧乏神は聞き給ひ

一四

朝日座に入場つて、西ツペりのところへ兎も角腰を降ろす。柴舟クンは早速ポケットからスケツチブツクを引きづり出して戦闘準備にかゝつた。我輩もポケットから強度の近眼鏡を出して懸替へた。二人は云ひ合はしたやうに、隣近所から一と渡り場内を脱め廻したが、これといふものに打ツつからない。

「近頃のお客サンは静肅しなつたなア、まるで講演でも聞きに來てるやうな調子や」  
「お客サンかて段々お客サンとしての訓練が足りて來たんやで」

「さうかも知れへん。何んしろ、此處のお客サンは智識階級が多いサカイな」

と二人は周圍へ氣兼ねしながらヒソヒソと談してゐた。

「東側に許り藝者が來てるのは、何ういふ譯やろ、彼方側が這入りよいか知らん」と柴舟クンは妙なところへ結論をつけたがる。

「ソレは白井サンに聞いて見な判れへん」

「白井サンかて判れへんで」

「そやろか」

「そやとも」

と遂々白井サンも判らんことにして片附けてしまつた。

こんなことを喋べつてゐると寫眞はチツとも見てゐないやうだが、コレで寫眞の方へも眼を配つてゐた。

「吳羽鳥」が濟むと今度はバリアツチといふ奏樂がはじまる。バリアツチの内容は何んなものだか我輩には判らない。



「犬が洋服を来て、毬に乗つて出て來さうや」

と相棒が鐵槌を下す。成る程さう聞けばそんな處もある。と云ふとポロクソにけなしてゐるやうであるが、その實我輩の耳のないことを此處で告白して置くのである。その代り觀客が頻に手をたゞいてゐたから埋合はせはつく筈だ。早くやめさそうと思つて手を叩いてゐるんでは決してあるまい。

我輩等の直ぐ下に一段低い座席がある。これは婦人席である。朝日座はこの婦人席についてには特に注意をしてゐるさうである。お上の御心配、經營者の御心痛の程は察し入る。婦人達よ、安んじて寫眞を御覽下さい。

我輩と柴舟クンとは絶えずこの婦人席に眼を向けてゐたと云ふと怪しからんとお小言を頂戴するかも知れんが、決して美人を見てゐた譯ではなかつた。そこには四十過ぎの可成大きな圖ウ體をした男子が傲然と構へてゐたのであつた。

「何處からあんな大き男が轉げ込んで來たんやろ」

とそれが氣にかゝつて仕方がなかつた。

すると、又婦人席から煙草の煙が立ちのぼる。パツパツと煙草の火が光る。いよ／＼怪しからん譯だ。チツと見据えると矢張り件の男である。

「己れツ、狼藉者ツ」

とも何ンとも云はなかつたが、斯うなつて來ると、寫眞はそツちのけである。

しばらくすると、此の男の前に一人の査公があらはれた。斯うなくツちや芝居にならぬ。そして此の査公たるや、ツリ髭の中から顔が覗いてゐるんだから、嬉しくつてたまらない。朝日座の昔を思ひ出す。死んだ高田實が大向ふを唸らせてゐた時分には、斯うした場面もあつた。

大きな男は何ンの苦もなくつまみ出されてしまつたが、此の査公の眞に迫つたゼスチュアに對して誰一人手を叩くものが無かつた。

朝日座の間は無事な若旦那

兄さんと分れて這入る婦人席

一五

文樂は何時行てもえも。淨瑠璃にしる、人形にしる申分がないやないか。誰が何ンと云うても天下一品である。こればかりは和製でなくツちや駄目だ。

あのすべくした顔で現代離れのしたところはたまらんやないか。ヂツと觀てゐてさへ寒くなつて來るやうな變天古な人形が、人形遣ひの妙技次第で、舞臺に立つた時、その人形に魂が這入る。そして生きた人間よりも、モツと自由に泣きもし笑ひもする。そんな時には觀客の眼には人形遣ひの姿がチツとも映らないのである。

改築された文樂座は、以前よりもズツと明るい感じがする。それだけ船場趣味が稀薄になつたやうに思ふ。

矢張り朝の仄暗い頃から割や上割へ詰めかけてゐたころの文樂が眞實の文樂のやうな氣

持がする。その頃は二錢出すと立見をさした。それが越路(攝津大塚)の時だけは倍額の四錢だつた。我輩が月に二三度お祖母サンに連れて來られた頃よりも、後に學校の歸りに立つて聽くやうになつてから眞實に淨瑠璃と云ふものが忘れられぬやうになつたのだ。

「君、黒ン坊が嬌態をしてるぜ」

と柴舟クンが私語く。

「電話でお辭儀するのとおんなじで、ああしないと情がうつらないんだ」

と尤らしい事を云ふてゐると、突然背後から

「ああ、面白いですな。これは活動寫眞よか面白い」

と大きな聲がする。文樂へ來てこんな大きな聲を發する人は滅多にゐない。振返つて見たら北濱の變人、今良の爺サンだ。文樂と活動をゴツチャにして面白がつてゐるんだから頗る罪のない爺サンである。

駒ヶ林村の時に吉田文三クンの部屋を訪ふた。クンは三疊程の見晴らしのいゝ部屋の長



火鉢の前に胡座を組んで土でもひねくつたらよささうな顔をしてゐた。

「神経痛でなア」

と云つて自分でモヒの注射をしてゐる。こんな情緒的な部屋で思ひがけないものに、打つかつたので何んだか變な氣持がした。

文三クンの遣ふ熊谷と、大文字屋の權八と、重の井子別れの腰元とが部屋の半分程を占領してゐた。熊谷は鎧武者と二人あつた。すべて衣裳を着かへないでも首を差し替へさへすればいゝのだ。こんなところは人間よりもよつほど便利に出來てゐる。文三クンは

「まア一遍遣つて御覽」

といふ。

熊谷の尻から手を突ツ込んでウンと反り身になる。

「モツと差しあげるんです」

と云はれるまゝにグツと差しあげて見た。三貫七八百目はある。これで四十分も五十分も

遣つてゐては大變だ。

「歳暮の砂糖を持つて行くよりも、ズツと重いなア」

と云つたので大笑ひ。

「若い時分には、この鎧にしてもほんまものを使ふたので七八貫の重さはあつたものです今はもうトテモ駄目です」

といふ。成る程コレでは中年から人形遣ひにはなれない筈だ。

相棒の柴舟クンは一生懸命になつて熊谷の首をスケツチしてゐたが、人間になつて不可  
ンといふ。文三クンも

「恒富サンや草平サンが人形の研究によく來やりましたが、皆な人形にならずに生きた人間になるといふて困つてはりました」

といふ。いろんな話をした場合、大部屋らしい人形の一面にブラ下つてゐるところを覗き込んだり、段梯子の横につるされてある、ツマの間抜けた面に吹き出したり、人形遣ひが

履く、箱に花緒をくつつけたやうな背の高い下駄を面白がつたりして、次の陣屋を聴くためにもとの座へ戻つた。

「石塔の誂へ主は敦盛の幽霊、手附一厘取りませぬ。せめて人魂でも手附にとれば提灯にでもならうもの。節季に書出し一つ持つて行く所はござりませぬ」といふ彌陀六の臺詞を聞いてゐると、ゆつたりとした氣持になつて、とても文樂座の一二丁先きに電車が走つてゐやうなどとは思へない。

浮上るやうに人形の大笑ひ

人形の歎はつきり首を振り

泳いでるやうに人形は這入る也

一六

浪花座へ出掛けた。澤正は相變らず大車輪に燃をかけて一所懸命にえをかけてゐる。

殊に一派の端役が、何れもチョン髷がシツクリと似つく事と、藝に忠實な事とは敬服の外なし。まア何ンでもシツカリやんなはれ。

我輩は例によつて強度の近眼鏡と懸替へる。ピリ／＼と筋肉のうごくのが見へないと承知の出来ない性分なのだ。そこへ持つて来て大の近眼と来てゐるんだから、頗る厄介だ。芝居を観ると云ふことは一つの大專業のやうな氣がする。序幕から大詰までオペラグラスを離さなかつた時代がある。

今日は二階から観客を見物する。盛んにパクツイてゐる。まるで喰べな損のやうにして喰べてる。まだ／＼観客が低級であると一寸憤慨して置く。死んだ高田が幕合に演説して、お客さんに叱られたのも尤やと思ふ。

カブリツキに近いところで娘サンが澤田ハンの繪葉書を嬉しさうに見てる。そのズツと後の平場(二等)に赤いシヨールをした女が、チヨコナンとお雛サンのやうに坐つてゐる。勿論二箇連れや。男の方が

「今何時や」

と聞いたらしい。

赤シヨールはグツ

と腕をまくつて金

時計を見た。まる

で俱利加羅紋々を

見せてタンカでも

きるやうである。

「モツとやさしい

出来ンもんやろか」

と相棒が笑ふ。

一と渡り見渡した。

全體に素人の娘サンが多うて、何ンでや玄人が少い。それから澤正



の芝居には彌次がつきものだ。野球や劍術の試合と同じやうに思ふてゐるらしい。ソレでは澤正も浮かばれない。これが扇雀の芝居となると違ふ。この下はキントトばかりで埋まつてしまふ。何んしろ京都から隊を組んで来るンやよつてな。それが十時頃になると電車の都合で、ソロソロ歸り仕度を始める。羽織を持つて來てもろて、キントトの上からやんはりとかけて貰ひ、背中のところを斯う膨らまして

「姐サンお先」

「姐サンお先」

と、みんな可愛らしい丸い袋を提げて引きあげて行く。が、澤正のお客サンは、お客サンの性質が違ふ。あの激しい立廻りに共鳴して溜飲を下げに來る連中が多いのである。ラムネかサイダーのやうに思つてるのかも知れない。

幕間に奈落を見物して來やうと、岡クンに交渉する。

「何うも、その、大變汚いので……前に知らしといて貰うたら、掃除しときまんのに……」

と無闇に恐縮される。

「その汚いのがエ、のんで」

と妙な挨拶をして無理に頼む。それではと云ふので、スリツバを貸して貰つて奈落へ降りる。成る程仰せの如く汚い。こゝでは到底もキントトが何うの斯うのといふ騒ぎではない。まるで鑛山生活である。末高大明神が祀られて林長三郎と片岡我童の手拭がブラ下つてゐる。藝運長久を祈つてゐるんやろ。廻り舞臺の脚が淋しさうに幾本か立つてゐる。

十何人とかで廻すんやさうである。無臺裏へ出て見た。甲源一刀流劍士の控室に出て來るチヨン鬚が、まさに舞臺に出やうとするところで、敷島の煙をパツパツと立てゝゐる。吹殻をそこへ投げ棄てたかと思ふと、スリツバで火を消して舞臺の方へ出てしまつた。

それから部屋をト廻りしたが、古着屋の土用干みたいな大部屋なんかをこゝにサラケ出すにも及ぶまい。

「大菩薩峠」のお濱(久松)が机龍之助(澤田)の方へ裏切つたので、我輩の隣に座を坐めて

ゐた太つた女が

「女といふものはなア」

と憤慨してゐた。

散財も新國劇は殺氣立ち

一七

御靈サンの夜店を迂路つく。以前の盛況はとも見られないが、判古屋の松本や花箸屋の花十三や糸巻屋は昔の面影を残してゐる。

何んといふても、土一升金一升の平野町で、しかも目貫の御靈筋へ、デーンと構へ込んで貧乏搖ぎ一つしない御靈サンの凄腕には敬服の外はない。神サンでも佛サンでも賣れツ子と賣れツ子でないのとは大した違ひだ。

表門から這入つて直右ツ側、お祭のところに櫓を組んで太鼓をたゝいてゐるところの、あ

そこへ一人の香具師が小ツボケな脚付の臺を置いてチアテルミー、レントゲンとかいふ機械を賣つてゐる。機械といふと大袈裟に聞えるが、キャラメルキャラメルの箱よりモツと小さい黒塗りの紙箱で兩端に穴があけてある。香具師は型の如く、變挺な中折を冠つてゐる。洋燈とセルロイドの變りに半紙を張つたとかいふスクリーンとを片手に持ち、そのスクリーンを通して來る光線の前に片手をかざしては

「ソラ、骨が見えるやろ、骨の動いてるのが見えるやろ」と自分の指を動かして見る。

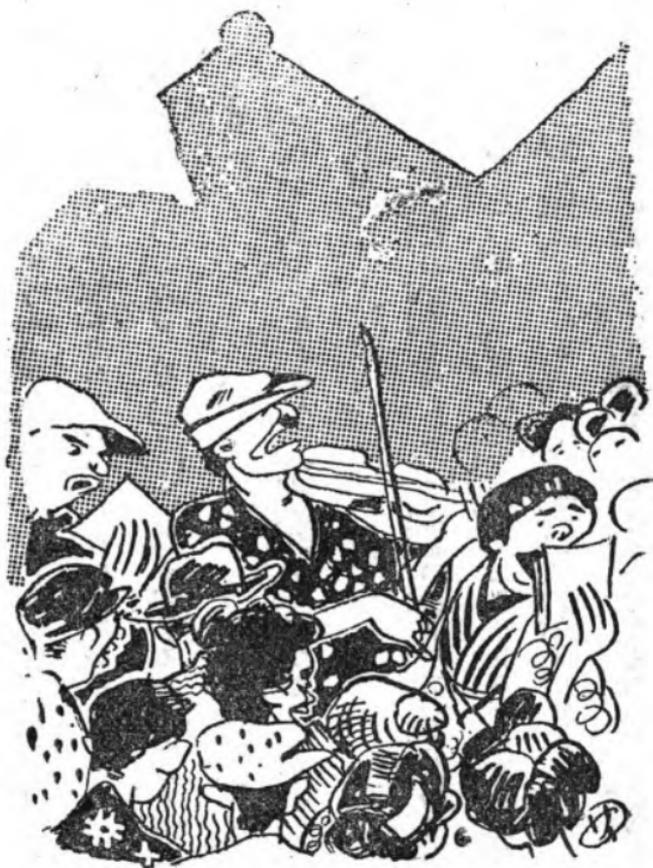
「ソレ饅頭の館が見えるやろ、館は大きいか、小さいか。何、大きい。さうだ館は大きいだろ。饅頭屋の店先へ立つて、この機械で覗いて買ふたら饅頭の買ひ損ひはないぞ。玉子の黄身が見えるだろ、煙草の箱の中に何が這入つてゐる。何、十錢札が這入つてゐる。さうだ、確かに十錢札が這入つてゐるぞ。この小刀の中身はどうだ、錆てるか錆てゐないか、尖がとがつてゐるか、ゐないか。よし、みんなわかるだらう」

と一人で喋べつてゐる。前の方の二三人が頻にその穴から覗いては言はれる儘にうなづいてゐる。若し見えないとでも言はうものなら、お前サンの眼はどうかしてゐるとポロクソヤその隣は理學應用の年當てやら、魔術カードを賣つてゐるが、可成賣行があるらしい。近頃は何でも科學的に胡魔化さな人が承知せんやうになつてしまつた。我輩の小さい時分には、こゝへ覗き店が出てゐた。そして一錢のお客サンを呼んでゐた。今の活動寫眞が際物を作るやうに。かしく寺の小女強姦致死事件、松浦松三郎の捕縛を一種の悲調で唄つた。この覗きの演題には「奴の小萬」もあれば「不如歸」もあつた。「金色夜叉」もあつた。「朝顔日記」から「奥州白石噺」杯もあつた。「日清談判」などは、芝居の「忠臣蔵」ほどに流行つて船場の坊稚や嬢サン達の血を湧かしめてゐた。

いつも日清談判破裂する覗

時代はさうしたものを容れる餘裕をもたなくつた。北門の方から這入つて來たところに館屋が店を出してゐる。

物見阪大の前昔ト一



「サア、年越しやツたら四本で十銭のが、十一本で十銭や。年越しの残りもんやからこんな安いのや、こんだけ賣つたらもう頼んでも賣れへんで、外の残りものは腐るけどこれはチツとも腐らんかといふたら時候が寒いからや」

と愚にもつかぬことを喋べつてゐる。そして一人買ひ手があると、おありがたう——と乞食のやうな聲色を使ふ。

拜殿は森閑としてゐる。薄ボンやりとした御神燈がブラ下つてゐて神々しいのか陰氣臭いのか一寸見當がつかん。

文樂は休んでゐた。錦影繪の定席がなくなつて落語の席あやめ館になつてゐる。もとは反對派の席であつたが、この頃は三友派の連中が出てゐる。我輩の好きな圓枝もゐる。松鶴もゐる。劍舞の一馬も出演してゐる。これでは昔の錦影繪の方がナンボ有難いか知れへん。寶藏の前に唄賣がこの寒いのに四五十人の人を立ててゐる。三十前後の三人連である。中の一人が舊式のハイカラに結で白粉で顔を塗りつぶしてゐる。眼と眉毛の間の接近

した二十七八の女である。彼等の唄つてゐる唄を一つ丈紹介して置こう。

「私の商賣唄で御座います。毎日毎晩店で（これから鴨綠江節になる）銅の御殿の女王のアノ燦子女史傳右衛門に飽がきてアリヤ絶縁狀ヨイシヨ龍介が出来たのでヨツコリヤ身の破滅歸るに又チヨイく歸れぬ柳原家よチヨイく（鴨綠江節終る）とやらなきや其日が送られぬく」

とまアざつと此の通り。一六の夜店で特に名高いのは古本屋の店と植木屋の店であらう。

短歌集に自分のもある夜店出し

夜店のは手につきさうな黒の石

一八

眞實の遊びと云ふものは我輩のやうなヤボな人間には解らんが、近頃のやうな藝者をあそばしてやるのが、ホントの遊びだとは思へない。それに舞ひの手の稀薄な妓に、其處等

をバタバタしらられては埃りが立だけや。大掃除ではあるまいしと聊か憤慨に堪えぬ。併しやう考へて見れば、それもこれもみんなお客サンの罪や。お客サンならお客サンらしく遊べ、ホントに金が泣くぜ。

櫻にはチト早いので九軒の夜は淋しかつた。妓に送られて吉田屋の門口に立つ。森としてゐる。お醫者ハンの玄關のやうに自用車が置かれてある。その奥の方にポンプが半分ほど姿を見せてゐる。内玄關のところが障子張りになつてガラスが切込みになつてゐた。どツか村長サンらしい構へである。

何時まで待つたとて、夕霧サンに逢へるではなし、酒の酔ひがさめる位が落ちやからサツサと見物をして新築の演舞場の横へ出て来た。株式會社ナントカ、デパートメントストアとでもした看板がかゝりさうや。賣子を藝者や舞妓の總出したらやう流行ることやろ。毎日お馴染サンの押すな押すな盛況は請合ひ、一層のこと、さうしたらどんなもんやろかと空想に耽りながら越後町の通りへ出た。

以前なら軒並に店の印の遺入つた行燈がかゝつてゐて、一杯機嫌でなくツても、ヴェールの上から抱きしめられたやうな柔かい感じを與へられた。摺れ違ふ女にも何んとなき、そゝられるやうな快感があつた。

角い行燈が丸い瓦斯燈に變つてから總ての情緒を打ち毀してしまつた。角い郵便箱が丸い郵便箱に變つても矢張り戀の取持ちには仕てゐるのに、サリとはつらいネと叫ばざるを得ない。

それでも越後町は越後町だけの人通りがある。我輩のすぐ前を、どつかの會社員らしい



四人連が肩を組合せて如何にも愉快さうによろけながら行く。

「アレがほんまに八人歩きやわ」

と妓が笑ふ。東へ東へと行く。もう直電車路へ出やうと云ふ處で若い妓と摺れ違つた。

「アラ若旦那少としらしとくんはなはれや」

と兩手を合はせて、斯う腰を落して拜んでゐた。可愛い奴やないか。薄暗いところで、あゝした姿を見せられるとたまらんなア。こんな處を行燈を瓦斯燈にした署長サンに拜ませてあげたいと思ふ。ことわらいでも解つてるやらうけど、この若旦那ッていのは我輩のことぢやない。

それから塀の側へ出た。我輩が小さい時分には、よく夜櫻を見に來たものぢやが今では跡かたもない。駒が勇めば花が散ると云ふが駒が勇み過ぎたのか櫻の木を根こそぎ持つて行つてしまつた。

一 現茶屋と電車のガンガンでは下さらんやないか。どツちにしたつて危険地帯や。氣を

つけて歩かな足をひき千裂られるか、財布をフンだくられるかしてしまふ。兎に角其處を横切つて新町橋の黒行燈へ行つた。何をしに行つたのか聞かなくて解つてるやろ。ソレ「腎精を強くする事神の如し」を買ひに行つたのさ。

「妾な」

「ウム」

「前に籤引で何んぢやか買ひに行く時に、ルーデサツクがあたりましてん。けど何うしても口に出えしまへんさかい、アノ、ソレ何をおくんははれ……風船をと云ひましてん」と妓が云ふ。

「なるほど風船か」

と柴舟クンも我輩も、この名文句に感心してしまつた。

吉田屋へ行かうと洒落れる花の頃

黒行燈半分聞いて出して呉れ

## 一九

地獄の沙汰も、軍備の問題も、藝者が轉ぶのも、みんな金次第である。神サンでも佛サンでもお金があると玄關を張る。玄關さへ張つて置けばそれ相當にお客サンがつくことは醫者辯護士とチツとも變らない。それが當世だといふ人があるかも知れぬが情ない當世になつたものである。

江戸堀の長州大師も金のきれ目が縁のきれ目か、近頃はトンとお客サンが寄りつかぬので全く逼塞の憂き目を見てゐられる。

「三度炊く飯にもこわしやはらかし思ふまゝにはならぬ世の中」

と歎じてゐられるか何うだか知らぬが、昔の全盛時代を偲ばす莫迦に大きな賽銭箱が空しく場所をふさいでゐる。覗きこそしないがこの調子では底があらはに見へてゐることであらう。御利益が急に減つたといふ譯でもあるまい。人間といふ奴至つて薄情者で景氣のよ

い時しか寄りつかぬから策の施しやうがないのであらう。

我輩は相棒の柴舟クンを促して、此のさびれ行く高野寺を訪ねた。江戸堀二丁目の通りから露次のやうになつてしまつた石疊を這入つて行つた。

「これだけの石疊があるんだから大抵は想像が出来るだらう。この邊りはスツカリ待合だつたのだが、今では一軒も残つてゐない。ソラ此處に下宿屋があるだらう。この家だつて普通の家の建て方とは違ふだらう」

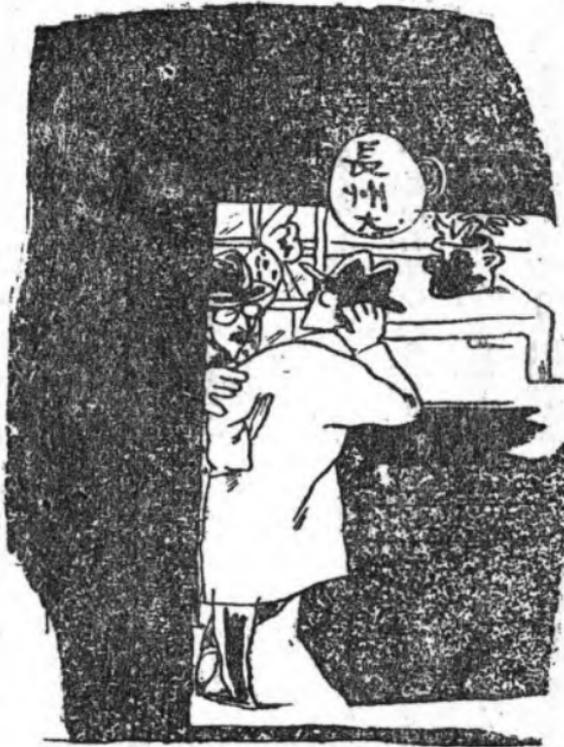
「成る程」

と相棒は大きくうなづく。

何んしろ、この石疊の突き當りは全部長州大師の境内であつたのだ。そしてあの高い屋根がその頃の本堂だ。今では織物屋の仕上工場になつてしまつてゐる。平家物語ではないが、盛者必滅會者定離だ。我輩は何時でも、この建物を見るたびに涙が流れる。

前の院主サン、何んとかして傾きかけた寺運を挽回せうとして、いろん仕事に手を出し

だが、すること爲すこと易の嘴さ、スツカリ費ひ果して二進も三進も行かなくなつた。其



の跡釜に坐つたのが今の院主サンだ。運不運は出家の身にもあるものだ。不動産はもうスツカリ無くなつてゐるのだ。あの大きな建物が一時は手藝種智院といふ女學校になつてゐた時代があるが、それも束の間の夢さ。税務署に貸したり、種

痘所にあてたりしてゐるうちに遂々人手に渡つて工場になつてしまつたのだ。

二人は突當りを左へ外れて、丸い瓦斯燈の高野寺としたバラック式の家へ這入つた。こ

れが俗にいふ長州大師である。お大師サンは物置小屋のやうな處に餘命を續けてゐられる。佛具の古さと大きさは何一つ昔を偲ばさぬものはない。

「世が世であらばと思ふてはるやろ」

と相棒が同情の涙を潑ぐ。

「何ンにしても此の賓頭盧サンや手洗や賽錢箱の大きさを見たまへ。無情を感じるぢやないか。それに此ン那狭ッ苦しい處へ不動サンと稻荷サンと同居してゐられるんだからな。

このお稻荷サンかて元は直ぐ其處にあつて可成大きな店を張つてゐられたのであるが、何ン坪以下のお社は合祀されるといふお布令があつて福島の金毘羅サンへ立退かれたのが北區の大火で焼け出された。それをお大師サンが氣の毒に思はれて呼んで來られたのである。

聞けば聞くほど神も佛もない世の中のやうに思ふ。數年前までは夜店が出てゐたが、あまり賣れないので、三軒になり、二軒になり、一軒しか出なくなつて遂々影も形も無くな

つてしまつた。もとは西の出口の露次の中に三友派の第二此花館があつたが、それも遠うの昔になくなつてしまつた。南無大師遍照金剛。

御不勝手二十一日待ち給ひ

110

堺筋の高麗橋へ來ると、車掌クン一段と聲を張りあげて「三越呉服店前」と叫んでるが大坂にそんな停留所があつたか知らん。眞逆三越の店員が車掌に化け込んで店の宣傳をやつてる譯でもあるまいと思ひながら三越の入口に立つた。

我輩のやうに西洋の勞働服を着服に及んで出掛けると、先づ店先でニユーツと片足を突き出す。すると猫にカンブクロでもかぶせる格好で靴の爪尖から踵までかくれる袋をきせてくれる。ヨシとばかりに更に片足を出す。この時のお客サンの顔を見ると、まるで帝王の位にでもついたやうに反り返つてゐる。この調子で行くと千や二千の端た金の買物は

面倒臭いと云ふやうに見へるが、その實大多數は直にエレヴェーターで屋上庭園へかけあがり浩然の氣を養ふて珈琲一杯に咽喉をうるほし、閉店のベルに送り出される位が落である。

さうかと思ふと、日がな一日アレを引き出し、コレを觸らいさがして何一つ買ひもせず

「あゝ今日はエ、眼の正月をしました」

といふ奥サンや娘サン達もゐる。北濱から船場邊の店員や會社員は三越で晝食をしたり、食後の散歩に來たりしてゐる。かと思ふとワザ／＼アブラを賣にやつて來る連中も少くない。不届きなのはこゝで嬬曳をしたり、人を待ち合はせる場所にしてゐる。

しかし、こんなお客サンばかりではナンボ三越かて一ト月も續かん筈や。處が世の中と云ふものはうまい事拵えてある。一に三越、二に三越、三に三越、三越でなかつたら品が悪いと仰しやる。ソノ躰三越のレッテルが落ちてたら、何處の品や一向御存じのない三越

宗の御婦人方が多数に控えてゐらつしやる。そして三越のマークのついたお買物をシコタマ抱へ込んで電車の中へ割り込む。彼の女達の顔には云ひ合はしたやうに「三越へ行きましてン」と書いてある。我輩

は電車の中で、ソんな婦人達に出逢ふと何時もふき出したくなる。女には三越といふ虚栄心が近代になつて一つ殖えたのだなアと思ふ。まアこんな如來サマがゐられよばこそ三越も救はれるのである。三越以て瞑すべし。

こゝでそれとなく見合をするお客サンもあれば、新郎新婦の御姿に十數金を棄てて行く



お客サンもある。これから春さきになると、地方の團體見物が押しかけて来る。けれどもこれ等は大なり小なりの金を落して行く。萬引も居れば私服刑事も多數に入り込んでゐる。三越は、或る意味に於て、心齋橋筋の小賣店を高く積みあげて、エレヴエーターで客を運んでゐるのだと見れば大した間違ひはない。

時々いろんな催し物をやつては、特種のお客サンを引きつけてゐる。近頃は又、支那料理をはじめた。それがためかどうだか知らぬが八階の食堂のお客サンが殖えた様に思ふ。散髪屋も去年の末からはじめたが散髪が一圓でヒゲが五十錢だ。お客サンは別室で待つことになつてゐる。寫真をうつして、買ひ物をして、食事を済まし、散髪をしてゐるうちに寫真が出来あがるのも此處の特色と云へば云へる。

八階から屋上庭園へ出る。三越氣象臺といふと少し大袈裟に聞えるが天氣豫報をやつてゐる。今日は北西の風で晴一時曇といふ旗が翻つてゐる。天氣はエ、が懐の具合は悪い。何んとかならんものかと思ひながら引きあげた。

三越へ行く友達がいつか出来

三越で逢へば二號を連れてゐる

二一

濠の水は蒼かつた。ボンヤリと濠の端に立たつてたら誰かて身投げと間違へるやろ。あの水の色をチツと見てたら實際飛び込みたうなるのかも知れへん。

大阪城の玄關先には第四師團司令部とした標札がかゝつてゐた。ソコを通り抜けて多門槽の所へ来る。槽といふてもガンジヨウな鐵の門である。原田重吉の玄武門を思ひ出す。

「これやあつたら小銃なんか貫通れへんで、其の邊から薄田隼人が出て來さうやないか」  
 「ヤア、遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ。我れこそは關西方にさるものありと知られたる薄田隼人正兼相なりと大音聲に呼ばはつたりとでも云ひさうだな

ア

と別段覺えとらいでもエ、事はスツカリ暗記してゐる。衛戍監獄の赤煉瓦の塀の上に尖つたガラスの植えてあるのに感心をしながら櫻門から本丸へ這入つた。突當りが有名な蛸石である。

高サ四間半、横六間、蛸ノ形石面ニアラワル、ヲ以テ此ノ名アリトイフ。

徳川氏修繕ノ時備前池田

忠雄侯ノ献ゼシモノナリ

と云ふ立札がしてあるが、何處に蛸の形があらはれてゐるのかトント合點が不可シ。通りかゝつた上等兵を呼びとめて聞く。



「アノ、赤い色のところがさうです」

といふが、ソノ赤い色のところがチツとも蛸の形に見えない。その直横に振袖石といふのがあるが、成る程こつちは元祿袖の形をしてゐる。

「こんな大きな石をどうして運んで來たんやろ」

「日本にはこの石があがるやうな起重機があらへんさうやで」

「この説明は拙いなア、モツと科學的に興味的に書いて置けばいいのに、目方なんか一寸書いとく必要があるぜ」

と無闇に力んで見る。支那人が二三人上の方から降りて來た。

我輩と相棒の柴舟クンは、司令部へ行つて副官の鶴見少佐に會つた。一ト通り用件を陳述する。

「さうですか。それでは紀州御殿を御案内ませう。しかし化物屋敷と云ふのは知りません。そんな事を云つて居りますか」

と逆に聞かれてゐる。卑しくも軍人に對して妖怪を談ずるの愚を思ふてこの件は取り下げ  
てしまつた。紀州御殿には歴代の師團長の寫眞がズラリとならんでゐた。

「殆ど物故されましたが只今の師團長は十六代目です」

と少佐の説明がつく。玉座の拜觀をすませてから司令部を辭した。

二人は天主閣のそこへ行つた。

「ここへ一ばいに建つてたんやろか」

「さうらしいなア」

「割にせまかつたんやなア」

「コレで可成あるぜ」

「さうか知らん」

「一寸風があるなア、ジョフルー元帥の寫眞を見たら外套の裾が翻つてたが……」

と妙なところで感心をする。

「アレが午砲やで」

と變挺な大砲を指さす。こんなところへ何時まで居つても仕方がないので、ソロ／＼引ツカへす。又司令部のところで戻つて来た。もうみんな退出して了つたらしい。小使が掃除をしてゐた。ところが參謀肩章をくつつけた一人の將校が馬を飛ばして来た。司令部へ用でもあつて引ツカへして来たのかと思ふと左にあらず、直に計理部の方へかツ飛ばして去つたかと思ふと又引ツカへして来る。綺麗に掃き清められた處へボカボカと馬蹄の穴がほれる。これをチツと見てゐた小使、掃除の手を休めて

「もう去ぬのんかと思ふたらまだアンナ事をしてんね、ナンボ乗つたかて下手は下手や」と名言を放つ。

「腹が減れへんのやろ」

と柴舟クンが皮肉る。頭のエ、人は兎角技術にかけては拙いのが世間並だ。この將校もそれらしい。この小使をつかまへて化物屋敷を聞く。

「天主閣の向ふの桐の木畑の事だツしやろ、淀君の死にやはつたとこの直横だす」

「何んな化物や」

「なアに蛇やまむしが出るだけだす」

「そやあつたら出雲屋やないか」

と云つて笑つた。

見物の耳へは不意なドンが鳴り

一一一

日はトツブリと暮てゐた。阿倍野橋で市電を乗り棄てた我輩と柴舟クンは火葬場の前で厚司を斃た十五六の小僧が桶の底を叩きながらやつて來るとすれ違つた。

「アレ、棺桶やで」

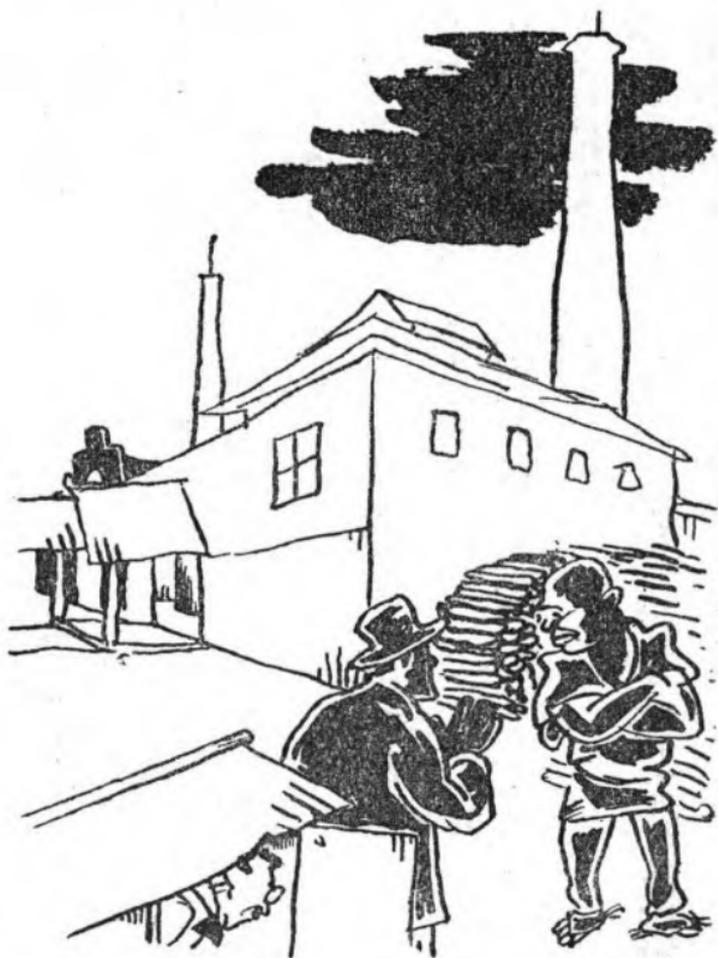
「三ツか四ツのんやな」

とその方を透かして見た。生ビールの樽よか一寸小さいが、砂糖桶よりは少し大きい。桶の職人かて時には無常を感じることもあらうが、あゝして桶の底を叩きながら歩いてゐるのを見ると人間と云ふものは自分の目の前に横はつた問題しか考へられないものらしい。鬼に角死んでは詰らない。死んで花實が咲くものかと云ふが、ほんまに其の通りや。

市立天王寺葬儀所とした厳めしい標札が黒い門の柱にブラ下がつてゐる。表門はもうピツタリと閉ぢられてゐたので横のくぐりから這入つた。事務所に一寸あかりが點いてゐるばかりで人のゐさうな氣配がしない。待合室の方を見たが眞ッ暗であつた。「……六親眷屬あまつりて嘆き悲しめども、更にその甲斐あるべからず……」と最後の引導を渡す焼香場をのぞいて見たが、もう店仕舞になつてゐる。

二人はすぐ背後の變な建物の中へ案内も乞はずに這入つて行つた。誰一人ゐない。かうばしいやうな妙な匂ひがする。人間も一遍は此處の御厄介になんのやが、さうなつたら、美人であらうと、戀人であらうと何んの會釋もあらばこそ、一切合切皆煙だ。大きな西洋

物見阪大の前昔ト一



べつついみたいなものか幾つも並んでる。

「正面が特等で横が一等になつてゐる。ズツと奥の方が二等やろ」

「まるで活動へ來てるやうやな」

「まだぬくいので、一體何時ごろから焼くのんやろ」

以前は十二時から焼いたものやが、流寒で十二時から焼てては、到底も間に合はぬやうになつてから段々早う焼くやうになつたもんや」

と話しながら其處を出ると其の横にもう一軒赤煉瓦の家が建つてゐる。

「これは流寒が流行つた時に建て増したんやな」

「赤煉瓦で、しかもこの建方は龍紋製氷所といふ格好やな」

「こゝも正面が特等で横が一等になつてゐるで」

と市會議員が見學に行つた様に其處等を仔細に見て廻つた。裏手へ出ると新齋場がある。大きな待合室の中には澤山な丸テーブルが並べてあつた。

「何時からでも酒場が出来るぜ」

「やう流行ることちやろ」

と二人は誰に遠慮もないので無駄口をたたく。眞ッ暗な中に立つた柴舟クンが焼場のスケッチを開始する。我輩は用が無いから便所に入る。穢亡が墓地へ出る方の小門を閉めに來たらしい。便所の中から聞いてゐると

「今一人便所へ這入つてまんね。あつちだけ開けといて貰ひまツさ」

穢亡は柴舟クンのスケッチを覗き込んでゐるらしい。やがて又柴舟クンの聲で「晩でも葬式が來ますか」と聞く。

「エ、何時もならまだ／＼來ますが、今日は特別に早仕舞ひです」

「何んでだんね」

「今日は友引です。それでも三十ばかり放り込んで行きました」

チツと聞いてゐると仲々話が荒ツぽい。放り込んで行かれてはたまつたものではない。

コレはウツカリ死ねないと雪隠の中で更に腕を組みかへた。

「おい、大丈夫か」

「大丈夫や」

「ソンならエ、けど、餘んまりながいさかい」

「もう直ぐや」

「大丈夫なら、さうせかんかてエ、で」

雪隠の中と外で話す。流石に俺のやうな者でも相棒やと思へばこそ、用便が長うても案じて呉れるんや。戦友が一本の煙草を分けて飲む位なんでもないと思ふ。それから此處を出て、阿部野の墓地の方へ出かけた。小さな潜りがあるだけだ。墓地の中は實に静かであつた。彼方此方に新佛らしい燈が見へる。中には瓦斯燈が點けてあるのもある。

墓地の中は市區改正をしたやうに大通りが幾つもあった。二人は散歩にでも來たやうに迂路つき廻つた。我輩はウエストミンスター、アペーを逍遙したワシントン、アーピング

を回想した。

「墓にでもブルジョアとプロレタリアがあるんだからいやになつちまふ。この玉垣を見たまへ」

「置き場に困つてゐる銅像なんか墓地へもつて來ればいゝのに」と、いろんな熱を吐く。ポツリ／＼と雨がやつて來た。

友引をいふには餘り貧し過ぎ

二三

千日の「播重」を世間ではもう忘れやうとしてゐる。アレだけの間口がチツとも眼立たない。経営法がまづいのんか、ネタが悪くなつたのか一向流行らない。大日本淨瑠璃女太夫修業場とした金看板の影も日に／＼薄れて行くやうに思ふ。

夜の九時すぎ、我輩と柴舟クンが木戸を潜つた。中の空氣はあまり緊張してゐない。太

夫の横には昔ながらの燭臺があることはあるが中身が電燈になつてゐるので、蠟燭がチツともまたゝきをしない。心を切る必要がなくなつただけ面倒臭くないかも知れぬが、それだけ情緒が失はれてゐた。我輩は矢張り蠟燭の灯のまたゝきの中に新蝶々のゆれるのを見てゐたい。

仙龍が「朝顔の宿屋」を語つてゐたが舊式のハイカラでは幾ら表情タツプりにやつたところで、お國もお染も小春も深雪もあつたものではない。

「あの影を見たまへ」

「ウム僕もあれを見てんね」

と柴舟クンが同じた。金襴に映つてゐる影は頻に揺れて二人の心をやはらかにした。

「向ふにゐてるお爺サンな」

「ウム」

「アレ、堂摺連やで、先刻から一人で手をたゝいてるぜ。それも傍の邪魔にならんやうに



斯う輕う手を合すだけや」

「アノ年齢になつても色氣があると見へるなア」

「出雲屋の肩入と一緒に知れへんぜ」

と、ヒソ／＼話す。高座では「ハイ／＼よう問ふて下さります。御言葉にあまへ御話申すも羞かしながら、元妾は中國生れ、様子あつて都の住居、一ト歳宇治の螢狩に、焦れそめたる戀人と語らふ間さへ夏の夜の……」とあんまり見よい顔でもないのに伸ばしたり縮めたりしてゐた。

「二人とも眼玉松之助みたいに鼻の下が長いやないか」

と漫畫家は鼻の下を氣にしている。我輩は相變らず客筋へ眼を配る。色彩がチツともない。全體に暗い感じを與へられる。これでは流行らないのも無理はない。平場に百二十人しかゐない。大體播重は間口の割に中が狭すぎる。お客サンの階級は商人が多いやうだが殊に老人が多數を占めてゐる。何ンといふても堂摺連が千里の道を遠しとせずして來るやう

でなければ流行らない。

トリは團路の「寺小屋」であつたが、安物のレコードの様にスラ／＼とやつてのけるので、皆んなお終ひまで聴かずに立つてしまつた。牛までも語らぬうちに、二階と横の棧敷の客をスツカリ追つ拂ふてしまつた。タツタ一人東側の棧敷に残つてゐた、三十五六の獺のマントがテレ臭くなつたのか舞臺の方を背にして、口を幽かに動かして首を振つてゐた。

「エライ顔をしよるなア」

とスケツチをしてゐる柴舟クンに私語やくと

「エライ顔をしよんにやない。始めからエライ顔や」

と云ひながら頻にそのエライ顔を寫してゐる。斯うなつて來ると、長年千日前で首をさらしてゐる仙龍や團路も氣の毒なものである。

「みな鼻べちやと云ふよりも鼻が小さいなア、鼻が閑却されてゐよる」

といふ。こんな處で顔の店卸しをされてゐるうちに、團路の「寺小屋」も終りに近づいて來た。いろはの送りになつても、何等の感興を湧かさせない團路に一掬の涙を濺いで我等は外へ出た。浮氣ツばい、どちらかと云へば忘れツばい世間は、もう娘義太夫のながしめに酔ふほどの悠長さをもつてゐない。

一瞥をくれて義太夫語り出し

息子は歌劇播重は親旦那

口説かれることも知つてる女義太

二四

松島の首筋のところを電車が通過つてから、松島橋を渡る雪駄の音は聞かれなくなつたし松の鼻の松は枯れてしまつた。色男を市電で運ぶやうになつてはモウおしまいである。

やつばし東京樓のあつた時分の松島やないと松島らしい氣がしない。あの頃の松島にく

らべると、今の松島は何んだか気が散つていけない。どうして斯んな處を迂路ついでるんだらうかと云ふ氣になる。第一不夜城の櫻筋が間が抜けてゐる。今でも三階や四階の貸座敷がズラリと並んでゐる。博覽會ではあるまいしイルミネーションだけでは流行りさうな道理がない。やつぱし、居稼店が自然でいゝ。人間の思ひついた小刀細工には何處かに面白くないところがある。居稼店の時分には、蟹が自分の穴をめがけて逃げ込むやうに、素見客が右往左往して一種の緊張した空氣を造つてゐたが、今のやうに寫眞の展覽會では、サイダーで散財してゐるほどの興趣も湧かないであらう。

我輩がまだ十一か二位な時分のある夏のこと居候が

「坊ン稚、中之島へ涼みに行きまへう」

と云ふから淡路町の宅を出た。ところが辻まで來ると

「こツちへ行きまへう」

と云ふから

「そつちへ行つたら中の島へ行かれへんで」

と云ふのも構はず、遂々松島へ引ツ張つて行かれた。そして松島橋を西へ渡つてから櫻筋を一軒々々根よく素見して廻る。それが路の向ふ側へ渡る。こちらへ戻つて来る。よくも面倒臭いとも思はずに覗いてまはれたものである。自分にはぐれたら大變だと思つて、一生懸命イソの背後にくツついて行つた。

もう大部前に無くなつたが東側に二葉樓といふ小さな店があつた。こゝで遂々二階へ上つてしまつた。自分から登樓たのか引ツ張りあげられたのか覺えないが、二階へ我輩も一緒にくツついて行つた。そして、ヤリテにあづけられた。ヤリテは我輩に菓子をくれたが我輩は甘いものが子供の時分から嫌ひだつたので喰べなかつた。餘ツ程話らんさうな顔をしてゐたと見えて

「坊ン稚、此方へおいなはれ芝居を見せてあげまつさ」

と云つて女は我輩を連れて戸外へ出た。我輩は云れるまゝにその女についてかどへ出た。



部屋でシヨボリ待たされるよりはましだと思つたのであらう。家数の五六軒も南へ來ると「ヨイト、ヨヤマカ、ヤツチキドツコイシヨ……」と對の浴衣を被た女が五六人並んで手拍子揃へて踊つてゐた。それを暫くみせて呉れた。今にして思へば、中島席へ連れて行かれたのである。江州音頭と鱈揃ひと變つてゐるだけで家の構へは昔の儘であるやうに思ふ。

この中島席の外に立花派演藝部といふのもあるが、これも出雲節を商つてゐる。出雲節とカフェーだけは何處へ行つても流行るものと見える。

「坊ン稚も、もう二三年したらおいなはれや」

とヤリテに云はれて顔を眞ッ赤にしてゐたが、幸か不幸か居候に引ツ張り廻されて一ト暇詰まらない目にあはされたので、遊廓と云ふところを恐ろしい厭なとこだと思ふやうになつた。今でも不氣味さは變らない。

それでも空氣銃でボン／＼敷島やバットを射つたり、生洲のやうなところで、鉈や鯉を

釣つてるところを見てると、何んか愉快な氣持になる。若し遊廓味と云ふものがありとすれば、こんな處にあるのかも知れない。生洲の向ふ側の番臺のやうな處に、姐キが坐つてお客サンに巧に對手になつてゐる。赤い毛糸のシャツを被てる姐キである。

青樓では金瓶樓や第二圓成樓などがいゝ方であらうと思ふが、その方面の事はお先眞暗である。櫻筋の交番の前に細いジメジメした露次があつたが氣分がスツカリ明くなつて、「二鶴」の西店などが出來てゐる。こんなかに花の家といふ半弓屋が、まだ残つてゐたのは一寸嬉しかつた。千代崎橋筋では八千代俱樂部に廣澤席、八千代座などの中にパウリスタやタコエーや等のカフェーが介在して純然たる松島の千日前をなしてゐる。

ひやかすと叱られさうな金瓶樓

二五

雨がバラバラと降る。それでもかまはずに見物に出掛けた。我輩も柴舟タンも少々の雨

なら平氣の平左で濡ながら歩く。こんな心掛けでなけりや到底も見物は出来ないと言ふと仲々勤勉家に聞えるが、その實、兩傘なんか邪魔臭くて持てないのである。その辯、柴舟センセイ何時でもステツキをブラ下げてゐる。別段喧嘩の用意でもないらしい。英國式の紳士を氣取つてんのかも知れないが、それにしては雨の中を濡ながら歩いてるのは大なるホコトンである。何うもかう云ふことに對しては哲學的解釋が下せない。

二人は八軒家の河岸ツぶちへ來た。柴舟クンはソロ／＼スケツチにかかる。我輩は其處等を物色する。我輩の小さい時分の八軒家の面影は少しも残つてゐない。時代の推移と云ふことを認めない譯には行かない。天神橋の下から中の島の公園が顔を出して天満橋の下から將棋島が伸びてゐるので、何んだか大川のやうな感じがしない。川向ふは天満の市場が擴張されてゐて手摺のやうに大根が干されてある。

「何んで此處が八軒家や」

「宿屋が八軒あつたので俗に八軒家」と呼んだので、別に深い意味はない。その八軒の宿

屋で京阪の上り下りのお客サンの世話をしたのだ。その頃は三十石が通ふてゐたのだが段々進歩して我輩の小さい時分には川蒸汽でお客サンを運ぶやうになつてゐた。それが爲めに宿屋かて八軒ではなかつた。八軒家の兩側は宿屋ばかりで埋まつてゐた。

「一膳めし屋なんかあつた」

「そんなものを今見やうと云ふたかてあれへんなア」

「今は京都や伏見から淀川を下つて来て八軒家で宿を取らうと云ふ様な、そんなノンキなお客サンはあれへん。下るのに三時間半上るのに六時間からかゝつたから。それに淺瀬にでも乗りあげて見たまへ、船員が川に降りて船を押ししたりしたんやからな、ズンと時間がかゝつたもんや。京阪電車が出来てから、そんなまどろしいものに乗るやうな物好きなお客サンがあるもんか」

それでも川蒸氣が一艘岸に繋いである。この川蒸氣といふのは、兩側に菊水のやうな車がついてゐて、ガタン／＼と水をかいて行くので如何にも淀川らしいのんびりさがある。



此方の方に廢船が横はつてる。二人は和船の船舷を綱渡りのやうな格好をして、その廢船のどこまで行つた。寒い風が頬を打つ。手がハジカンで到底もペンなんか持てない。

廢船の名は近畿丸であつた。二人はシャイロツクホームズとワットソンのやうに眼をキヨロつかせて廢船の中を覗き込んだ。床も何も取れてしまつて落花狼藉たる有様で何ん等事件が展開しさうにもない。再び和船の船舷を傳ふてあと戻りをしてると一人の船頭らしい男がやつて來た。

「この船へ行きなはんのか」

と訊くと「いゝえ」と云ふ。見てると、廢船の向ふに和船が繋いである。ソコの船頭なのであつた。

「アノ蒸汽の名は……」

「アレは宇治丸だす」

と云ふなり彼方へ行つてしまつた。二人は滅亡び行く八軒家を何時までも見てゐる氣がし

なかつたので河岸から上つた。

其處には大阪貯金支局の堂々たる赤煉瓦が聳えてゐた。此處のソロバン姫はよく「大阪日々」を賑やかにして呉れるから云はばお得意先であると思つた。その東隣の灰色の建物が内務省の大阪衛生試験所で薬剤師の試験をするところである。二人は天満橋の方へ歩いた。右手を見上げると青く錆びたニコライの鐘樓が突ツ立つてゐる。

「アレも滅亡び行くものゝ一つやなア」

と柴舟クンの耳へ私語やいた。

八軒家京の染屋も來たとこころ

二六

「天神サンは、やつぱし鳥居筋から這入つて行くのがホントやで」

「エライいきツちりしてんねな」

「此處の角が饅餡屋であそこに壽司屋があつたが、スツカリ變つたなア」

と二人は一ト昔も二ト昔も以前のことを話して懐舊の情を遣つた。

正門前の東南角にうどんやがある。このうどんやの軒先に一杯になつて八百屋店が出てゐる。店といふても人蔘や大根が桶の蓋や板の上に並べてあるので、賣れるだけ賣れたら此の店は消えてなくなり差し引きうどんやだけがあとへ残る。一寸面白い思ひ付きである。店が出てゐる間はどツちが母家かわからない。鳥居筋では斯んな店をチヨイ／＼見かける。夏祭の渡御を回想しながら正門から這入つて行く。右ツ側へ廻ると白太夫サンが祀つてあつたが、どれが白太夫サンか判らなくなつてゐる。牛だけが幾つも並んでゐる。以前は露出しにしてあつた牛に、みんな金網を被せて手を觸れさせぬやうにしてある。

「シヨームないことをしよるなア。エ、光澤が出てたのに金網なんか張るさかい、埃だけになつてゐるがな」

それでも牛の鼻の尖だけはやつばし光つてゐた。賓頭廬サンと一緒に病氣のある人に撫

で廻はされてゐた時代の牛は體中が光つてゐた。これは青銅の牛であるが外に形は小さいが土で拵へたのがある。頭のとこに佛像が彫んである。

「コレ、人形屋幸右衛門があげたんかも知れへんで」

「エライ無格好に出来てるけど、何ンとも云へん味があるやないか。こんなん欲しいな  
ア

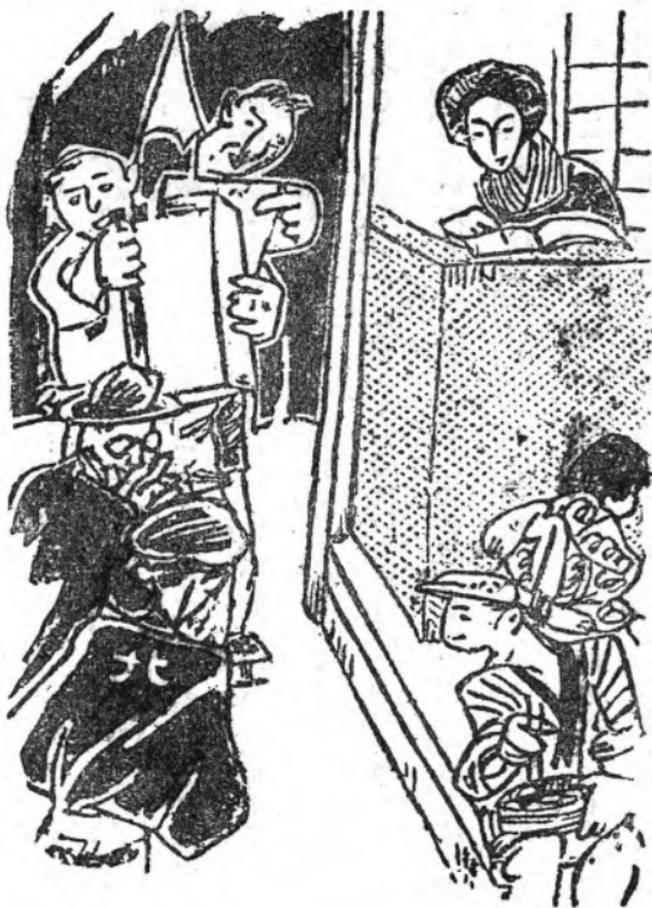
と我輩も柴舟クンも、暫く恍惚れてゐた。

それから西側へ廻る。二十五日やないかて天神サンの境内は、いろんな露し店や香具師で可成の人を集めてゐる。繪馬堂のあつたとこへ来る。繪馬堂はいつの間にか取り拂はれて、怪ツ體な石の燈籠やなんかを並べてる。

「なんと思ふて、こんな莫迦な真似をしようにやる」

と此處でも憤慨して、神馬のそこへ来た。

「無闇に豆ばかし喰はされて、ようシヨクタイしよれへんなア」



と心配をする。

「あの馬一寸も神々しいところがあらへんで……」

と云ひながら隣の木馬を覗いて行く。天神サンの鶴は鴻の池の鶴と一緒に有名であつたがいつでも悠然と構へて鱒をつついてゐた鶴はゐなくなつて、池を埋めてここへ繪馬堂を移してある。中に刺畫がかゝつてゐる。鳥井清光の筆で、江戸の八代目團十郎が奉納したものである。ここに市立圖書館の廻轉式の無料圖書臺が備付けてあるが、普選問題や經濟問題の本が目につく。一冊宛頑丈なクサリでつないであるのに、引千裂つて持つて行かれる。日本は公德心といふものを永遠に持ち合はさぬらしい。その隅の方に天満文庫といふのがあるが、神社としては新しい試みである。それにペンキ塗でないのが嬉しかつた。

裏門へ抜けた。ここには矢場があつたが流行らなくなつたのか廢めてしまつてゐる。

落語の席を右へ廻つて龜の池のそこへ出て來た。待合はもう一軒しか残つてゐなかつた。

あげはの蝶の暖簾が垂れさがつてゐる。宇賀神社へ參詣して雨の茶屋を覗いて、いなり壽

司屋へ這入つた。風呂の桶を小さくしたやうなものに入れてくれる。此處の御寮さんは仲々別嬪や、壽司の賣れ高に尠からず影響することゝ思ふ。何んだか薄暗い家で、大阪にゐるやうな氣持がしない。お客サンは、どツちかと云へば家庭的な人が多い。お婆サンや御寮人や女中や、子供を連れのが大半を占めてゐた。突然洋服を着た二十七八の男が暖簾から首を突込んで稻荷壽計を五百注文した。七圓五十錢と聞いて十圓札で、お剩錢を取つた。

「どんだけ嵩がありますか」

と聞いてゐる。

「まあ、この箱に山盛りおまつしやろ」

と奥の方から鮎の手提を差しあげて見せてゐた。成る程あしたは午の日やなアと思ふ。

天満座は流石芝居だけに舞臺が廻つたといふ洒落でもあるまいが、東向きが西向きになつて、名も天満八千代座と改稱され延重や佳笑が演つてゐた。

稻荷壽司へ寄る約束で御参詣

二七

珈琲店のあくどい色彩に幻惑されてゐる人達には、大原女の前垂のやうな暖簾がブラ下つてゐる「京興」の名を知らないかも知れない。

此店は千日の播重と一緒に間口も廣いし、奥行もズンと深いが一向それが眼立たない。堂々たるパウリスタが蕎麥屋にならうが、銀行にならうがそんなことには頓着をせず昔の儘の姿を見せてゐる。「京興」は腐つても矢張り調である。我輩の小さい時分には丸萬と京興の名は大坂商人や地方客の間に一種のなつかしみを興へてゐた魚鋤屋であつた。そしていろんな小鉢ものを放り出して置いて、お客サンの選擇にまかせてゐた。頗るデモクラチックな料理屋であつた。併しながら今日の京興はもう鹽力の京興である。

二人は暖簾を潜ると編上げと半靴を脱いだ。

「しらつしやう」

といふ聲が三人がかりである。店の先に並んでる下足を見ると三組ばかりのお客サンらしい。それに三人がかりの下足とは何ンと云ふても餘所で眞似の出来ない處があると感心をする。時には車夫溜りのやうに六人位店の隅ツこにかたまつてゐる。勿論そのなかには板場ハンも交つてるのかも知れない。階下はガラシとした板場である。大きな酒樽がサンシ十二挺積みあげてある。大いに意を安んじて例の如く三階まで押しあがつた。

ズラリと並んだ食卓の數の多いこと、實に驚くべしである。ズント向ふの方が霞んで見える。それでゐて西の隅の方に一ト組のお客サンがあるばかりだ。お客サンよりも仲居サンの方が餘計にゐるのも嬉しかつた。偉大な京與といふ感じがする。

「料理屋といふよりもお寺のやうだなア雲水よりも静かだな」

「こんなとこで會をしたらいゝんだ」

「屋體骨が大きいので何處ゆつたりしてゐるなア」



「仲居かてユツタリしてるぜ、別嬪やないけど難がない」

と相棒は女の批評の方を受持つて呉れる。三階から道頓堀を見降ろすと、すぐ向ひ側にうどんやの「井筒」がこれまた昔の名残りをとどめてゐる。その兩隣が有名な天金と粟おこし屋である。

猿芝居で使ふ簀戸のやうな衝立が幾つも並んでゐる。向ふの方の番臺に京與のお婆サンがチヨコナンと坐つて頻に蜜柑を喰べてゐる。お婆アサンの背後には驛賣みたいにビールやサイダーの壺がズラリと並べられてあつた。お婆アサンに昔の話を聞かして呉れないかと云ふと

「ここが悪おまんので話が出来まへん」

と胸のあたりを斯うおさへて見せる。

「心臓が悪うまんのか」

「へエ、こゝが悪うおます」

と何處までもおさへにかゝる。息子の介添へでヤツと話す。

「六十四の時に盜坊が遣入りましたのでビツクリしてから、こゝが悪なつたんだす」  
 このお婆サンはもう七十三である。

昔のまゝの京與にもタツタ一つの變化はあつた。それは鋤焼に炭火を用はずに全部瓦斯にしたことであつた。これは改善でなくて、改悪であつた。京與の軒下を借りてさへ七軒の家族が生活をしゐる世の中ではないか。京與たるもの、もチツと考へるがよろしい。それでも花の頃が来れば京與の店先に、數へ切れぬほどの下駄が並ぶことであらうと思ふ。

相棒の柴舟クンに、お婆サンが盜坊に遣入られた話をすると

「一體何を盗る積りやあつたんやろ。こんな廣い家へ遣入つて、やう戸惑ひせなんだんやなア」

と妙なところで感心する。

京與のお客サンは矢張り商人や地方客が主であるらしい。近頃コドモを連れた夫婦連れ

が多いのはあたりに氣兼ねが不要ないからであらう。

落着いた客は京與で足袋を脱ぎ

見降ろせば角座のはねた人通り

二八

白晝の四つ橋は殺風景で不可。馬力がガタン／＼と橋桁を揺すぶつて行く。自動車は砂煙をたてゝ行く。電車の音が轟々と聞えて来る。斯う數へたると浪花名所の四つ橋も薩張りナツチヨランが、橋の袂に繋がれた「南一」の船に灯が遣入る頃から、四つ橋の光景が一變して来る。暗くなると川幅が幾らか廣く見える。黒くよどんだ川水がチャブン／＼と船舷を打つ。電車が逆になつて流れて行く。夜は總てのものを美化してしまふ。「南一」は改築をして船もズンと大きくなつたし、天井もウンと高くなつた。蠟船のやうにかどんで遣入る必要が無くなつただけ、船らしい感じが薄らいだやうに思ふ。

「床の間なんかを拵へて、軸をブラ下げてゐるのはいいが、船の傾斜まで感定に入れてゐるのは餘ッほどの凝り性やで」

「頭が光ツてるかも知れへん」

と相槌を打つ。物珍らしさうに船舷に立つた。

「水が流れてるぜ」

と柴舟クンが云ふ。

「流れてる〜」

とイガグリ頭のYクンが無闇に嬉しがる。今度は「深いやろか」と覗き込んでゐると、女が出来て困るといふKクンが「真ん中が深うます」と知つてるやうなことを云うので「貴方と妾は深い仲、だがね」と茶化してしまつた。Yクンがハンカチを振出した。浪子のつもりかも知れない。モ一人のYクンは終始一貫して沈黙をつゞけてゐた。

「南一の料理は一流やなア」

と云ひながら箸を動かしてゐた柴舟クン

「コレ、此處で釣れるんやろか」と笑はせる。

南一を出て來山の句碑の前に立つ。枯れた柳がションボリと立つて景をなしてゐる。相棒は例によつてスケツチにかゝる。我輩は南西角にある煙管屋を訪れる。看板には元祖正本家、はりまや榮助としてある。

「へエ、私の方が古くからある四ツ橋の煙管屋です」

「君とこが元祖正本家で隣が根元本家としてあるがどれだけ違ふのだ」と訊く。

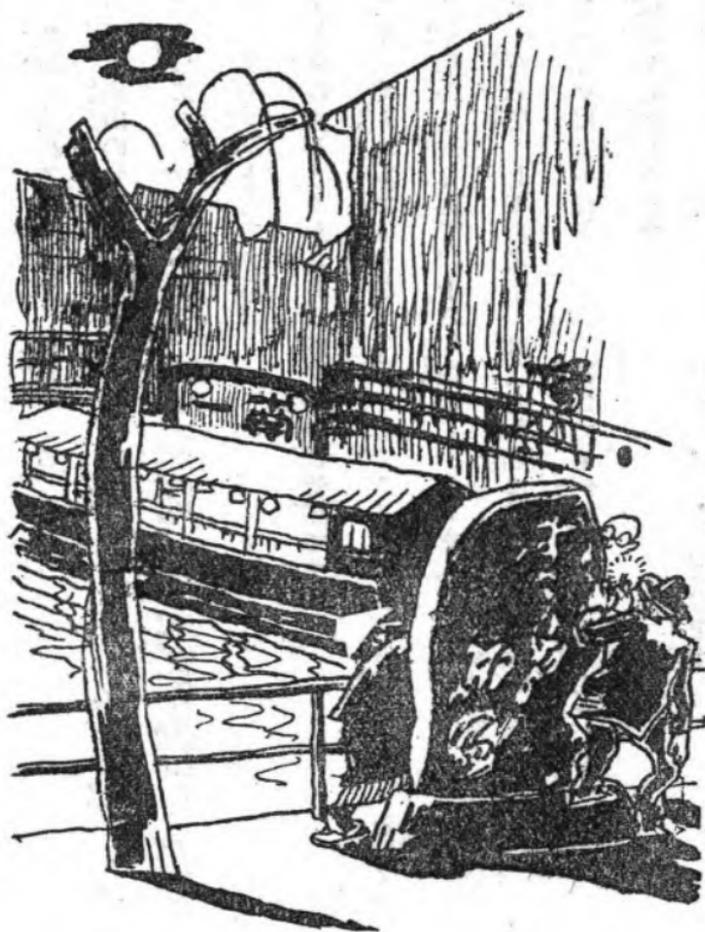
「お隣は京都から來られて、十六年程にしかありません」

「はりまや平八郎としてあるが、此店と親類にでもなるのかい」

「みんなそないに云やはりますが、親類でも何でもありません」

「一體何時から始めたのだ」

「私には判りません、古くからある戸棚の裏には寛永元年としておました」



「その戸棚を見せけて呉れないか」

「それは四五日前に賣りました」

「それは惜いことをしたな。賣つた所が判らないかね、僕が買ひたいが」

「さあ判りまへんなア随分大きなものだツせ」

「大きいほどエ、やないか」

「四ツ橋の煙管屋と淀屋橋の煙草入屋とは親類やないのか、商賣からいふと親類のやうに見えるが」

「エへ、、あれは親類やおまへんが、あの南の方に吟馬堂といふて煙草入を賣つてゐる家がおましたが、それは親類です」

と古い話を一トしきりする。

「宅かて始めからの煙管屋やなかつたので、元は椿の葉をつめて一服づゝ喫ませてゐたんですよ。それがあの朝鮮式な信長と申す煙管を賣るやうになつたのです。今流行つて

ゐる皿さらの小さい松王張まつわちりといふのは手前てまへとこのお祖父サぢいンが發明はつめいしたものです。お祖父サぢいンから私の代わたくしまでもう五代ごだいになります」

といふ。この主人公しゅじんこうは養子やうしらしい口振りくちぶりであつた。

「涼すずしさに四ツ橋はしを四つ渡りわたりけりといふあの來山らいざんの句碑くひは十八年じゅうはちねんの水害すゐがいの時に川かはの中なかへはまつてゐたのを私わたくしの内うちなどが發起人はつぱりじんになつて引あげたものです。あの句くを此方こちへ向ける筈はずではなかつたのです。裏うらにも歌うたがおます」といふ。

「どんな歌うたが……」

「ことさやぐからにもあらず日の本ひのもとの浪花なみはななにあふ四ツの川橋かははしです」

「一體誰だいたれの作つくや」

「芭蕉ばせうだツしやろ」

「芭蕉ばせうがそんな歌うたを作るか知らん」

「いや紫式部むらさきしきぶです」

といふ。この親父さん時代も何も薩バリ御存じがないので辭して出る。句のところへ來て  
燐寸の火で讀まふとしたが誰であるかハツキリせんじまい。面倒臭うなつてその儘にして  
しまふ。電車の四ツ橋へ出て來る。往こか新町、戻ろか堀江、ここが思案の四ツ橋停留所  
とはなんで間がいゝんでしょ」と唄はれてゐたところである。こゝは親不知子不知と云ふ名  
の外には云ふべきこともない。此處では○キのパン屋がチェーンストアの元祖として幅を  
きかしてゐる。

四ツ橋がなけりや來山忘れられ

四ツあるものを數へて夕涼み

來山の話しながら一つ賣り

乗換がマルキのパンをことづかり

川柳漫談

定價壹圓五拾錢



昭和四年七月廿五日印刷  
昭和四年八月一日發行

著者 麻生路郎

發行所 湯川松次郎

大阪府東區備後町一丁目三番地

印刷者 井下精一

大阪府西區阿波座通中目四番地

發行所

弘

文

社

東京市下谷區御徒士町二丁目一  
番地  
振替  
大阪府東區備後町一丁目三番地  
振替  
大阪府東區備後町一丁目三番地

有川 武彦 <small>文學博士</small> 藤井乙男序	今泉 定介	井上 頼文	<small>文學博士</small> 藤井健次郎	河野 清丸
増註 源氏物語湖月抄 (首卷及桐壺卷より明石卷まで)上卷 (澤標 卷より柏木卷まで)中卷 (下卷)	改版 平家物語講義 上卷 下卷	増訂 徒然草講義	改版 國民道徳論	門氏教育法の詳解及批判
菊判 絹ホプリン 極上製 各册 約一千頁	菊判 クロース製	菊判 クロース製	菊判 布製	菊判 布製
各册 定價金五圓 送料金二十四錢	各册 定價金三圓 送料金二十四錢	定價金二圓五十錢 送料金十八錢	定價金三圓 送料金十八錢	定價金四圓五十錢 送料金二十四錢

川合友次郎 吉岡源一郎	森田健太郎	渡邊 英雄	山崎 猛一	堤 達也	堤 達也
最新英文解釋の研究	理論と實際のグラフの新算術精義	教科書連絡 代數の新講義 上の巻 下の巻	分り易い平面幾何學の新講義	模範漢文新解釋	模範國文新解釋
三六判 クロス製	菊 判 クロス製	四六判 洋綴	四六判 洋綴	四六判 クロス製	四六判 クロス製
送料金八錢 定價金一圓五十錢	送料金十二錢 定價金二圓五十錢	送料金十二錢 定價金一圓四十錢 金一圓七十錢	送料金十二錢 定價金一圓五十錢	送料金十二錢 定價金一圓八十錢	送料金十二錢 定價金一圓八十錢

<p>高 島 平 三 郎</p>	<p>文學博士 松本亦太郎</p>	<p>日本地理 歷史學會</p>	<p>双木園主人</p>
<p>精神修養 逸話の泉</p> <p>國民としての修養 社會と修養 修養の眞髓 婦人としての修養 支那聖賢の修養 西洋偉人の修養</p>	<p>現代の日本畫</p>	<p>攝津郷土史論</p>	<p>江戸時代 戲曲小説通史</p>
<p>四六判クローヌ製</p>	<p>菊布 判製</p>	<p>菊 ホプリン製 判</p>	<p>菊 羽二重製 判</p>
<p>普及版 定價各冊 金一圓五十錢 送料金廿四錢</p>	<p>定價金六圓三十錢 送料金二十四錢</p>	<p>定價金三圓八十錢 送料金十八錢</p>	<p>定價金三圓八十錢 送料金十八錢</p>

竹友藻風	有川 武彦	詩歌同好會	葉山 西思	木村 萩村	木村半文錢	宮田 戊子
エツセイとエツセイスト	犬十八題（實は二十五題）	日本詩人選集	和歌作り方新研究	俳句作り方新研究	川柳作り方新研究	昭和 大成 新修 歲時 記
四六判 クロス製	四六判 布製	四六判 脊布箱入	四六判 ホプリン製	四六判 ホプリン製	四六判 ホプリン製	四六判 布製
定價金二圓五十錢 送料金十二錢	定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金二圓八十錢 送料金十二錢

奥中 恒一	遠距離受信 エリミネータ受信機 設計と組立	菊 判 クローズ製	定價金一圓八十錢 送料金十二錢
奥中 恒一	最新ラヂオ組立、修繕、取扱の知識	菊 判 クローズ製	定價金三圓 送料金二十四錢
奥中 恒一	實用無線電話の解説	菊 判 クローズ製	定價金三圓八十錢 送料金二十四錢
奥中 恒一	圖解無線電話受信機の製作及裝置	四六判 クローズ製	定價金二圓 送料金十二錢
奥中 恒一	誰にもわかる無線電話の原理及組立法	四六判 クローズ製	定價金一圓二十錢 送料金十二錢
奥中 恒一	最新ラヂオ受信機の組立と部分品の作り方	菊 判 洋綴	定價金一圓 送料金八錢
秋野榮之助	運轉手助 各種自動車取扱の最新知識 手必携	三六判 クローズ製	定價金二圓 送料金八錢

奥中 恒一	奥中 恒一	奥中 恒一	奥中 恒一	奥中 恒一	奥中 恒一	奥中 恒一
遠距離受信機 設計と組立	最新ラジオ受信機の組立と部分品の作り方	誰にもわかる無線電話の原理及組立法	圖解無線電話受信機の製作及裝置	實用無線電話の解説	最新ラジオ組立、修繕、取扱の知識	運轉手助 各種自動車取扱の最新知識
菊 判 クローズ製	菊 判 洋 綴	四 六 判 クローズ製	四 六 判 クローズ製	菊 判 クローズ製	菊 判 クローズ製	三 六 判 クローズ製
定價金一圓八十錢 送料金十二錢	定價金一圓 送料金八錢	定價金一圓二十錢 送料金十二錢	定價金二圓 送料金十二錢	定價金三圓八十錢 送料金二十四錢	定價金三圓 送料金二十四錢	定價金二圓 送料金八錢

國立岡崎種鶏場長 松川 潔	農學博士 山下脇人 閣 大森清次郎	仁部富之助 千葉 幸藏	松川 大森清次郎	字根太治郎	農學士 今村 猛雄	大森清次郎
松川養鶏法	養鶏の知識	副業養鶏法	片手間養鶏法	理論と 實際 實用養鶏法	三坪養鶏	養鶏三百六十五日
菊判 箱入	四六判 布製	菊判 布製	四六判 洋綴	菊判 クロス製 箱入	菊判 二一〇頁	四六判 二六〇頁
定價金五圓 送料金二十四錢	定價金二圓三十錢 送料金十二錢	定價金一圓七十錢 送料金十二錢	定價金一圓五十錢 送料金十錢	定價金一圓五十錢 送料金十二錢	定價金一圓二十錢 送料金八錢	定價金一圓 送料金八錢

# 家庭叢書

(各冊定價壹圓・送料拾貳錢)

最安全な お産と育兒の心得 醫學博士 小縣 清治 著

簡易家庭醫學と食養生 醫學士 宇野眞彦 市岡冬太郎 共著

分り易く 説明した 日常法律の知識 藤井 克己 著

四季趣味の家庭園藝 松本 一郎 著

圖解 和洋裁縫の仕方 三宅富美子 著

流行型行 子供服の縫ひ方 太田 安子 著

即用席 和洋料理の仕方 本山 房枝 著

素人に 出来る 菓子の拵へ方 春海 元子 著

社交の 心得 禮法と挨拶の仕方 丸山 正 著

口語文 日常書翰文の書方 今村 郁郎 著

主幹 ◆ 麻生路郎  
川柳雜誌

大正三十三年三月三日第三種郵便物認可(每月一回發行)

評論家・研究家・選者等斯界の最高權威を聚む

|| 評論・感想・研究・創作・其他滿載 ||

- ▲本誌が川柳の社會進出を宣言して以來水の低きにくが如き勢ひで川柳が擴がりました。
- ▲本誌は創刊以來初心者の指導に専ら意を濺ぎ多くの後進が進むべき道を拓きました。
- ▲同時に川柳研究家の爲には出來得る限り紙面を割愛して研究發表の機關たる實を擧げて居ります。
- ▲本誌が斯界の最高權威たる榮譽を擔つて居るのも益し偶然ではありません。御購讀をお薦め致します。

本誌	普通號	一部	金參拾錢
定	新春特輯號	一部	金五拾錢
價	八月特輯號	一部	金四十錢
	半箇年前金(特輯號共)		金壹圓八拾錢
	壹箇年前金(特輯號共)		金參圓六拾錢

句作したい人々・研究したい人々の好伴侶

川柳雜誌社

大阪市西區大馬路  
 西區大馬路  
 成住大  
 千代田區  
 通一丁目  
 五丁目  
 丁四丁目  
 七丁目  
 番三〇番  
 番五〇番

本社  
事務所



空

中

畫

一

天